

# 多文化共学短期〔受入〕留学プログラム 2019年度実施報告書

アジア研究教育ユニット (KUASU)  
国際高等教育院 (ILAS)



## 目次

はじめに .....	v
<b>1 多文化共学短期留学プログラム.....</b>	<b>1</b>
1.1 概要.....	1
1.2 多文化共学短期留学プログラム準備.....	1
1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講.....	1
1.2.2 連絡体制と情報共有.....	3
<b>2 実施状況 .....</b>	<b>4</b>
2.1 経済支援について.....	4
2.2 宿舎について.....	4
<b>3 展望 .....</b>	<b>5</b>
<b>1 京都サマープログラム 2019（東アジア+ドイツ） .....</b>	<b>- 8 -</b>
1.1 設立の経緯と目的.....	- 8 -
1.2 プログラムの概要.....	- 9 -
1.2.1 プログラム内容.....	- 9 -
1.2.2 実施体制・教員確保と京都大学学生アシスタントの関与.....	- 10 -
1.2.3 カリキュラムの特徴.....	- 11 -
1.2.4 使用言語.....	- 11 -
1.2.5 成績評価の整備.....	- 11 -
1.3 総括及び今後の展望.....	- 11 -
<b>2 実施体制 .....</b>	<b>- 13 -</b>
<b>3 参加学生一覧 .....</b>	<b>- 14 -</b>
<b>4 研修日程 .....</b>	<b>- 16 -</b>
<b>5 参加学生報告 .....</b>	<b>- 20 -</b>
<b>1 アセアン諸大学学生のための「京都サマープログラム二〇一九」 .....</b>	<b>48</b>
1.1 設立の経緯と目的.....	48
1.2 「京都サマープログラム二〇一九」概要.....	49
1.2.1 プログラム内容.....	49

1.2.2	実施体制と教員確保.....	50
1.2.3	京都大学学生アシスタント（チューター）.....	51
1.2.4	カリキュラムの特徴.....	53
1.2.5	実施時期および期間.....	54
1.3	今後の課題.....	55
<b>2</b>	<b>実施体制</b> .....	<b>56</b>
<b>3</b>	<b>参加学生一覧</b> .....	<b>57</b>
<b>4</b>	<b>研修日程</b> .....	<b>59</b>
4.1	日本語Ⅰ.....	48
4.2	日本語Ⅱ.....	50
4.3	日本語Ⅲ.....	52
4.4	書道.....	54
4.5	科学講義 “Asian Advanced Agricultural Technologies (AAA Tech) for 9 Billion People’s Food Production and Environmental Conservation” ..	56
4.6	人文学講義 “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature” .....	57
4.7	科学講義 “Human Mind Viewed from the Study of Chimpanzees” .....	67
4.8	科学講義 “High Economic Growth and Minamata Disease:The fight forcertificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning” .....	52
4.9	人文学講義「学校教育に見る日本文化の諸相」 .....	52
4.10	人文学講義「現代日本文化のなかの源氏物語」 .....	54
4.11	学外研修.....	55
4.12	共同発表.....	55
<b>5</b>	<b>参加学生報告</b> .....	<b>56</b>

## はじめに

大学の国際化に向けた取り組みは、近年、急速に広がっています。京都大学は、海外の大学との連携強化、海外拠点の整備、国際共同の教育プログラムの開発など、研究・教育活動に関するさまざまな課題に取り組んでおり、国際貢献および国際交流において一定の成果をあげてきました。



2019年の夏、京都大学アジア研究教育ユニットは国際高等教育院と共同で、アセアン諸大学学生と東アジア+ドイツ諸大学学生の受け入れ事業である「京都サマープログラム 2019」を実施しました。本報告書はこの事業の実施内容等についてまとめたものです。国際共同教育プログラムのさらなる拡充が期待されるなか、本報告書は国際交流事業に携わる方々にとって貴重な参考資料になるかと思えます。

アセアン諸大学学生の受け入れプログラムは6度目、東アジア諸大学（もともとは北京大学）の受け入れプログラムは8度目を迎えています。アセアン諸大学と東アジア諸大学の受け入れのプログラムは、別々のプログラムとして実施していました。2016年度から新たな試みとして、アセアンと東アジアのプログラムの一部を合同で実施してきました。両プログラムの一体性も回を重ねるごとに深まってきました。さらに、今年度は東アジア諸大学のプログラムにゲッティンゲン大学（ドイツ）、ミュンヘン工科大学（ドイツ）そしてボン大学（ドイツ）も加わり、本プログラムはより多様な学生が集う国際交流の場となっています。

今回は、アセアン諸大学からは、ベトナム4名、インドネシア3名、シンガポール3名、タイ7名、台湾1名の計18名が、東アジア+ドイツからは、中国10名、台湾4名、香港6名、韓国4名、ドイツ4名の計28名が参加しました。京都大学の短期交流学生としての学生証を発行することで、一時的ではありますが、参加学生が京都大学の学生としての生活を経験できるよう努めました。今後、本プログラムの参加学生たちが国際社会を牽引するリーダーとして活躍してくれることを期待しています。

本年度のプログラムも無事に終わることができました。プログラムの実施にあたっては各方面の方々のご尽力がありました。国際高等教育院の諸先生方、アジア研究教育ユニットの先生方、京都大学各部局の諸先生、国際高等教育院教務掛、教育推進・学生支援部国際教育交流課交流支援掛とアジア研究教育ユニットの事務担当者、滋賀県立大学の先生方、連携諸大学の教職員の方々、短期交流学生の講義や日本語授業を担当していただいた講師の方々、また、サポート役を務めた京都大学の学生、院生たち。こうした方達のご支援ご協力なしには、今回のプログラムは成り立ちませんでした。ここに心より感謝したいと思います。

2020（令和二年）年3月

京都大学アジア研究教育ユニット  
ユニット長 落合 恵美子



# 1 多文化共学短期留学プログラム

## 1.1 概要

多文化共学短期留学プログラムは、京都大学アジア研究教育ユニット（以下、KUASU）と国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（以下、日・日センター）が主体となって展開しているプログラムである。東アジアおよび東南アジア諸国連合におけるトップクラスの諸大学と京都大学との間で短期学生派遣／受入をおこなっている。本報告書は、そのうちの受入プログラムについて報告するものである。

KUASU は、平成 24 年度から開始された文部科学省による大学の世界展開力強化事業のプロジェクト（『開かれた ASEAN+6』による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成）を推進する母体となってきた。KUASU を構成するのは、文学、経済学、農学、教育学、アジア・アフリカ地域研究の各研究科と、国際高等教育院、東南アジア地域研究研究所、人文科学研究所、経営管理研究部である。

多文化共学短期留学プログラムは、前身である SEND プログラム（*Student Exchange - Nippon Discovery Program*）と同様、日本文化、日本社会を「外」の視点から捉えなおすことによって、アジア（および世界各国）と日本とのあいだの相互理解の促進と、互いに共通する課題の発見・解決を目指すことを主眼としている。令和元年度短期受入プログラムでは、以下の表 1 に挙げた対象国／地域からの短期留学生（＝「短期交流学生」）の受入をおこなった。本報告書は、このプログラムの概要・教育的実践・課題について報告する。

表 1 本報告書で扱う短期受入プログラム

形態	プログラム名称（実施期間）	対象の国／地域
受入	京都サマープログラム 2019 （令和元年 7 月 30 日 ～ 8 月 9 日）	東アジア+ドイツ：中国、韓国、台湾、香港、ドイツ アセアン：インドネシア、タイ、ベトナム、シンガポール、台湾（今年度のみ 1 名参加）

## 1.2 多文化共学短期留学プログラム準備

### 1.2.1 全学共通科目「日本語・日本文化演習」の開講

本プログラムに参加する京都大学学生は、プログラム内で日本語・日本文化についての解説や考察を通じて多文化共生に関する理解を深める。派遣プログラムでは、京都大学学生が主体となって派遣先大学で日本語・日本文化についての解説・考察をおこなう。一方、受入プログラムでは、短期交流学生（＝受入留学生）が主体となって京都大学で日本語・日本文化の解説・考察をおこなう。派遣／受入のどちらにおいても、日本人学生と外国人学生の共学が基盤となる。その実践能力を養成するため、平成 25 年度から日・日センターの教員が中心となってリレー式に担当する「日本語・日本文化演習」（全学共通科目：キャリア群）が毎年度開講されている。その概要は、以下の表 2 にしめすシラバスの通りである。

表2 令和元年度「日本語・日本文化演習」シラバス

授業科目名、英訳	日本語・日本文化演習 Japanese Language & Culture		担当者 所属 職名・氏名	前期： 国際高等教育院 教授 河合 淳子 特定准教授 佐々木幸喜 特定助教 西島薫	後期： 国際高等教育院 教授 河合 淳子 教授 長山 浩章 特定准教授 佐々木幸喜
群	キャリア群	分野（分類）	その他キャリア形成	使用言語	日本語／英語
単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度	2019 前期／後期	配当学年	全回生	対象学生	全学向
曜日時限	火2／金3	教室	吉田国際交流会館 第5講義室・共東21		
<b>授業の概要・目的</b>					
<p>本授業では、まず講義で日本語や日本文化の特徴、およびその様々な検討方法を学ぶ。その際、日本文化を広義に定義し、その範囲に日本社会の状況、社会問題をも含んで講義を進めていく。そして、日本語、日本文化、日本の社会状況を紹介する経験とその準備を通して、日本人学生と留学生が共に、日本語、日本文化、社会状況ならびに自分自身が身につけてきた言語や文化、そして自分自身が育ってきた社会の特徴を再発見することを目指す。そして、その過程を通じて、グローバルな視野に立った物の見方・考え方を養うことを目的とする。</p>					
<b>到達目標</b>					
<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語、日本文化、日本の社会状況ならびに自分自身が身につけてきた言語、文化を捉える多様な視点を学ぶこと。</li> <li>・日本語、日本文化、日本の社会状況を紹介し、異なる文化的背景を持つ学生間で議論を行うことによってグローバルな視野に立った物の見方・考え方を身につけること。</li> <li>・母語とは異なる言語による、より効果的なプレゼンテーション及びディスカッションの技法を習得すること。</li> </ul>					
<b>授業計画と内容</b>					
<p>多様な文化を有する人たちとの交流の中で、自国文化や社会的状況を多面的に理解し紹介できることが要請される場面は多い。日本人であっても日本語や日本文化について深い理解をもって解説するためには、言語・文化に意識的に向き合わなければならない。本授業は、日本語や日本文化を意識的に捉え、深い理解に立って他者と見方や考え方を共有できるようなることを目的に、講義を中心としながら、演習・討議を交えて進めていく。</p> <p>講義担当</p> <p>1回目 オリエンテーション &lt;講義担当：河合、長山（後期）、佐々木、西島（前期）&gt;</p> <p>2回目－7回目&lt;講義担当：河合、佐々木&gt;</p> <p>日本語の特徴－（講義）、言語の機能と文化－（講義）、日本語、日本文化、日本社会に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習）</p> <p>8回目－13回目 &lt;講義担当：河合、長山（前期）、西島（後期）&gt;</p> <p>世界の中の日本文化、日本社会の特徴―何をどう伝えるか―（講義）</p> <p>日本文化、日本社会に関するプレゼンテーション準備及び討議（実習）</p> <p>14回目&lt;講義担当：ルチラ、長山、河合、家本（前期）&gt;</p> <p>プレゼンテーション</p>					
<b>教科書／参考書等</b>					
プリントを配布する／授業中に紹介する					
<b>授業外学習（予習・復習）等</b>					
実習、プレゼンテーションの準備として段階を追って随時課題が出される。各自、積極的に準備を行うことが求められる。					
<b>その他（オフィスアワー等）</b>					
海外留学を考える学生を優先するが、これまでとは異なる新しい視点で日本語・日本文化を考えてみようとする学生や留学生の受講も歓迎する。大学間交流協定による短期留学プログラム（東アジア）、ASEAN 短期留学プログラム参加のための推奨科目となっている。					



### 1.2.2 連絡体制と情報共有

プログラムの実施前および実施中に、以下の図1に示すような連絡体制をとった（図中の矢印は情報の往来をあらわしており、太線は教職員が関わる連絡、細線は学生どうし、あるいは学生からの連絡をあらわす）。

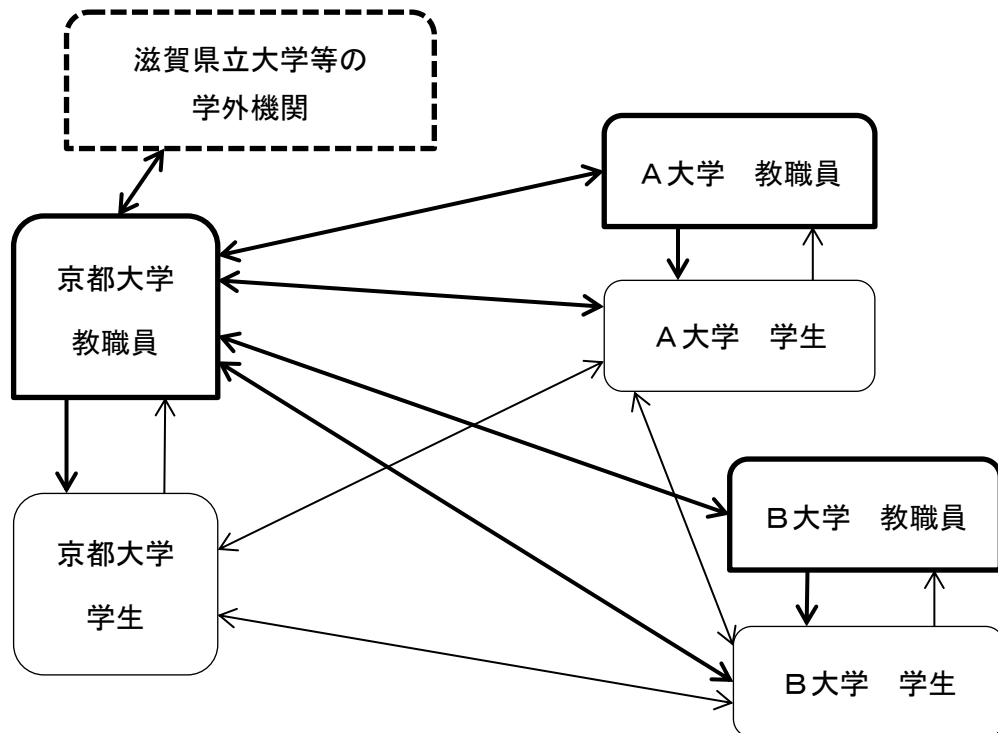


図1 連絡体制の概要

共有した情報の内容は以下の通りである。

教職員－教職員間： プログラムの運営に関する教務・事務的な情報

教職員－学生間： プログラム内容に関する教務・事務的情報

学生－学生間： プログラム内容等についての様々な情報

京都府等の学外機関－教職員： 学外研修に関する教務・事務的情報

情報共有のためのツールとしては、以下のものがあげられる。

電話： 教職員・学生を問わず、幅広く使用

Eメール： おもに教職員－教職員、教職員－学生間で使用

クラウドストレージサービス： ファイル共有のために幅広く利用

LINE： おもに学生－学生間で使用（一部、教職員－学生間でも使用）

他のSNS： おもに学生－学生間で使用

学生間の情報共有の環（図1参照）の形成に適している

また、緊急連絡網を作成し、教職員間での危機管理体制の整備に努めた。緊急連絡網には、i) プログラムの日程表、ii) 参加者の利用フライト情報、iii) 参加者名のリスト、iv) 京都大学を含む各大学の緊急時連絡窓口、v) 参加者の宿泊施設情報、vi) 大使館・領事館情報等を載せた。

## 2 実施状況

### 2.1 経済支援について

本節では、京都サマープログラム 2019 における費用補助状況と学生参加状況の概要について述べる。以下の二項目によって短期交流学生の修学が費用面から支援された。

- ①機能強化経費「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成ー京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラムー」による基幹経費 (京都大学)
- ②令和元年度ワイルド&ワイズ共学教育受入れプログラム事業 (京都大学)

以下の表 3 では、東アジア諸大学とアセアン諸大学の 2 つについて、基本情報と、費目別の費用補助該当者数 (学内/学外研修費・渡航費・宿泊費・チューター費)、各項目の合計人数を、上記 ①～② による費用補助の該当是非と合わせて示す。

表 3 京都サマープログラム 2019 の経済支援概要

	東アジア+ドイツ 中国、韓国、台湾、香港、 ドイツ	アセアン インドネシア、タイ、 ベトナム、シンガポール、台湾	計
実施期間	令和元年 7 月 30 ～ 8 月 9 日		
参加学生数	28 名	18 名	46 名
学内研修費補助	① 28 名	① 18 名	46 名
学外研修費補助	① 28 名	① 18 名	46 名
渡航費補助	0 名	0 名	0 名
宿泊費補助	② 28 名	② 18 名	46 名
チューター費	② (チューター数：18 名)	① (チューター数：16 名)	34 名

### 2.2 宿舎について

今回、東アジア+ドイツプログラムは「旅館 お宿いし長」、アセアンプログラムは「旅館 さわや本店」を宿舎とした。いずれもいわゆる修学旅行旅館と呼ばれる旅館であり、京都大学へは公共交通機関で 15 分以内に位置している。昼敷きで 3 名以上の相部屋であったが、学生たちの満足度は高かった。とくに短期交流学生たちが異なる文化圏の学生たちと寝

食をともにすることで、異文化理解を促進するきっかけとなっている。例年、夏の京都における宿泊場所の確保は、困難を極めていたが、早めに旅館との交渉を始めれば比較的楽に人数分の部屋を確保することができた。さまざまな事情により個室を希望する学生への対応は課題として残るが、宿泊場所確保の有力な手段といえるだろう。

### 3 展望

各プログラム固有の展望については、各章に譲るが、東アジア+ドイツ、アセアンプログラム共通の観点から、他地域への拡大及び運営体制の充実について展望を述べておきたい。現在、東アジア+ドイツ、アセアンの両プログラムは、それぞれの個性を生かしつつ、両者に共通する部分については協力して運営している。共通部分としては、例えば、英語を教授言語とした講義群、日本語授業、京大紹介講義（日本語、英語、中国語の3か国語で提供）、学外研修などが挙げられ、また歓送会も共同で開催している。多様な背景を持つ学生が一同に会して学ぶ機会を提供できており、京都大学学生に対する教育的効果も大きい。今後この方針を継続したい。

今後は東アジア+ドイツとアセアンのプログラムのより密接な連携が必要である。東アジア+ドイツの学生は基本的に日本語初級を受講する。しかし、日本語学習経験のある東アジア+ドイツの学生は、アセアン学生向けに提供されている日本語中級Ⅰ、日本語中級Ⅱ、日本語上級を受講する場合がある。日本語初級と日本語中級の授業内容の間には相当程度のレベルの差があり、例年、プログラム参加前にすでに日本語学習を始めた学生の受け皿となるクラスがない状況である。今後は、日本語初級と日本語中級の間にあたるクラスの開講を検討する必要がある。

また今後を展望するには体制の強化が必要である。プログラムの経験を蓄積し、継続的なプログラム運営が可能となる体制を一層強化していかなければならない。さらにプログラムの参加校に関して自由応募枠を設けるなど、参加学生の国際性を一層高めることを検討してもよいだろう。そのためには、プログラム内容を積極的に大学の内外に発信していかなければならない。またアセアンプログラムは京都大学アジア研究教育ユニット（KUASU）という時限付のユニットを中心として運営されている。学部生を受け入れるこうしたプログラムは、京都大学全体を見渡してもユニークなものであり、参加者、協力教員の評価も高い。中・長期的実施を可能にする運営体制の構築が求められる。

また、学外組織との連携は、両プログラムにとって重要な要素である。今年度は、滋賀県立大学教員の協力を得た。今後も連携の下で、学外組織と本学双方に資する研修内容の開発を行っていく。



第一部  
京都サマープログラム 2019  
(東アジア+ドイツ)

《主催》



京都大学  
国際高等教育院

《共催》



KYOTO UNIVERSITY ASIAN STUDIES UNIT  
京都大学アジア研究教育ユニット



## 1 京都サマープログラム 2019（東アジア+ドイツ）

### 1.1 設立の経緯と目的

今年度（2019年度）、本プログラムは八回目の実施を迎えた。第一回は、2012年8月中旬に北京大学の学生15名を受け入れたことに遡る。これまで、本プログラムは一貫して北京大学で最も人気がある短期留学プログラムの一つとして位置づけられてきた。こうした実績を生かし、より充実したプログラムを実現すべく、2016年から募集先を拡大し、北京大学と同じく大学間学生交流協定校である延世大学校（韓国）、国立台湾大学、香港中文大学の計4校を対象大学とした。2018年には、東アジアから全世界に範囲を拡大する端緒として、ドイツのハイデルベルク大学を対象校に加え、初めて2名の学生を東アジア以外から受け入れた。今年度はハイデルベルク大学の事情によって派遣学生の推薦が行われなかったため、本学のドイツの協定校に対して本学の欧州拠点を通じて参加者を募り、ゲッティンゲン大学、ミュンヘン工科大学、ボン大学からの参加を得た。これにより合計28名を受け入れることとなった。第一回から第八回の今年度まで、合計163名が本プログラムに参加したことになる。

2012年に北京大学を対象にした第一回プログラムを設立した当初、担当者らには次の問題意識があった。「日本と中国は、歴史的・文化的に深く交流してきた大切な隣国であるとともに、経済的にも補完し合う相互依存度の高い関係を築いてきた。しかし、近年は政治的な影響から双方の国民感情は悪化の一途を辿っているといえる。・・・(中略)・・・その根底には日中の人的な相互交流が十分に行われず、互いの差異への理解の乏しさ、対話の基礎となる、国を超えた個々人の信頼関係の希薄さが見え隠れする。一方で、隣国である日本に対する関心は必ずしも低いものではない。本稿の報告者らが中国のトップ大学で行った調査においても、日本留学に関心を持つ学生が一定数存在することが分かっている。しかし、彼らの多くは奨学金、学費、言葉などの問題から、最終的に日本への長期留学を選択肢から外してしまうことが多い<sup>1</sup>。こうした現状から、両国関係を永く維持・発展させるために、将来を担う中国の若い世代に少しでも日本の実像に関する理解を深めてもらいたいと考え、まずは短期受入れプログラムを実施するようになった。<sup>2</sup>」

上記の引用に見られる状況は、一時の政治的関係に左右されない、人的な相互交流の必要性そして個々人の信頼関係の構築の重要性を示している。そのような中で、2018年度までの本取組（第一回～第四回北京大学サマープログラム、規模を拡大し改称して実施した第五回から第七回「京都サマープログラム」）は大きな成功を収めてきた。参加学生たちは、日本への理解を深めると共に、ソーシャルネットワーキングサービス（SNS）等を通じて、周りの人々にもその情報を発信し、参加学生や彼らの情報に触れた学生の中から、日本への長期留学を志す学生が出てきている。

---

<sup>1</sup> 韓立友・河合淳子（2012）「日本の大学における留学生受入れ体制の問題点及び解決策の探索：京都大学におけるアドミッション支援オフィス導入の背景と効果」『京都大学国際交流センター論叢』第2号：37-55.

<sup>2</sup> SENDプログラム 2015年度受入実施報告書「京都サマープログラム二〇一五」p. 6.

多様な文化的背景を持つ学生が集うことにより、来日学生はもちろんのこと、本学学生にとっても一層豊かな教育環境の実現を目指す。このことは、将来、京都大学が国際的な短期留学の拠点、ないしはアジアの文化、社会に通じ、その発展に寄与できる人材の育成拠点としての存在感を高めることにも繋がるであろう。

最後に、本プログラムの特徴の一つに、地域との連携がある。第一回プログラム開始前の2011年に京都府に対し、短期留学生受入れ事業を京都大学と協働で行うプログラムの提案を行った。こうした経験から、地域との緊密な協力体制は、本プログラムに「京都ならではの要素を加える非常に重要なものである」と捉えてきた。

## 1.2 プログラムの概要

### 1.2.1 プログラム内容

本プログラムの内容は、以下の五つの部分に分けられる。

一点目は、京都大学での講義である。毎年講義相当の教員は変わるが、各部署の教員に国際関係、歴史、文学、農学、社会学など各教員の専門に関わり、且つ専門外の学生にも理解される「京都、京大ならではの」の内容を含む講義を依頼した。教授言語は英語である。

今年度は、京都大学高等教育院 松沢哲郎特別教授による「チンパンジー研究からみた人間の心の進化」/ “Mutual support:Evolution of human viewed from the study of chimpanzees”、国際高等教育院 湯川志貴子准教授の「日本古典文学に見る日本人の美意識」/ “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”、農学研究科 近藤直教授の「人口90億人時代のためのセンサー技術に基づく食料生産と食品ロス削減」/ “Sensing Technology Based Food Production and Food Loss Reduction for 9 Billion Global Population Time”、アジア・アフリカ地域研究研究科附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター 飯田玲子特定助教の「高度経済成長と水俣病」” High Economic Growth and Minamata Disease :The fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning” を提供した。

二点目は、日本語を教える講義の提供である。本プログラムは、募集の段階では日本語能力を要求しておらず、すべて英語で受講できるようになっている。しかし、以前のプログラム参加者から、日本語学習を希望する学生が少なくなかった。そのため、2016年度（平成29年度）より、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センターに講師紹介を依頼し、基礎日本語のクラスの提供を開始した（担当：赤桐 敦）。また中級、上級の日本語能力を有する参加学生には、同時期開催の「京都サマープログラム二〇一九（アセアン）」と連携して対応してきた。今年度も同様の状況が予測されたため、募集の段階から、本プログラムでは日本語学習のため4レベル（初級、中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級レベル）を提供することを明示した。来日後のプレイメントテストと履修相談の結果、履修者構成は以下の通りとなった。どのレベルも、語学学習に適正な人数で構成された。



日本語クラスのレベル別受講者（2019）

レベル	北京 大学	香港 中文 大学	国立 台湾 大学	延世 大学校	ゲッティン ゲン 大学	ミュンヘン 工科 大学	ボン 大学	合計
初級	3名	5名	2名	1名	0名	0名	0名	11名
中級 I	4名	1名	1名	2名	1名	1名	1名	11名
中級 II	2名	0名	1名	1名	0名	0名	0名	4名
上級	1名	0名	0名	0名	0名	1名	0名	2名

三点目は、日本社会への理解を深める体験実習である。琵琶湖疎水散策、京都に本社を置く先端技術会社のナベル、国宝彦根城、滋賀県立大学提供の琵琶湖調査船での湖上調査など京都府内外の各地域の視察や見学を京都大学の日本人学生と共同で行った。

四点目は、学生交流である。京都大学から選抜された 18 名の学生がサポーターとして積極的に参加した。サポーター学生たちは参加学生とともに講義を受講し、キャンパスの案内、生活相談を行った。本年度は、サポーター学生によって、ナベル、パナソニックなどいくつかの見学や実習も企画・実施した。企業との事前交渉、日程調整、当日の引率、翻訳などを含め、教員の指導の下、すべての業務を自ら行った。また日本人学生とサマープログラム学生との交流に限らず、中国、韓国、台湾、香港、ドイツの学生同士、さらには同時開催のアセアンプログラム学生たちとも交流を深めた。学生たちは、自主的にお互いのきずなを深め、プログラム終了後も SNS で交流を続けている。このプログラムは留学生に限らず、サポーターとして参加した京都大学生にとっても、異文化理解能力を養い、外国語コミュニケーション能力を高め、国際性を涵養する貴重な体験となっている。

五点目は、日本の高等教育への理解及び今後の京都大学への大学院留学を呼び掛けるために、担当教員らは京都大学の自由な学風、研究・教育体制、留学手続き、奨学金情報等に関する京都大学紹介講義を英語、日本語、中国語で、別々に行った。

#### 1.2.2 実施体制・教員確保と京都大学学生アシスタントの関与

現段階では、国際高等教育院の教授・准教授等の教員 4 名、事務スタッフ数名を中心として、カリキュラムの開発、企画及び実施を行っている。講義は基本的に京都大学各学部・研究科等の教員に依頼しており、ボランティアとして講義の提供を受けている。また、京都大学の学生も 18 名ほどがコアメンバーとして参加し、京都大学の講義以外に、イベントを企画したり、サマープログラムの学生を案内したりしている。これらコアメンバーには一定の謝金を支払っている。

### 1.2.3 カリキュラムの特徴

本プログラムは、日本の政治、文化・伝統、歴史、社会、環境・農業問題などを理解してもらう以外に、海外における日本の大学のプレゼンスの向上、参加後の日本への長期留学へ繋げる足掛りとしての役割を目的としている。したがって国際関係、歴史、文学、農学、社会学など各分野の教員による教養的講義を受けること、日本の文化を体験すること、日本の企業の見学、日本人学生と交流することを特に意識したプログラム構成となっている。

### 1.2.4 使用言語

本プログラムでは、参加者を広く募るため、募集対象大学に在籍する学生であれば、専攻を問わず且つ日本語能力を問わない。むしろ日本への留学経験のない応募者を歓迎している。本プログラムにおける講義は基本的に英語で行った。企業への見学、学生交流の際には、英語、日本語、中国語、韓国語、ドイツ語などが使われていた。

### 1.2.5 成績評価の整備

従来より京都大学からの単位付与は行われていないものの、成績表及び修了証を交付してきた。成績表及び修了証に基づき、大学によっては、単位として認めているところがある（北京大学、延世大学校）。昨年度より成績評価を整備し、継続している。出席・参加態度 30%、日本語クラス 30%、最終発表と最終レポート 40%の合計で評価することとし、素点及び評語による成績評価を行った。評価はプログラム担当者である国際高等教育院の韓立友と河合淳子が行った。（資料 1、2 参照）

## 1.3 総括及び今後の展望

2016 年度に受入れ対象大学を東アジアまで拡大し、昨年度さらにドイツまで拡大し、本プログラムは新たな段階に入っている。今年度はドイツの学生 4 名を含めて、28 名を受入れた。また昨年度と同様、「京都サマープログラム」アセアンプログラムと同時に開催することにより、講義を充実させ、より多様な学生の交流機会を提供している。参加学生の満足度は高い。

京都が持つ日本の伝統文化・歴史、京都大学が持つ世界最先端の独創的な研究資源は、世界中の人々を惹きつける魅力がある。本プログラムのような短期留学プログラムを世界のトップ大学の学生に提供することで、日本の政治、経済、文化、歴史などについて発信できるとともに、優秀な留学生の誘致、世界における日本の大学のプレゼンスを高めることが期待できる。また、京都大学でも欧米の一部の大学と「交流協定に関する不均衡」問題が存在することから、こうしたプログラムは日本人学生の欧米への派遣を拡大し、「不均衡」を解消する対策の一つとしても考えられる。昨年度初めての試みとして、ドイツのハイデルベルク大学から 2 名の学生、今年度はゲッティンゲン大学、ミュンヘン工科大学、ボン大学から 4 名を受け入れた。現在の対象校をさらに米国等拡大し、世界のトップ大学の学生を広く受け入れる予定である。

今後の課題として、(1) 実施体制、(2) 資金の獲得、(3) 本学の全学教育における位置づけの検討があげられる。

まず、(1) 実施体制についてであるが、教育面と運営面から述べたい。教育面では、京都大学が提供する講義の講師に関する問題がある。現在は、京都大学の教育及び研究特色を生かせるよう、カリキュラムの内容によって、基本的に京都大学の各研究科・研究所の教員にボランティアでの講義を依頼している。しかし今後、規模が拡大していくにつれて講師の負担が増えることが予想される。講師に対する謝金など、質の高い講義を続けていく体制の構築が急がれる。一部の講義を他大学、さらには海外の教員に依頼するといったケースも検討すべきである。

運営面で、昨年度から派遣職員一名を雇用した。同職員は、先方大学・学外研修受け入れ先とのやり取り、ビザ等の学生の来日に関わる手続きの遂行を担当した。国際高等教育院の事務、担当教員が連携し、協力してプログラムを遂行する体制が徐々に整備されてきていることは大きな成果である。来年度以降については、今回の成果を生かし、将来の発展の形態を意識しつつ、早い段階で体制を確定する必要がある。

次に(2) 資金の獲得についてであるが、本プログラムは2つの学内資金、すなわち①平成31年度ワイルド&ワイズ共学教育受入れプログラム事業及び、②アセアンプログラムと共同で実施することにより、機能強化経費「世界最高峰の現代アジア・日本研究の教育研究拠点形成 一京都大学アジア研究クラスターと国際連携大学院プログラム」の支援を受けて実施している。これらの資金により、現在は参加者全員に申請費用や学費の免除を行っているが、今後希望者が増加すれば、講師への謝金、プログラムの企画に関する京都大学の学生への謝金も増加する。世界の他大学で実施されているように、一定の学費免除枠外の参加希望者には学費を支払う形での参加を受け入れるということも検討に値する。学生交流の実態に基づき、参加大学毎に学費免除枠を計算したうえで、予算を超過する場合は学生に学費を要求する必要が生じることもあるだろう。このような運営を可能にする体制を構築すべく、全学的な組織と連携しつつ、学内のリソースを生かす必要がある。また、現在、①の配分可否及び配分額の決定は5月半ばになるまで判明しないため、プログラムの実施の決定がそれまで行えず、準備が遅れがちである。そのため予算的裏付けが少しでも早く行えるよう国際高等教育院に検討を依頼しているところである。

最後の(3) 本学の全学教育における位置づけについては、前項1.2.5で述べた通り、成績評価の方法を整備したことが今年度の成果として挙げられる。前述の通り、北京大学や延世大学校のように単位認定している大学があり、他大学においても検討が開始されている。本学においても引き続き検討を進めたい。また、学生アシスタントのリストから分かるように、本プログラムには多様な学部から多くの京都大学学生が関わっている。今年度の応募者は定員の2倍を超えていた(39名)。彼らには実務上の補助(例えばサマースクール参加者との事前連絡(学生の視点による必要情報の提供、質問への回答)、宿舎とキャンパスの案内、文化活動等の企画・実施、来日中の生活上のアドバイス)が求められると同時に、当プログラムで提供される講義を受講することができる。京都大学学生との交流に対する参加学生の満足度の高さは後掲の報告文にうかがい知ることができる。本プログラムを通じて、京都大学学生の国際性が涵養され、企画能力が向上していることを実感するが、それをどのように評価し、本学の教育、特に全学教育に位置づけていくか。すでに、世界のトップ大学では、こうした短期プログラムを受入れ大学側の学生の教育の一環として捉え、単位認定を行っているところが少なくない。今後、本学においても議論を深めていきたい。

(文責：韓 立友・河合 淳子)

## 2 実施体制

京都大学

実施責任者

国際高等教育院長／教授 宮川 恒 (MIYAGAWA Hisashi)

担当教職員

国際高等教育院・教授 河合 淳子 (KAWAI Junko)

国際高等教育院・准教授 韓 立友 (HAN Liyou)

国際高等教育院・准教授 家本 太郎 (IEMOTO Taro)

国際高等教育院・准教授 湯川 志貴子 (YUKAWA Shikiko)

学際融合教育研究推進センター・  
特定助教 西島 薫 (NISHIJIMA Kaoru)

国際高等教育院・教務掛掛長 若月 和也 (WAKATSUKI Kazuya)

国際高等教育院/国際教育交流課  
短期プログラム担当 山口 聖佳 (YAMAGUCHI Kiyoka)

協力教職員等

国際高等教育院・准教授 青谷 正妥 (AOTANI Masayasu)

高等研究院・特別教授 松沢 哲郎 (MATSUZAWA Tetsuro)

大学院農学研究科・教授 近藤 直 (KONDO Naoshi)

アジア・アフリカ地域研究研究科・  
特定助教 飯田 玲子 (IIDA Reiko)

国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター・非常勤講師

下橋 美和 (SHIMOHASHI Miwa)

浦木 貴和 (URAKI Norikazu)

白方 佳果 (SHIRAKATA Yoshika)

京都大学大学院工学研究科附属工学基盤教育研究センター・非常勤講師

赤桐 敦 (AKAGIRI Atsushi)

学外協力教員

滋賀県立大学 環境科学部 准教授 後藤 直成 (GOTO Naoshige)

### 3 参加学生一覧

東アジア+ドイツ 短期交流学生/ Short-Term International Students

氏名 (Name)	大学 (University)	専門 (Major)	学年 (Year)
WANG Yunhong	北京大学 Peking University	Theoretical and Applied Mechanics	2nd
KONG Yuye		Journalism	M2
SUN Xuan		Law	M2
ZHANG Xinyu		Higher pedagogy	M2
WU Tianyu		Physics	1st
QIU Kanghua		Korean	1st
ZHU Zhunaer		Asian-African language and literature	M1
YE Jikai		Theoretical and Applied Mechanics	3rd
ZHANG Nuoya		Chinese language and literature	2nd
CHEN Zhulanxiang		French	1st
Cheng Yun	国立台湾大学 National Taiwan University	Chemical Engineering	3rd
Lee Wen Hsuan		Chinese Literature	2nd
Teng Yu Hua		Law	2nd
Wu Huan		Business Administration	2nd
Cheng On Ki	香港中文大学 The Chinese University of Hong Kong	Department of History	1st
Choi Chun Wai		Department of History	3rd
Wong Chin ham		Department of History	2nd
Cheng Pui On		Chinese Language and Literature	3rd
Li Pui Kwan		Integrated BBA	2nd
Ng Yung Ching		Global Economics and Finance	3rd
Jeayoun Jeayoun	延世大学校 Yonsei University	Comparative Literature and Culture	4th
Ryu Iihwa		Culture and Design Management	2nd
Nguyen Phuong Thi Lan		Asian studies	3rd
Ahn Hyein		Creative Technology Management	2nd
Jelinsky Julian	ゲッティンゲン大学	Humanity and Social Sciences	M2
Mauersbeger Christopher	ミュンヘン工科大学	Electrical and Computer Engineering	3rd
Usbek Artur		Mechanical Engineering	
Becker Viviane	ボン大学	Intelligent Interaction Systems	M2

氏名 (Name)	大学 (University)	学部・研究科 (Faculty / Graduate School)	学年 (Year)
勝村 瑠海 Katsumura Rumi	京都大学 Kyoto University	経済学部	2年
有山 竜太郎 Ariyama Ryutaro		医学部	1年
中島 大知 Nakashima Taichi		文学部	2年
近藤 里莉 Kondo Riri		農学部	3年
末益 夏花 Suemasu Natsuka		経済学部	2年
松本 国朗 Matsumoto Kunio		工学部	2年
江波 悠介 Enami Yusuke		医学部	1年
葛本 真子 Kuzumoto Mako		工学部	3年
金 洸賢 Kim Gwanghyun		文学部	1年
小川 誠人 Ogawa Makoto		工学部	2年
矢澤 西夏 Yazawa Sana		教育学部	4年
道又 慧太 Michimata Keita		経済学部	2年
田中 理奈 Tanaka Rina		農学部	3年
佐藤 美帆 Sato Miho		文学部	2年
嶋田 涼 Shimada Ryo		工学部	4年
小早川 仁志 Kobayakawa Hitoshi		法学部	1年
宮本 拓実 Miyamoto Takumi		医学部	3年
岡田 彩花 Okada Ayaka	医学部	2年	

#### 4 研修日程

日程 Date	プログラム内容 Contents	場所 Place	担当 Responsibility
7/29 (月)	Arrival in Japan Hotel Check-in	KIX Oyado Ishicho	
7/30 (火)	9:00-10:00 Opening Ceremony & Orientation	Yoshida Intl. House Room 1, Kyoto Univ.	河合教授、韓准教授 Prof. Kawai, Assoc.Prof. Han
	10:00-11:00 Test for placement		
	11:15-12:00 Campus Tour	Kyoto University	
	13:30-16:30 Stroll around The Lake Biwa Canal	Keage area, Kyoto city	
	17:00 Announcement of the place, ent test result	Yoshida Intl. House	河合教授、韓准教授 Prof. Kawai, Assoc.Prof. Han
7/31 (水)	8:45-10:15 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
	10:15-11:00 Interview for placement	Yoshida Intl. House	河合教授、韓准教授 Prof. Kawai, Assoc.Prof. Han
	11:00-12:30 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
	14:00-15:30 Lecture I:Science	KUINEP Lecture Hall	Prof. N. Kondo
	16:00-17:30 Lecture II:KU Intriduction	KUINEP Lecture Hall, Int' l Multipurpose Hall, Conference Room	河合教授、韓准教授、西島助教 Prof. Kawai, Assoc.Prof. Han, Assist.Prof Nishijima
8/1 (木)	8:45-10:15 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
	10:30-12:00 Lecture III: Japanese literature	KUINEP Lecture Hall	Assoc.Prof. S. Yukawa
	14:00-15:30 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata Akagiri, M. Shimohashi,
	15:45-17:15 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata Akagiri, M. Shimohashi,
8/2 (金)	8:45-10:15 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
	10:30-12:00 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
	14:00-17:00 Corporate Tour: NABEL		
8/3 (土)	8:45-10:15 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
	16:30-18:00 Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata

8/4 (日)	Activities and/or cultural visit with KU students		
8/5 (月)	<u>9:00-18:00</u> One-day Trip to Shiga		
8/6 (火)	<u>9:00</u> Gathering at Oyado Ishicho Lobby		
	<u>11:00-13:00</u> Corporate Tour: PANASONIC Museum		
8/7 (水)	<u>8:45-10:15</u> Japanese language Level 2-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
	<u>10:30-12:00</u> Japanese language Level 1-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:A. Akagiri, M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
	<u>14:00-15:30</u> Lecture IV:Sciences	Yoshida Intl. House	Prof. T. Matsuzawa
	<u>16:00-17:30</u> Japanese language Level 2-4	Yoshida Intl. House	Lecturer:M. Shimohashi, N. Uraki, Y. Shirakata
8/8 (木)	<u>8:45-10:15</u> Lecture V: Japanese Modern History	Yoshida Intl. House	Assist.Prof. R. iida
8/9 (金)	<u>13:30-15:30</u> Presentation Session	Yoshida Intl. House Room 3	M. Aotani, Assoc. Prof., J. Kawai, Prof., L. Han, Assoc. Prof.
	<u>16:30-20:00</u> Completion ceremony & Farewell party	Yoshida Intl. House Room 3, Cafeteria	H. Miyagawa, Prof., J. Kawai, Prof., L. Han, Assoc. Prof.



**About the assessment for  
“Kyoto Summer Program for East Asia and Germany Students 2019”**

Institute for Liberal Arts and Sciences, Kyoto University

Dear Participants,

The assessment of “Kyoto Summer Program for East Asia and Germany Students 2019” will be done in the following manner:

- |  |     |
|--|-----|
| (1) Attendance and participation in lectures and activities<br>(including Classwork-lecture, Off-campus study visit, On-campus program,<br>Opening/closing and wrap-up class session.) | 30% |
| (2) Japanese language class  | 30% |
| (3) Presentation and <u>Final report*</u>  | 40% |

\*About the Final report

[Due] The final report is due on August 24th, 2019.

[Topic] Write BOTH 1 and 2 below.

1. **General impression** of the program 300-500 words
2. **One specific topic** that you have been particularly interested in during this program:  
What you have learned about the topic, reasons why you became interested in the topic,  
what additional investigation you have done about the topic, and so on. (Examples of  
topics from former students include daily use of technology in Japan, use of AED  
(Automated External Defibrillator), comparative study about manners, etc.) 300-500  
words

[Format]

Write your full name and the name of your home university at the top of the report.  
The report should be typed in a WORD document, single spaced. See the backside of  
this paper.

[Language]

English

[How to submit]

Please submit to the report to your home university by the deadline. You will receive  
information from your university about how you should submit the report.

**ACADEMIC TRANSCRIPT**

Student : \_\_\_\_\_  
 Course : Kyoto Summer Program 2019  
 Period : July 30, 2019 to August 10, 2019  
 Evaluation : Attendance and participation in lectures and activities (30%),  
 Japanese language class (30%), Presentation and final report (40%).

This certifies that Cai Jiahong has attended the above-named program and received the following evaluation.

## Marks

Attendance and participation in lectures and activities	____/30
Japanese language class (Elementary)	____/30
Presentation and final report	____/40
-----	
Overall	____/100
Evaluation	____

Note : Evaluation Scale    A+ : 100-96    A: 95-85  
                                   B : 75-84    C: 74-65  
                                   D : 64-60    F: below 60

Signature \_\_\_\_\_  
 MIYAGAWA, Hisashi  
 Director  
 Institute for Liberal Arts and Sciences  
 Kyoto University

## 5 参加学生報告

Yunhong , WANG  
Peking University

### 1. General impression about the program

Among this 12-day program, I had experienced and gained a lot. Though there are buds of words and emotion that can not be written down I would like to express, due to the limits of space, I only talk about two points that impress me most.

Firstly, I must show sincere gratitude to all the teachers, staffs and supporters without whom I wouldn't have spent such a wonderful period. Thanks for your introduction, through which I have a throughout understanding about how Kyoto University has been stuck to liberty and prominence and how beautiful and archaic Kyoto is. Thanks for your companion, I learned a lot from communicating with you and broadened my eyes. I acknowledged that your oral English is not so bad as it is a stereotyped image in China, well, that's only a joke. Not for your guidance, I would not have acknowledged so much about Kyoto's cate --- chances are high that I may rely on cafeteria and Hand-Pulled Noodles everyday, in fact, I did this when I was in Tokyo, tightly succeeded the day when we had a farewell. Thanks for your patience. I have to admit my oral English and Japanese are both not so good, which may cause confusion and trouble to you. It's very kind of you to listen to me attentively and give me a hand generously. Thanks for all the days we had spent together. I will remember them forever.

Secondly, I am reverent of Kyoto and it's people from the bottom of my heart. What shocked me first was cicadas roar all around Kyoto City, so high and noisy that I felt I went back to my childhood in the countryside. Kamogawa, a river that impenetrates Kyoto City in the central, is so clean and beautiful that you can't believe it's just inside urban. While Japanese do well in environment protection, I think there are other reason to keep the river clean. At night, when I walked alongside the river, I felt that Kyoto's people are sincerely fond of this river, in other word, it's part of their lives. Kyoto is just like a dream, too beautiful to break up, that even the most hot-tempered people will stay calm and obey rules.

In the end, I must thank you again for providing me such a wonderful experience. I wish all of you will be happy and the communication between Japan and China will move forward step by step.

### 2. Japanese pocket books

Today I'm talking about Japanese pocket books. Reasons why I began to show interest on this topic are not just because I'm into reading books and I like Japanese literature. The original motive can be traced to period when I was in China far before the program was held. I watched some animations and comics where it's common that characters often lap themselves in a small book just with one hand picking it up. As a result, it confused me because in China only those books which are designed for young children will be that size. It's absurd that those characters can be so devoted to picture-story book even in the animation. So there must be some difference. Once I'd been given access to Japan for summer program, I thought it was time to fulfill my curiosity with my own eyes. In Kyoto University's bookstore, I bought two pocket books --- written in Japanese, they are Natsume Suseki's << Kokoro >> and Miyazawa Kenji's << Miyazawa Kenji's Poetry Collection >>. It's hard for me to understand either of them, though. Before the presentation, I did some research through the Internet and have a overview of how pocket book was developed in Japan. In 1927, with purpose of encouraging citizen to read more classics, one of the most famous publishers among Japan, Iwanami Shoten, reprinted some massive tomes into thick, portable booklets. It was such a hit that many publishers began to imitate it. And nowadays, except for the classic, some best sellers will also be reprinted into pocket books.

From my point of view, I think it's a good phenomenon. By reading pocket books, we can make full use of fragmented time and gain a lot of knowledge. The most important thing is that is Human-oriented and anti-technological to some degree. Why do I say this? Take mobile phone into account: nowadays people are losing themselves to mobile phone deeper and deeper. Mostly they are not using mobile phones to improve themselves, on the contrary, just to kill time of no benefit at all. Furthermore, it's a positive feedback, which means the more you use mobile phones, the possibility you are addicted to it are higher. I think pocket book is somehow an applicant for us, may be plausible though, but still a better choice.

1. General impression of the program

Kyoto Summer Program mainly consists of 4 parts, which are Japanese language lessons, lectures, field visits and sightseeing. Overall, I find the arrangement diversified and orderly, making the 13-day-program impressive and beneficial for participants.

I have been always interested in learning Japanese and the program offered me a great opportunity. At first, I had worried that I would not gain so much from the short learning period as a beginner. However, the teacher was so nice and experienced, leading us not only to learn efficiently but also to have a lot of fun. More importantly, there were supporters from the Kyoto University study with us as teaching assistants and we got all the help we need.

The lectures also left deep impression on me. All the professors are distinguished scholars in Kyoto University, talking about their expertise ranging from the modernization of agriculture, Japanese Literature, Biwa Lake protection and chimpanzees. What most amazed me is professor Tetsuro Matsuzawa's lecture about his lifelong study on chimpanzees. He fathoms humans from the perspective of chimpanzees, which is really unique and inspiring. What's more, I am deeply moved by his persistence on academic researches. It is really hard to imagine a person devoted his or her whole life into one cause. Professor Tetsuro Matsuzawa did not depict the devotion as an ethereal passion or dream, but took it as a austere career. No bragging, just humility. For me, it is exactly the charm of a scholar. A scholar does not chase the glory or the fame but his preoccupation on what he approved of. That is what I expect from myself in the future.

Apart from the lectures and lessons in the University, there are also some field trips. Visiting NABEL factory is an unusual experience for me, just like the legend coming into reality. I had often heard of the Japanese attitude obsessing with the perfection. And the visit to NABEL validated the hearsay. As a small-size corporation with 200 employees, NABEL sold their egg packaging machines to the world. The pursue of technology and good quality may be the source of the charm of 'Made in Japan'.

Last but not least, the diverting transcultural communication is another important feature of the program. First, there are many supporters from the University, with whom I not only acquired as much help as I need but also gave me a different perspective to understand Japan, making the trip in Kyoto greatly differ from the normal sightseeing visit. Second, there are many students from the different countries and regions. Our friendship may be established in short period, but it will last in our hearts as our unforgettable memories.

2. Analysis on why there are so many small shops in Japan

I really enjoyed my time in Kyoto, especially all the walks I take on the streets. These street walks are full of surprises. Unique, beautiful small shops are everywhere, which makes the city really attractive. That is what I want to talk about today—Why there are so many small shops in Kyoto or in Japan, even in the most local neighborhood?



Small shops along the street

In most major cities world wide, that is not the case. The usual scenario is that large scale retail stores would replace the small shops with more diversified goods and lower price. Compared to the United States, Japan has over twice as many retail stores per thousand population and Japanese shops average about one-third as

many employees and annual sales. Actually, in 1994, over the half the retail stores in Japan had only one or two employees. Individualownership accounted for 61 percent of the country's retail stores.



a small postcard shop in Kyoto

What makes Japan so different? There must be a complex answer factoring in the aspects of culture, economics, politics and so on. Among them, Large-Scale Retail Store Law played a significant role in the preservation of small shops. Due to the complaints from the small shop owners, Japanese government passed the law in 1970s, which stipulates that stores larger than 500 m<sup>2</sup> must obtain the approval of the neighborhood shop owners bussiness hours and holidays are limited. Now that department stores close at 8 o'clock seems too early, but in the 1970s and 1980s, they must close at 6. in the late 1980s, to sale imported goods, the United States and many large Japanese retailers urged to revise the law and they succeeded. Now large retailers must inform local retailers of the opening of a store, but shopkeepers can no longer stop the new store from opening. As a result, large store openings raised from 200 to 700 per year. And closing time was extended to 7:00 to 8:00.

But anyway, I guess the heritage of the law was reserved because all the local small shops are still there, not just for tourism, but it also consists of the unique beauty of Japanese cities.

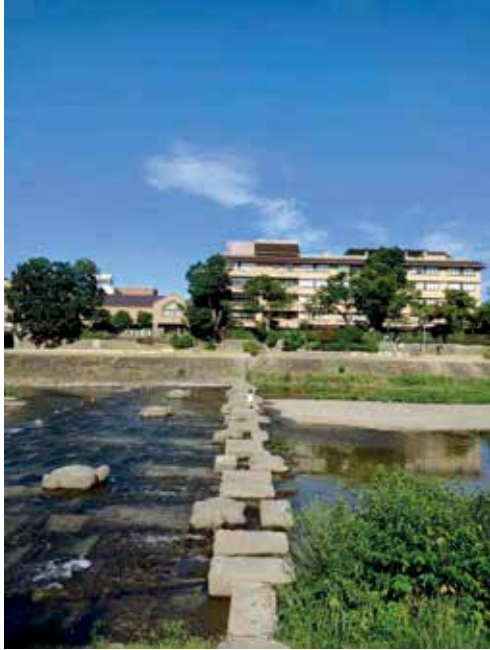
Reference:

Mak, James, ed. *Japan: Why It Works, Why It Doesn't: Economics in Everyday Life*. University of Hawaii Press, 1998.

\*photos are either took by the author or collected from the websites

**Xuan Sun**  
**Peking University**

I believe this is one of the most impressive summer I have ever experienced. Kyoto's summer is extremely hot but now, all I can remember is those beautiful moments I spent with my friends and the beautiful sceneries of Kyoto city and Kyoto University. This program does not only provide a perfect opportunity to learn about Japanese culture but also help us make friends from all over the world.



There were many interesting lectures given by Kyoto University professors. But I am extremely impressed by two: the lecture about Japanese agriculture and the documentary about minamata. Inspired by the second one, I gave my presentation because there are also many people suffering from environment pollution in China. The Japanese government provides a very good example about how to help the victims.

Besides learning about Japan society from an academic perspective, we also visited many places of Kyoto city and immersed ourselves into the local culture. I was extremely impressed that there are so many ancient building in Kyoto city and they are in such a good condition. These building styles are greatly influenced by traditional Chinese culture but also maintain the unique Japanese characteristics. When I visited these ancient buildings, I feel like I was taking a time machine and went back to the old times. It is such a romantic and poetic experience.



Kyoto city is not a place where the present and the past meets, but also a place where human and nature exist in harmony. Within a short distance around the modern high building, you can find a large bamboo forest and shrine worshipping the nature. You can enter into the forest and play with the naughty monkeys. For me, Kyoto is place where different people could find there own favorite. It is a good sample for city development.



Of course, the most impressive point about this program is how friendly our supporters and friends can be. They always tries their best to help us learn about Japanese culture. Even time is short, we have become good friends.

There are many gratitude beyond words. I sincerely wish this program could help more students learn about Japan and I would like to show my sincerest appreciation to Kyoto University.





### Public Litigation for environment pollution victims in Japan and China

There are many interesting topics I would like to discuss about this program. But after watching the documentary about manitama, I decided to do some research about China's public litigation on environment pollution.

I become interested in this topic for two reasons: as a law major, I happened to take a civil procedure class last term and I also learned a lot about China's litigation over environment pollution; secondly, there are also many environment pollution victims in China. It is true that China has achieved very good development in the past three or four decades, sometimes at the cost of the environment. It is also true that in many villages the cancer rate is extremely high due to air or water pollution. But very few villagers have ever thought about to go to the court and seek the remedy by law. After conducting some research, I think there are at least two reasons contributing to this situation: firstly, in traditional Chinese culture, involving in litigation is always bad for a family's reputation, especially if you lose the case. Secondly, these villagers can't afford to hire a lawyer and go to the court. This is exactly why public interest lawyer is so important in developing countries like China.

As introduced in the documentary, Japan government has offered great support to the pollution victims. There are also many active NGOs working on this issue. Luckily, we have witnessed some positive changes in China. For example, a NGO named Friend of Nature has successfully litigated some cases representing victims. These cases have been recognized as important precedents by China's supreme court. It will be a long journey, but once we start, we will get there.

**Xinyu, ZHANG**  
**Peking University**

### 1, General impression about the program

Kyoto has left a wonderful impression on me thanks to this program. I enjoyed the living area around our hotel and Kyoto University a lot, which is full of small and Japanese styled streets, shrines and temples, easy and comfortable for taking a stroll with Kamogawa right beside. Thank you for the program to give us a chance to experience Kyoto. And as for the Japanese language classes, I was in level 3 class and found the class of Mr. Uraki both interesting and helpful. He showed us the Anime サザエさん, which is famous in Japan but not overseas. With the stories depicting Japanese family daily life, I learned a lot about Japanese lifestyle, interesting Japanese idioms, and improved my spoken Japanese. We also tried making conversations for very old Japanese silent movies, which is challenging and at the same time great fun, being able to create the expression of the characters. There have been many different and fun interactions in the class. After class, the Kyoto University student supporters always led us around the elegant city. We had a great time together learning from each other about our languages and differences of university life. And of course we explored many places of interest, tried many delicious food, talked about jokes as well as political opinions. Before this program, I had been learning Japanese for 5 years, yet never been to Japan. After this program, I think I have gained a relatively all-around experience of Japan, which encourages me to further learn about Japan. I'm really grateful for the time and efforts all the supporters and teachers have spent for us. That's why this program has become such a meaningful part of my university memory. If I must make some suggestions to the program, I'd like to say I enjoyed the various lectures and field study to museums and the Biwa lake a lot.



However, I would prefer more languages classes than other lectures from which I don't think I have learned a lot. And the journey to museums or some company took so much time that in such hot weather it made us really tired and felt like a waste of time and energy. Above are only personal opinions and I honestly wish this great program could become better and better, providing a good chance to learn Kyoto and Japan for more students.

## 2, Keihan and Private Railways in Kei-Han-Shin Metropolitan Area

I am interested in this topic because of my first impression of Kyoto. I landed in Japan in Kansai Airport



and spent the first afternoon in Osaka. My friend there told me not to worry about getting to Kyoto late as the railways are very convenient. So at about 9 PM I walked out of the Jingu-marutamachi Keihan station, with the Kamogawa right in front of me. That's my first impression of Kyoto. Then throughout the program, due to the location of our hotel and the convenience of Keihan line, I took Keihan basically everyday. I know there are already JR, which is similar to national railways, and the Kyoto subway, which is also

common in Chinese cities. But what is Keihan exactly? I looked into the Keihan history, and find the whole private railways in Kei-Han-Shin Metropolitan Area very interesting and unique compared to Chinese railway systems.

There are five major private railway firms in Kei-Han-Shin. Han-Kai Company started in 1884 and developed into the present Nankai, which I saw in Kansai Airport. Han-Shin was founded in 1899 and as the name shows, connects Osaka and Kobe. Keihan came the third in 1906, with the support of Shibusawa Eiichi, a famous industrialist from Tokyo who shared a close relationship with the government and therefore got the privileged condition to build through the major areas of Osaka and Kyoto. Minoo Arima, the later Hankyu, followed in 1907. Kintetsu, the line I took to get to Nara, was at first Nara railway, founded in 1910.

We can see the major private railways were all founded before 1910s. And it's about a decade ahead of Tokyo Metropolitan Area and Nagoya Metropolitan Area, which laid the foundation of the leading economic role of Kei-Han-Shin at that time and still served today as convenient and significant transportation for residents and tourists around. At the beginning stage of Japanese industrialization, these lines functioned as urbanization pioneers. Railways first, and then residential, entertainment, tourism development followed. Industrial cities need labor and talents, and labor and talents need convenient living conditions. These lines connecting suburbs and big cities helped incoming people settle and prosper. Some firm also directly invested the development of special suburban industries, such as, Takaraduka invested by Hankyu.

The coexistence of various public and private railways also meets the transportation needs efficiently by providing diversification of the railway options. Due to the fierce market competition, each company tries hard to answer to each specific requests of the commuters and tourists. It seemed confusing at first when I found that there were so many options going from Osaka to Kyoto. When I have learned more about them, however, I realized they are trying to satisfy people living in different areas in-between and with different time limits. There is always a best option for your specific requirements, which makes you feel convenient and the whole metropolitan area integrated.

The private railway systems are very efficient and convenient. I think as China is still going through the rapid urbanization and the development of enlarged metropolitan areas, learning from Japan to diversify the metropolitan railway systems would be of great help.



1. General impression about the program

During the Kyoto Asia-Germany Summer Program, I have gained a very impressive and educational experience. The faculty in Kyoto is very kind and friendly, especially Prof. Kawai, she helped organize the whole program and give us many interesting lectures. Of course, the supporters also helped us a lot when we attended Japanese classes and had field courses. We hung out together, ate together and finally we made very good friends. From each other we learned a lot not only about Japan and Japanese culture. The Japanese hospitality is so warm and considerate that impress me a lot.

Besides, I also make friends with Hongkongers, Taiwan people and Koreans. We share opinions about the political issues like anti-legislation demonstration in Hongkong. From themselves, I know more about why they are willing to sacrifice and take risks to strike and parade for it. And I am also aware that different people have different social values, but we all have a heart to respect and make good friends with each other. I even have a chance to take about aircraft engineering with my German roommate. Since he is a student learning Engineering, I know when apply a theory into practice, there are still many problems like adjusting sensors and safety-profit balance to be considered.

As a student who studies science, I am very keen on the lectures about modern technology like modern agriculture. I am wondering if Kyoto University can offer some courses about them in summer short term like Peking University. I believe these courses, as a complement of existing lectures, will attract us to know more about the glamour of the Kyoto University. Anyway, in general, this program is very good and it gave me a chance to have a deeper and wider understanding of the Kyoto city and Kyoto University.

2. Foodborne diseases and the cure

The topic I choose is enlightened by the Minamata diseases and the efforts Japan government and Japanese people have done to protect our environment. China now faces very similar situation like Japan in 1970s. we have very severe environmental problems like water and air pollution, too much garbage and chemical pollution. Some of these problems happened in Japan before, and you have already developed very strict regulation system and technology to protect the environment. What's more, I found that the idea that human and the nature should coexist has rooted deeply in mind. Thus, I wonder if there is anything I can do to help my country and even the Earth to become a more habitable planet and conversely we suffer less from foodborne diseases and live in a healthier environment.

In order to protect environment and human. You have developed multiple sensors to detect the bacteria and rotted fruits. You have constantly monitored the ecosystem of Lake Biwa. The professors in Lake Biwa find how water indexes like O<sub>2</sub> content change, how surface water interacts with deep water and so on. Based on the very lake, you develop its own suitable model to explain how it functions and how it suffers from the global warming. It is a valuable class for me because in China in most cases, you just find researchers would just grab some existing models to 'make' them suitable for the local environments for its convenience. I have learned there are still many scientists and researchers who still hold the scientific spirits and carefully do the experiments day after day. It encourages me a lot.

What's more, when I go to the Osaka Aquarium, I found that tourists can even touch the sea animals. But what gives me even greater impression is the microbeads problem. microbead is the tiny plastic particles found in the ocean and animals' stomach. They come from cosmetics and the decomposition process of the plastic materials like plastic bottles and plastic bag. For now, you can find them in every inch of the ocean and inside the animals' body. And because humans are on the top of the food chain, cumulative process will eventually make them all gather up in human body. We don't know the side effect of it yet, but many sea animals are ready dead for too many indigestible microbead and plastics in stomach. Thus, many countries establish regulations and laws to control the plastic use and recycle as much as possible. For example, in China, we must pay for the plastic bag in markets and many rubbish classifications methods have the same function as well. And what gives me the most impression is that this complex idea is clearly explained by aquarium, it uses vivid graphics and plastic materials to help us to understand the severity of it. Though many pollution already done by us, we should be confident that there is always a solution for them and if we try to plant the seed of environmental protection in every people's mind, we will reach a state that we can have a better life eventually.

### **1. General impression of the program**

The program gathers students from not only China and Korea but also Germany so that students are exposed to more diverse mentalities, which indeed meets the target of cultural exchange and intercultural communication. Through conversations with fellow students, I realized how deep rooted cultural stereotypes can be and grow to be more aware of the possible false assumptions I should make about other cultures.

Student supporters are all very nice. They recommended tourist spots, famous shops, well-received restaurants and also took us to places we want to go to and join us in discussions and meals. Not only did they help us in learning Japanese language and Japanese culture but also made our stay at Kyoto more enjoyable.

The Japanese language courses (level 4) was of just the right difficulty for me. The essays, short stories and news reports we read under the guidance of the teacher was both informing and thought-provoking, getting us familiarized with Kyoto from diversified angles.

The lectures provided by Kyoto University and University of Shiga were all inspiring and but personally speaking it would be nice to take all the lectures in Japanese because for some lectures, the professors' English pronunciation made the content of the lecture a bit hard to follow and for that a lot of cultural elements could be better understood if they are discussed in its original contexts but not after being translated into English. I especially like the lecture on *The Tale of Genji* in Japanese traditional culture given by Professor Sugimoto, which made me interested in the contemporary interpretation and re-creation of Japanese classics.

I really had a great time during my 12-day stay in Kyoto thanks to all the student supporters, professors, and campus staff. Through the activities organized by Kyoto University, I was able to see a different side of Japan, both its nature and its society, which are impossible to acquire from TV dramas or news reports.

### **2. Functional foods in Japan**

During my stay in Japan in the past 12 days, I noticed something really intriguing.

This is the advertisement I saw the first day I arrived at Kyoto. It claims that the beverage not only tastes good but also prevent you from getting sunstroke. And then when I went to the convenient store to grab a meal, I realized such drink is not the only one of its kind.

Many food products including but not confined to chocolate, yogurt, tea, energy drinks also claim to have benefits for the healthy development of our body. There's chocolate that claims to be helpful in keeping fit by suppressing the processing of fat and sugar. There's yogurt that claims to be able to decrease visceral fat. There's tomato juice that are said to be able to bring down the level of cholesterol in blood and make sure its consumer meet the daily quota of essential trace minerals.

What surprised me most was this poster I saw in Kyoto University's students' store. The cookies are said to be helpful in promoting the functioning of the brain and help students better concentrate and memorize which in turn results in better test results. As the poster puts it: Eat the cookie and get the credit

What gives rise to the prosperity of such functional foods in Japan?

Under the influence from ideas of traditional Chinese medical science and advance in modern dietetics, Japanese people place importance on eating healthily. This little table stand we saw in Kyoto University's cafeteria is a great proof of the general awareness of the importance of eating healthily. And as we went to the bookstore Maruzen, we were surprised to find the sheer number of books teaching you how to eat. Books concerning food therapy takes up more than three bookshelves and if you input the keyword "food therapy" into amazon searching box, more than one thousand items will come out.

But in contrast to this good will of eating healthily, the goal itself is hard to achieve when you are living the fast-paced modern lifestyle. On top of that, fruit and vegetables are extremely costly in Japan.

In such a dilemma, one's best choice is to choose the food that claim to be healthy over the ones that don't have such claims in the hope that this would compensate for the deficiency of balanced diet. In recent years, the expectation to fight off diseases and stay in good health through the consumption of certain food are on the rise, resulting in an expanding market for functional food.

Japan established a mechanism categorizing processed food into different categories. The foods that are proved by scientific studies to be beneficial for promoting health will be granted the name of “functional food”. You can check exactly what the all-together 1067 items are and the standard of categorizing these items on the official site of Japan Health and Nutrition Food Association.

However, there are voices questioning the credibility of the so-called scientific research because some are said to be based on samples as small as six subjects. So it remains a question whether we should believe these claims or not.

As far as I’m concerned, though there might be an element of truth in these health claims, functional food items, after all, belong to the processed food family. So if possible, it’s always better to choose natural food over processed food over functional food for that not only is it safer but also more eco-friendly.

**Zhunaer, ZHU**  
**Peking University**

### 1. General impression about the program

How time flies! I really appreciate my choice to have applied this summer program. During the two weeks’ stay in Kyoto, I not only harvested a great deal but can leave KU with countless wonderful memories as well.

First of all, I am satisfied with the arrangements of this program. I was looking forward to the Japanese class every day. The teacher is very kind and patient. It provides me a good chance to learn and practice spoken Japanese, which is what I expect before. I was also inspired to keep studying Japanese in the future. Besides, there are many lectures attractive to me. The topics through ancient and modern, covered different aspects of Japanese culture, society and some environmental issues. While appreciating the aesthetics of classical Japanese literature, I was deeply impressed by the precise observation, vivid imagination and delicate expression of Japanese poets. The introduction of Japanese education helps us to get a better comprehension of the emphasis of communal living in Japanese society. Of course, I will never forget the study tour to Shiga Prefecture. Having a field trip to Lake Biwa is very interesting. It’s memorable to drink water from 40 meters depth directly! Moreover, lectures about the bio-sensing technology, cognitive capacity of chimpanzees, Minamata disease, etc. all broadened my horizon and got me thinking a lot.

Last but not the least, I want to take this opportunity to express my gratitude to all the professors and supporters of this program. Thank them all for the enthusiasm and sincerity. Without their help both in study and life, definitely we would not have such a good time. I enjoyed talking with people from different countries and regions and knowing more about different cultures. Through this program, I have made a lot of new friends. I will treasure our friendship and looking forward to the day we meet again.

Actually, I was interested in Japanese culture and literature since I was young and hope to visit Japan and experience the atmosphere of Japanese university for a long time. So, participating the KU program this summer give me the opportunity to realize my wish. People and everything I met in Kyoto will become a valuable memory that I will never forget. To be honest, I have enjoyed every day during this program and would like to recommend it to other students.

### 2. The heart of Japanese

Every morning when I walk across the bridge over Kamogawa River I was attracted by a billboard. There is a character ‘heart’ on it which in Japanese was called ‘kokoro(心)’.

Actually, in China, when we talk about Japan, one of the key words that we may come up with is the ‘craftsman spirit’, which means putting whole heart into what you do. During my stay in Kyoto and after attending a series of lecture of this program, I was really impressed by the heart Japanese devote to many aspects of life. I think we can learn a lot from Japan to make a better life.

Firstly, Japanese are very aware of the importance of the environment human live in and intends to put into practice. For example, during my stay I went to a festival calling on people to protect the Kamogawa River and there is persistent research on the water quality of Lake Biwa. Also, it is kind of surprising to know that we can drink the water from the tap. Actually, in Beijing we have suffered from haze, a kind of air pollution for a long time, but when there is a big event held in Beijing the sky is extremely clear, which we called as ‘Apec blue’. In my opinion, to some extent, it is not a problem impossible to solve but needing more and more conviction and efforts. As long as we devote our heart, there is nothing difficult to achieve.

Secondly, I was impressed by the heart Japanese show to human relationship. Just as the documentary about Japanese primary school, in Japanese society people learn how to cooperate with each other and be a good

member of a group from a young age. It seems to me that Japanese really do well in showing consideration to others especially the minority. For example, there is braille for the blind everywhere and someone providing sign language to people cannot hear during the performance. Besides, it is also more usual to see people eat alone in Japan. People don't have any embarrassment to eat alone because of the partition between each other.

In the end, from my perspective of view, the heart of Japanese may come down to the empathy that not for oneself but everyone, not only our generations but the future as well.

**Jikai Ye**  
**Peking University**

## **1. General impression about the program**

I feel extremely grateful for all that Kyoto University has prepared for us. The program provides me with a chance to have a glimpse at the education and culture in Japan, and make friends with people from different places. I am going to elaborate on my feelings about this program from these three aspects.

First, about education. The education of the program includes two parts: one is the Japanese classes and the other is scientific lectures. In the Japanese class, we were divided into four levels according to our proficiency in Japanese and were taught by a teacher and several supporters. The class for beginners can be really effective, because one of my roommates was so amazed when I was working on my Japanese presentation that I spent only two weeks to learn what took him more than two months to learn. As for lectures, professors in different fields explained to us their academic interests, researches that are going on and problems they are facing. These lectures are very thought-provoking. I believe everyone was impressed by chimpanzee's ability to memorize, severe food waste in Asia and many other facts we had never thought about. I strongly advise KU to set more lectures in the program.

Second, about culture. In the program, our supporters led us to visit many places in Japan, during which I could experience Japanese culture from both macro and micro perspective. The Panasonic Museum is a vivid description of modern corporation culture; the Fushimi Inari Shrine is a scenic representative of ancient shrine culture. The Biwa Lake shows how human uses modern technology to protect the natural landscape; the Kamogawa River explains what the nature requites human society. Apart from sites, the politeness of Japanese also shocked me. In the subway, passengers only whisper, in case they disturb others; in the street, people would say sorry to me even if they merely touched me by accident. These kind of politeness is rarely seen in my country. In sum, the activities in the program have embodied many aspects of Japanese culture.

Third, about friendship. The program has brought a bigger world to me. Our classmates in the program are from different places in the world, including Korea, Germany, Hong Kong and Taiwan. When we first met, I was afraid there would be discrimination towards us from the mainland of China and did not talk with them. One day, I went down to the public bathroom in our hotel and found one of my Peking University classmates was discussing with a student from Hong Kong. They were talking freely. Then I joined them in the discussion and found the conversation pleasant and interesting. After that, the lobby of the hotel became the "home" for me. I spent one night after another sitting in the lobby talking with students from Taiwan, Hong Kong and other countries. Meanwhile, we had formed very good friendship. I still remembered the last night in Kyoto, we drank on the Kamogawa River, chatting and laughing. That is such a precious memory.

## 2. Toilet in Japan

The first day I arrived in Japan, I was impressed by the design of the washroom in Kansai airport, a beautifully decorated washroom with a description on the wall. After that, as going into the washroom in our hotel, I was even more shocked when I found inside it a “pilot seat”, with an arm on the left and several buttons on it. Out of curiosity, I tried to press several buttons. But nothing happened. It was not until I sat on it that a strange thing happened. I felt something was touching my bottom softly after pressing a button! The experience is scary at first, but after searching the Wikipedia, I found a lot of foreigners have encountered the same scenario. It seems this type of toilet is unique to Japan. After using for one week, my impression of the scary toilet totally changed. Using water to wash the bottom is actually clean and comfortable. So I become interested why I have never seen this toilet in other countries even with the fact that it is much more advanced than the traditional toilet.



Considering that Japanese toilets can be very expensive for most Chinese, I focused mostly on America, where people are richer and have bigger houses. Searching the word “bidet American” on Google, I observed a lot of items related, like “why the bidet never made it to America”. After reading them, I realize the main problem lies in advertisement. Americans do not use bidet because they are not convinced that washing with water is cleaner. What’s

more, they feel repulsive when someone tells them the advantages of the bidet. As a result, it will take a long time to instill into their head the notion that the bidet is perfect. Besides, the New York Times notes that the American somehow relates the bidet, invented primarily in France, to sexuality. “During World War II, the bidet suffered another blow when American soldiers encountered it in European brothels, perpetuating the idea that bidets were somehow associated with immorality.” It also hinders bidet’s progress into America.

However, bidet companies have seen an inspiring rise in selling these years, not only in the US but also in China. Bidet seats and bidet toilets in the U.S. are currently a \$106 million category expected to grow 15 percent annually through 2021, according to BRG Building Solutions October 2018 North American Shower Toilet & Bidet Seat Markets report. And the trend has been going on since 2015 to take a bidet back to China while traveling. I believe the bidet company will have a promising future if they adopt better advertising strategy in China and America. When everyone is convinced of the merits of bidet, the biggest market of toilet in the world will be dominated by it.

**ZHANG Nuoya**  
**Peking University**

During the twelve-day summer program in Kyoto University, I have learned a lot. I have learned from my Japanese teacher, who taught me hiragana and katakana, which I would never make sense of them by myself. He taught me how to greet and how to express our likes or dislikes of food, music and sports as well. Thus I have more knowledge of this language now. I have learned from the professors of Kyoto University, which made me understand Japan from many aspects, such as technology, environment, literature and traditional culture. Not only have I gained more knowledge, but also I was deeply touched by their devotion to their careers.

I have also learned from the KU student volunteers. In their guide, we have sightseeings around KU and the whole city. Whenever we had any question, they would offer answers heartily. Besides, I have learned from the students from different countries and regions. They had different features and opinions, so various, but so interesting. We talked a lot and exchange our attitudes towards some important issues. To put it in a nut shell, I spent a good time there meeting kinds of people. All people were open, friendly and warm-hearted. They let me know that it’s important to communicate with individuals from different cultural





backgrounds no matter what your political views are. Only when you do this will you escape from parochialism. Besides, as the professor Miyagawa delivered, "...the relationship between nation and nation is getting harder and harder, but not the relationship between people and people. The relationship between people and people is the basis of the relationship between nation and nation. So hope you can help to construct it."

In short, I think the core of the program is pluralism. Whatever a foreign language, a trip to an unfamiliar country, talkings with

different people are all methods to understand pluralism. I'll take this program as a start of my life-long journey to confirm pluralism.

I chose the double seventh day in Kyoto as my topic. One weekend, I went for a walk with my friend among the Kamo-gawa River bank. And we found crowds of people were gathering there for celebrating the Double Seventh Day. They sat by the bank, eating, drinking and talking. It seemed like a really relaxing time for them to leave all their worries behind. And I've collected some photos.





The booths on both sides sold snacks and drinks with local features. The restaurants offered some special seats where people could overlook the river while eating. As we can see in the photo, people will write their wishes down in the five-color papers, and then tie them on the trees, but more often on the bamboos, so that their dreams can come true.

Actually, the festival is originated from a traditional folk from China. It is said that a cowboy fell in love with the Girl Weaver, which irritated the Girl Weaver's mother. So they can only meet at the Double Seventh Day annually. And nowadays in China, the festival mainly functions as another Valentine's Day. The lovers will hang out, have some expensive meals, watch a movie and do much shopping, because many shops have some discount this day, but most activities are indoor. It is so different from Japanese walking outside and getting close to the nature.



Also, as I have mentioned, it is lovers who celebrate this day. However, in Japan, it seems that most children are also included in this festival. The activities are held among kindergarten and primary school, such as ceremonies and lessons of stars. They would also write down their wishes, sometimes, it can be funny.

“I hope I can save the world by Nori.”

“I hope I could become human-beings!”

“I hope I could be blessed with God's power.” So cute, right ?

So, I have a question: how can we preserve our traditional festival? Learning from Japan, I think we should not only expand the participants of the festival, including both children and adults, but also make full use of natural resource. Only when we really acknowledge and admire the festival can it have special meanings in our daily life

### 1. General Impression

When I first get to look at the schedule of Kyoto Summer Program, I assumed that it would be an arduous journey on the land of Japan. Every single day we've got a certain learning task and it seems we're going to be occupied.

Actually, I was neither right nor wrong. The whole program was really occupied and fruitful, in regard of the academics, yet it was never that tough. I improved my speaking Japanese profoundly, thanks to the supporters from Kyoto University, and other of my roommates and classmates. We learned the language through not only from those level 1-4 lessons given by professors, but more from little chatters, serious debates, meaningless arguments, and funny jokes, which take place in the campus, on the streets between hotel and school, in the bathroom, the lobby, Arashi mountains, Nara, Osaka subways, anywhere we have space and a topic. I have to admit that I was initially astounded by the extent Japanese people could be hospitable. The supporters involved themselves in every aspects of our 12-day life in Japan, making this program a lot more heart-warming. Takumi san, who's a medical student, is learning Chinese. He readily helped me when I encounter difficulties in Japanese, gave me hints when I wrote my speech essay, even accompanied me to the Osaka shopping center to purchase some souvenirs. He and other supporter's kind spirit made me realized the deep Japanese significance of 礼。

A French writer once said that you don't necessarily have to take lessons in Paris to learn the French culture; Living in Paris itself makes you learn. It's the same in Kyoto. Walking on the streets, feeling the breeze blowing from 鸭川, wandering around the liberated Kyoto University campus, do a little talking with Japanese people, that's definitely a process of feeling and learning.

### 2. Specific Topic

When I first came to Japan, I was actually hungry and exhausted, for I just survived from a long, tiring flight. So after settling down my luggage at the hotel, I immediately embarked on the search for Japanese restaurants, the story between me and the Japanese cuisine began since then, and it still continues as I observe the true spirit of Japanese values through Japanese kitchens.

The first meal I had was fried shrimp rice, I have to admit that the fried shrimp was magnificent, even though it wasn't made into tempura. In the main dish, there were three fried shrimps, various different kinds of vegetables, a bit mayonnaise; for the rest of the meal, we had miso shiru, two fuku sai, and a small bowl of rice. All of them are very delicious, yet the amount of each of them strike me as odd. They used such small bowls to contain rice that I could finish three times the amount.

That's when I discovered the spirit of thrift in Japan. As the restaurant I've been to began to accumulate, I noticed that Japanese kitchens tend to allocate food in small yet exquisite portions, and thanks to that tradition, there will be hardly any food waste in Japan.

I wasn't quite a guy who can eat a lot, but I still devoured loads of rice there. It was mainly because of the quality of rice there was extraordinarily high. Just as Professor Kondo mentioned, Japanese people scan every grain they eat, so their rice tend to be more tasty.

Japanese people show pursuit of the quality in many aspects of life, especially food.

During these two weeks program, except for studying, I've been to many places with shrine and temple like Arashiyama, Sonzen-in temple, Nara, and Kuroma. I found that many of their shrines and temples were built near the mountain. I also found that some stones or trees in the shrine will be worshipped by human which have some coins or offerings in front of them. I'm curious about it so I surfed on the internet and found that it's because in the early time, people living here rely on the water from mountain and the food provided by this land, and they believe that every life has its spiritual, which makes them appreciate the things they have and show their respect to the nature. This also become the basement of the local religions, Shinto, in Japan.

As for Buddhism, it is an adventive religion for Japan. To make people accept an foreign religion, the Japanese Buddhism become different form the original one in India. The most obvious one is about the inherited of temple. In the original Buddhism, monks cannot get married. But for Japanese Buddhism, some monks are not limited to eat meat and get married which make the temple hereditary. Some temples still follow

the original disciplines though. Another one is about the form of poetry signs and amulets which is similar the form in shrine. There's also something similar between Shinto and Buddhism. They all show their respect and appreciation to mountain. So in Japan, for the temples not built in the mountain, they will choose a mountain to show the belonging relationship and write it in front of the name of the temple.

In Taiwan, we also have two main religions, Taoism and Buddhism. To make people accept, Buddhism in Taiwan also change a lot compare to the original one. We make the religion close to our daily life. It's not necessary to become a monk for people who want to study about the value of Buddhism. You can just stay at home, read scriptures, thinking, then maybe you can get the truth of the world.

Through these two weeks program, I visited many shrines and temples. I've learned many regulations in shrine like how to wash your hands before worshipping, the correct way to pray, and some problems about conventions like how to pray for a sign. Kyoto is really a clean and beautiful place that makes me feel comfortable while living here. There are many interesting things to learn and explore in this city. In school, I learned many about the Japanese language, culture, and some topics about the research in Kyoto University. I'm glad to learn with professors and students from different countries. I really appreciate supporters in KU who help a lot in our Japanese language courses and trips around Kansai area. This may be the most impressive summer vocation for me in my life.

**Wen-Hsuan, LEE**  
**National Taiwan University**

### **1. General impression about the program**

I was really afraid of joining this program at the beginning. Because after I graduated from senior high school, I seldom spoke English and lacked courses that are related to science. The only course I was interested in was about the literature.

But things became better after I stayed there for more days. I met many kind people, we chatted in Japanese, English, and Chinese. I was thankful for made friends with so many different countries people. I can get closer to different cultures,

and have a chance to renew my concept. This experience helps me a lot in being a better person.

Every morning in the weekdays, I walked to school. I always walked by the Kamogawa, where is very beautiful and peaceful. I could see the local people walking their dogs, or jogging by the bank. I also went back to the hotel in the same way. There're some stones in the shape of turtles across the river. I usually jumped on it, and stayed in the middle for a while, looking at the beautiful orange sunset.

Kyoto University is one of the top universities in Japan. So all professors here are excellent in their profession. The lectures they taught are very inspired and useful. Through the lecture of food technology, I understood many kinds of new technologies that were developed by the Japanese to inspect the food qualities. By having the lecture on Japanese literature, I can also know the Chinese literature deeper at the same time.

The most unforgettable experience is the Biwa Lake tour. We had an introduction of Biwa Lake first and then went to the Lake we'd had been taught personally. Although the boat was very shaking that I thought I got the feeling of sea-sickness, almost throwing up, it was still an exciting experience. And one of the precious memory was that we drank the water from Biwa Lake. I think only a few people can have this opportunity.

The meals in the cafeteria are delicious, the environment of KU is so great, the people here are very kind that I will never forget this one of the best summers in my life.

### **2. Japanese daily life in Atashinchi**

Atashinchi is a comedy manga bt Eiko Kera, and adapted to animation in 2002.

In Taiwan, it has aired from 2005, even now, this animate is still airing in many television stations. I've first watched it when I was in elementary school, and I was captivated. Before Atashinchi, the similar animates which associated with the family's daily life, are Chibimaruko and Crayon Shinchan. Since Maruko was based on early Japan, and Shinchan at that time was a little bit unsuitable for children, Atashinchi was a brand new kind of family comedy animate. So maybe I can say that I learned a part of Japanese culture and society from Adashinchi.

In this animate, the story is about the daily experience of Tachibana family. There are four members of this family, parents, daughter, and son. The parents aren't named, they're just called mother and father. The older sister named Mikan, which means orange. And the younger brother named Yuzuhiko, which means pomelo in Japanese.

The scene of having meals can usually be seen in this animate. The Tachibana family always has breakfast at home every day. They sometimes eat tamago kake gohan with miso shiru, or only a bowl of rice with a fried egg. It may be very normal in Japan, but to Taiwanese, it is very special. First, we seldom eat raw eggs because of the different inspection standards from Japan. Second, in Taiwan, we usually buy breakfast from breakfast

shops or convenient stores. Expect for the traditional family who will cook breakfast at home, the most family now eat out usually.

The main character Mother Tachibana is also very interesting. She is a professional housewife, who is seldom seen in Taiwan, but seems normal in Japan. Putting many ingredients which are almost expired together to make horrible dishes and loving to go shopping when the markets are having a discount, she is a typical mother. However, because of her career, she's still very different from Taiwanese mother. She has her mother-friends. They are all housewives, and maybe this is the reason why they often have afternoon tea together. But in Taiwan, eating afternoon tea on weekdays is only the amusement for rich people.

Although Atashinchi is only a daily life cartoon, from watching this series, I can understand the Japanese lifestyle deeply. Furthermore, by comparing, I can also figure out the characteristics of my own country, Taiwan.

**Teng Yuhua**  
**National Taiwan University**

● **Part one**

Thanks to this program, I could discover the beauty of Kyoto in dedicated way.

First, If you ever ask me to pick a place in Kyoto that fits “love at first sight,” then it has to be かもがわ without a doubt. かもがわ has a magic power to help me to slow down and think of my life. I really enjoyed walking along 鴨川 myself so I walked to school along かもがわ everyday. I think students in Kyoto University is so lucky to have this fantastic sight on their way to school.

Secondly, To me, not only かもがわ surprised me a lot, but also じんじゃ conquered me! When I entered じんじゃ, I felt really chilled out! So I visited lots of じんじゃ or temples in Kyoto not only in the morning but also in the evening. I think that is definitely 神社 makes Kyoto such a charming and fantastic city.

Thirdly, I also found that the pace of people in Kyoto isn't as fast as people in Taipei, and most people here ride a bike not a scooter, which makes the atmosphere much more peaceful and comfortable.

What's more, on the first day, I saw there are also beautiful woman with 和服 shopping in the supermarket, which left a deep impression on me.

I like the atmosphere, street sight and lifestyle of Kyoto, which make me feel relaxed, so I always stroll around after school. I almost walked over 15 kilometers every day to explore different street sight in Kyoto. (But sometimes google map betray me, so I walked longer than I expected) I think if I could, I will absolutely choose Kyoto as a city to stay with my family.

● **Part two**

My favorite part of this fantastic program is the lecture we had on the third day, “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”, thanks to this lecture, I made up my mind to experience the beauty of Kyoto in a different way, so I slowed down and filmed when I discovered something left deep impression on me, and I also made a simple video on JR in the last few days (and I shared this video with everyone to show how I saw the beauty of Kyoto on the presentation). Some participants even told me that they have never found that Kyoto is such an exquisite city, which gave me intention to made other videos if I visit other country in the future, and I also made up my mind to visit Kyoto in other seasons, especially in spring and fall.

If there had not been the lecture “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”, I think I wouldn't appreciate the beauty that is only dreamt or imagined, anticipated yet not attained, the beauty that is imperfect or incomplete, and the beauty that is fleeting and fragile. And this is also the reason that I went to 宇治 to experience 茶道 on the last day of the program, and I think 茶道 also shows the the same point of view to appreciate the beauty, for example, there is a famous sentence in 茶道, that is” いちご いちえ,” which means “One Encounter, One Chances”. That is to say, we have to cherish every encounter, because we won't have a same mood, same feeling, with same people, in same place

and same time. And I think this sentence also encourages us to cherish every beautiful moment, because the beauty is also fleeting.

**Huan, Wu**  
**National Taiwan University**

#### 1. General impression about the program

To conclude my general impression of the program with two words, I'll say "Free yet coordinated". The first day I arrived at Kyoto, I went to the accommodation around 4 at the afternoon. One of my roommate had already been in the room, we introduced ourselves to each other then we chatted for more than 2 hours until we went out for food. I really appreciated that the coordinator offered the night and let us meet each other before the program actually started. Mentioning the schedule, I could learn something new and got enough time to digest and process but also had time to explore Kyoto and had fun with classmates. During the lecture, I got chance to learn topics in various fields. Those lectures truly broaden my horizon and make me aware of the important issued in Japan and even worldwide. In terms of Japanese lessons, the gap of each level could be fined-tune a little. Since some of participants found it hard to pick a suitable level. Overall, teachers and supporters made the lessons interesting and also gave us an general introduction to the Japanese culture.

In my daily life in Taiwan, I don't get much opportunity to share thoughts with students from China, Hong Kong, Japan ,Germany and South Korea. This program provides us to talk and share thoughts with each other. Through these time, I learn how to view things from different aspects and with different perspectives. Additionally, the supportive professors and supporters made these program more complete. Whenever we faced some problems or wherever we go, they're always with us. For supportive professors, they all made every participant feel like home and was taken good care of. For supporters, when we went sightseeing, they tried their best to explain and gave us their perspectives to things as Japanese. Moreover, they did their best to connect everyone in the group and made this program an unforgettable memory to us.

#### Islands in Lake Biwa

During the field trip to Shiga, we were setting sail to Lake Biwa. On our way to do the water transparency test. There was an island located in the middle of the lake. The island soon caught my eye. I was wondering why there was a stone tower standing on that island yet it seemed like an uninhabited island. There was no boats or ships around the island but soon I found that there was a dock on the other side. Then I'm sure that it must have some stories behind the island. Furthermore, I'm curious about how many islands there are in Lake Biwa. Therefore, I did some research through the internet.

Generally, there are four islands in Lake Biwa. First one is Yabasekihan island and it's an artificial island, which is near Kusatsu city. Second one is Chikubu island, which is near Nagahama city. The third one is close to Omihachiman city and it's called Oki island. The fourth one is what I saw during the field trip. Its name is Takei island, which is near Hikone city.

Among these island, I did more research on Takei Island since it is what interested me to do the topic.

Takei island is originally made of granite, which is protruding from the bottom of the Lake Biwa. The island was once covered with abundant bamboos. Hence the island was once called Takeshima in the past. Until Edo period, trees were planted by carrying soil from Mt. Kojin in Hikone. Nowadays, Takeshima is named after Island with scenery. Due to people could see various scenery from different aspects and directions. Takei island has been worshiped since Yayoi period. Today it's a spiritual and sacred island for Nichiren Buddhism. The stone tower mentioned above is carved in Lotus Sutra. Along the first year of Meireki era, Nichijo Shonin, who was in the course of his practice in a temple in Nagahama. He was told in his dream to cross the lake to find an island and build a stone tower and temple there. The third Hikone Lord has faith in Lotus Sutra, thus he supported Nichijo shonin for the construction if Mitto-ji. That's Hikone Lord who arranged the ship and had people carrying the soil from Mt.Kojin so that the temple could be built on the rocky ground.

**On Ki, Cheng**  
**The Chinese University of Hong Kong**

#### 1. General impression of the program

The program was undeniably fruitful. I was benefited both academically and spiritually through twelve-days study. Classes and lectures were conducted in very interactive ways, for instance the elementary Japanese class provided opportunities to practice our oral speaking by letting us to give a speech in front of the class as well as singing our common songs in Japanese. It helped boost my confidence in learning Japanese.

Furthermore, this scheme included different fields of study, in which I could taste a bit of scientific and economic investigation and learning that I had not experienced before as a history student. The field trip measuring the water quality of Biwa Lake was truly impressive by knowing the efforts done by numerous environmentalists and professors to safeguard the natural habitat against excessive and contaminating human activities. The sharing of Professor T. Matsuzawa on the evolution of human mind from examining chimpanzees was also remarkable in showing the devotion of the Professors in the Kyoto University towards academic research in several decades.

On the other hand, the student supporters from the Kyoto University offered us a lot of splendid cultural experiences. They designed a wide variety of activities after classes, including visiting Arashiyama, having close contact with monkeys, and giving tours to disparate shrines and museums. The most invaluable thing in the scheme was the interplay between the Japanese, German, Korean, Taiwan and mainland students. I deeply appreciated the composition of the program and the room arrangements that I could communicate with people from diverse countries and cultures and share our lives in assorted areas like college systems and cuisine, and we even discuss on the political issues concerning each of our countries. I made lots of friends through the program. We would give unconditional supports to each other when overcoming challenges. Every moments, days and nights we spent together were gorgeous and unforgettable. I genuinely believed that the memories during the project will be long lasting to each of us. In a nutshell, the summer program was superb and beneficial, and it will be much perfect if the transportation arrangements could be refined to avoid excessive walking and reduce time costs.

## **2. Museology in Japan**

Being enthusiastic in history, I consistently visit different museums while going travelling. The way how history can be inherited and promoted to various people is always my concern. I believed that a good museum should be able to attract its countries' people visiting there regularly as well as foreign tourists in order to remind people aware of their own history and thus cultivating them, while spreading out its own culture to enhance the soft power of the country. I have been to numerous museums worldwide, including British, Canadian, Cambodian and Chinese museums etc.. Among all, I found Japanese museums the most attractive and impressive. During my exploration in Japanese museums, I observed that visitors there generally spent much more time in front of one exhibition and some of them were even children. And so, a question came to my mind: why were there crowds of people "addicted" to those exhibitions? And why were Japanese Museums so captivating?

In order to figure out the reasons for the popularity and the fascination of Japanese museums, I paid visit to various museums in Kyoto and Tokyo to find out their similarities in terms of their displaying methods. I have also looked through some documents to evaluate the principles held by those exhibition places to prepare displays.

After additional investigation, there were several findings regarding the resemblance of the characteristics of Japanese museums. First, there were lots interactive workshops and cultural performances. Interactive corners were set up under each theme of exhibitions accompanied with cultural performances nearby. Second, some artifacts in regular exhibitions are rotated almost every week. It might give the guests freshness when revisiting the places. It could helped explain the huge number of people visiting Japanese museums per year as stated in The Art Newspaper. Moreover, technological elements were widely used in the museums that there were 3D videos reappearing the lives of ancient Japanese, while computers and tablets were provided for further information research and as references. It made the information and history more accessible to the public that the display could be more educational.

The characteristics stated above as being more education in the Japanese museums could be proved by the governmental documents. According to the Law on Social Education(1949), "The role of museums and libraries are lifelong learning institutions" and the Museum Act (1951), "Museums are the organizations with the purpose of collecting and preserving (including nurturing) materials related to history, the arts, folk customs, industry, natural science, etc., exhibiting them, providing them for use by the general public on the basis of educational considerations, conducting necessary work in order to contribute to education, research, recreation, etc., and in addition undertaking surveys and research relating to these materials." Both statements helped to construct the principles of Japanese museums as more educational to the public and emphasized a lot on the

ways how to provoke people's interests in further investigation after exhibitions. Therefore, the doctrines held by the museums were clearly shown and the compelling displaying methods were well explained. It is hoped that Hong Kong's museums could learn from them and thus boosting the number of visitors to promote Hong Kong's own history.

**Chun Wai, CHOI**  
**The Chinese University of Hong Kong**

#### 1. General impression about the program

Flashing back to the moment I knew I was chosen, I thought the program would be like 'doing the same kind of lessons with the same kind of people, but only in a different place'. As time flew, I then knew I had been chosen to embark on a journey like no other.

It began by an almost magical encounter in which I found all of the students from my institution were actually on the same plane! And, we did that without meeting anyone before. Things were getting more and more intriguing after that. On the very first dinner, I was able to meet people from all around the globe. A German student who had been in Japan for months even taught me proper dining etiquette against a 'senpai'. When I returned to my room, I rather accidentally joined a heated debate on the relationship between global governance and globalization. As I bathed, I was lectured by another German student on the future of the Bavarian automotive industry and his view on the political turmoil in my city. All these experience had not only convinced me how lucky we were to be a part of each other's lives but also how impactful it would be when destiny put resourceful minds together. I enjoyed the benefit of it on a daily basis thought-out the journey.

Frankly speaking, without my friends, my days here in Japan would have been much less memorable. Nevertheless, I was also very glad that the excellent teaching of Kyoto University enriched me a lot more than expected. In my University, Japanese classes are of high intensity where students are asked to fit themselves into the schedule but Kyoto U was on the other way round. I could clearly feel the enthusiastic support by the lecturer and the supporters, especially when I was struggling to even get started. Although I was in the Level 1 class, I could grasp the basic communication skills necessary for survival in Japan. It was still a rather marked achievement for me given the short length of the instruction.

Another indispensable component of Kyoto University's excellent teaching I experienced was the lectures given by renowned professors. At my first glance on the timetable, I was not surprised by the topics were to be introduced since I thought I had heard most of them back in the Chinese University. Yet gradually, I discovered that professors here approached problems in a far more inspiring and meticulously way. One of them was Professor Matsuzawa who had even lived with Chimpanzee for decades in order to study how they were different from human and how they were evolved into us. He then told us we were primarily distinguished from our closest relative by imagination, the ability to perceive things that not tangible. Additionally, we developed such ability in the expense of memory over the past millions year.

Professor Matsuzawa's lecture should be one of the best I have tired. His academic passion was also undoubtedly the strongest among all scholars I have ever met. By this point, I could finally understand why students at Kyoto University were so proud of their identity. They were young scholars nurtured by great scholars. And, this made me feel I am chosen to embark on a journey like no other.

#### 2. Hikone Castle – fit for its era?

It is a widely acknowledged assertion that warfare revolutionized when firearms were considerably deployed by armies all around the world. Japan was of no exception. In 1543, a critical moment came for the late Sengoku period, as muskets were brought by the Portuguese into Nagashima where factories were soon established in great number for the ever-growing demand from warlords. By 1600, in the battle of Sekigahara, musketeers had become a main branch in the army, after Cavalry and Pikemen. The latter two were also overshadowed in many occasions during this battle that decided the future of Japan.

As we could perceive, winning a battle is hard but it could be harder to defend the place you have won. This was obviously the challenge faced by the engineers of Hikone castle in the era of muskets. From 1573 when the keep was originally built as a part of Otsu castle, to 1622 when the castle as we see it today was completed, construction plan was constantly changing. Although there was little evidence left in the literature concerning



the details of it, the traces were, luckily, visible. In my opinion, the engineers had deployed an ingenious rick to lower the threat of incoming musketeers and to make theirs more threatening at the same time.

Interesting investigation began as we discovered that much of the southern part of Hikone Castle's wall was made in a zigzag way during the visit. On the surface, this was not a wise choice at all since it would significantly increase the cost of construction, at least compared to a straight wall. If such choice was also not for misleading enemy of the Castle's actual size by adding complexity and grandness, what would the reason?

Knowing the unsatisfactorily slow loading time of muskets, the Hikone Castle's defender conceivably made up mainly of musketeers had to bring the deadliest damage to the enemy in one go. With this in mind, the zigzag wall came into vital existence as it could turn musketeers' volley fire into the crossfire. Now, no matter how brave and well-equipped the enemy was, no one could assure their safe passage over each piece of tiny triangular land between the moat and the zig-zag. Even some of them did survive the initial bullet rain, one could expect they were not in a number that was enough to overwhelm the defender on the top. Let them make it until the next wave of reinforcement came, another bullet rain would probably be ready.

An ingenious trick, right? Nevertheless, only southeastern part of the wall was zigzag but not everywhere. A quite convincing explanation to that, apart from the cost, was that the Hikone castle's engineers utilized the terrain to help with the entire defense system. From the aerial map, we could see that the northern part of the castle touched the bank of Lake Biwa and not much open field was there in the west. In other words, if the zigzag wall worked well, the castle would be almost invincible. Logical as my elaboration may have seemed, the castle was never put into the test as internal wars ceased during the Tokugawa period. Arriving at this point, I don't know if the Hikone Castle is fit for the era, sorry.....

**Chin Ham, WONG**  
**The Chinese University of Hong Kong**

#### 1. General impression about the program

As expected, I had a wonderful and unforgettable experience at Kyoto University with many talented students who come from different countries. This summer program is a golden opportunity for me to enhance my understanding of different cultural and community perspectives. I tried my best to integrate myself into a society whose culture is totally different from my Hong Kong, I met different friends from Taiwan, Germany, Beijing and Korea, it enhanced my interest in global issues as well as a broader general knowledge, and had developed life-long friendships.

Unfortunately, I was sick and went to the hospital in the first week during the program, but it was another experience in Japan, the pity was that I missed a few lectures and Japanese language classes. I have to appreciate all the help that KU gave me during the program, there are a lot of enthusiastic Professors, staffs and supporters in Japan, and made me can feel the passion of Japanese. Under all the supports and medical cares, I recover completely from the illness.

In the program, it provided much chances for me to understand Japan more in different aspects, and the lectures and visiting made us know more about Japanese culture. More importantly, off-campus activities is also a good method to explore Kyoto and Japan, this city and its culture have always fascinated me. The experience of this program and travelling in Kyoto are entirely different, I can experience the 'real' life of the Japanese, explore the city as an exchange student although it was just a short term experience. I was really worried about the Japanese language class before the class begins, because I didn't learn Japanese before the program, and I think it is quite difficult. However, after the summer program in KU, I felt inspired to learn Japanese since I believe that there are no better way than learning Japanese to understand and explore Japan.

#### 2. Forgotten Capital: The History of Shiga Prefecture

As a student majoring in History, I have always been passionate about the history of different countries, especially the study of Asia, moreover, Japan is one of my favorite countries, and I interested in exploring the history of Japan. KU summer program provided an opportunity for visiting Hikone Castle and



Lake Biwa, also we had a lecture about the lake biwa, the professor had analysis and discuss Lake Biwa on the environment aspect. These two places are located in Shiga Prefecture, I don't have much understanding about Shiga Prefecture before the visit, it is overshadowed by its neighbor Kyoto. However, I felt inspired to know more about Shiga Prefecture.

When we discuss the capital of Japan, it is well known that Tokyo is the capital now, and Kyoto was the ancient capital of Japan. However, there are not really many people know the fact that Otsu also was the capital of Japan before. As the supporter had told me that not all Japanese know that, and this is the reason that I named the topic "Forgotten Captial". In the history of Japan, the capital was moved serval times, but we only know Kyoto, Osaka these famous cities. Otsu is the capital city of Shiga Prefecture, it served as the capital of Japan during the Asuka period (538 – 710) in AD 667 – 672.

During the AD 667 – 672, Emperor Tenji founded the Omi Otsu Palace. Unfortunately, the Junshin War destroyed the Omi Otsu Palace and then Otsu was renamed to Furutsu (古津). Therefore, Kyoto (Heian-kyo) was set up in the neighborhood in AD 794 as new capital, Otsu was replaced by Kyoto immediately after the Junshin War, and Otsu was an essential traffic point of the capital. After the establishment of the new capital, the name of the Otsu was restored to its original name. We can learn about the establishment of Kyoto from the history of Otsu. After the research of the history of Otsu and Shiga Prefecture, it inspires me to study more history of Japan.

**Pui On, Cheng**  
**The Chinese University of Hong Kong**

#### 1. General Impression about the program

In general, the "Kyoto Summer Program for East Asia and Germany Students 2019" consisted of three main components; Japanese language classes, off-campus tours and lectures. The language classes were fruitful and challenging. The teacher and kyodai supporters, introduced us to a variety of daily and practical Japanese as well as cultural materials, while at the same time encouraging participants to interact in Japanese. Along with constructive feedback that was given to each individual student, the classes have created a very supportive environment for Japanese beginners like me to practice and improve Japanese effectively. They have also allowed me to establish a more thorough understanding of the grammar, vocabulary as well as some self-studying methods for further Japanese studies in the future.

The off-campus tours and the lectures, which were led by various experts, were very informative and insightful. With topics covering technology, education, literature and more, these lectures and tours allowed us to take a glimpse into different aspects of Japanese culture, modern or classical. I myself was particularly fascinated by Professor Yukawa's introduction of the Waka poems. The beauty and flavor of these poems, together with the atmosphere presented behind those words intrigued me to explore more classical Japanese poetry in future. Such goal has become one of my motivations to learn and study Japanese.

Outside of the classes and the tours, this program had also offered me great opportunities to communicate and exchange opinions with a diverse group of people, including not only the Kyodai students and teachers, but also students from Germany, Taiwan, Korea and Mainland China. As most of us have never been to Japan before, we together experienced and discovered a lot of native daily life details and sceneries that are uncommon in our respective home countries. I had a great time roaming around the streets and shrines in Kyoto, understanding and exchanging views with my newly met friends.

As Japan has always been one of the countries that I consider to study abroad in the future, the Kyoto Summer Program was a thrilling experience that allowed me to explore and understand the culture first-hand in person. It was my privilege to attend this program, and I am very grateful to every teachers, supporters and participants in this program.

#### 2. The classification of the department "History of Chinese Philosophy" in Kyoto University

As a student interested in Chinese intellectual history, the classification of the department "History of Chinese Philosophy" in the Faculty of Letters in Kyoto University has been a confusing matter personally. In the Faculty of Letters, "History of Western Philosophy", "Japanese Philosophy", "Aesthetics and Art History", etc. all belong to the division of Philosophy. However, the "History of Chinese Philosophy" is neither placed under Philosophy nor the History division but rather the Division of Philology and Literature,

which revolves around texts and different genres of classical studies. According to my limited knowledge, the department title “History of Chinese Philosophy” is not common among Japanese universities. Many of them are called “Chinese Philosophy”, which usually belongs to Philosophy department, or, for example, in Tokyo University, as “Chinese Thoughts and Culture”, placed under the Philosophy and Religion division.

From what I have gathered, the research target of “History of Chinese Philosophy” mainly revolves around traditional Confucian classics and other intellectual classics, and value philology heavily in terms of research methods. I have yet to investigate further on the differences of focus and methods between Kyodai and other universities’ Chinese Philosophy department, however, the classification of “Philology and Literature” instead of Philosophy and History in Kyodai might be related to its preferred research methods, and even furthermore, to Kyoto School’s characteristics, as they are famous for their adaptation and recognition of the methods of the Qing scholars in the late imperial China in terms of Chinese and Oriental studies.

On a side note, in Hong Kong, Taiwan and mainland China universities, philology usually belongs to the Chinese Language and Literature department instead of the Philosophy department. I consulted one of my teachers and was told such difference is rooted in the academic traditions of the both sides.



General Impression about the program:

I would like to thank for all organisers and supporters from Kyoto University. They have put a great effort in organising a variety of activities and taking care of us throughout the program. During this program, I learnt some basic Japanese such as greeting, self-introduction, numbers, food, music and sports. Although it was an intensive Japanese course for me, I was so excited that I grasped the opportunities to chat with the locals and familiarize with their lifestyle. For example, Japanese loves using different adjectives and phrases in order to show their greatest gratitude and respect to others. Therefore, I realized that Japanese are very courteous and friendly in meeting others.

Apart from languages, I knew more about the culture and history of Japan. Since Kyoto is one of the traditional cities in Japan, it is well-known for its historical legacy and culture. I visited many shrines, temples and castles to know more about Japanese history and its architectures. For example, the construction of the defensive Hikone Castle in Shiga and the geographical location in building the defensive castles where people need to climb up for hundreds of steep staircases. Moreover, Japanese are superstitious. They would visit shrines and temples to wish for good lucks and blessing by throwing coins or buying mascot. Once they have achieved their goals or attained their wishes, they would visit the shrines and temples again in an aim to thank for the gods.

Besides, I joined the corporate tour to visit NABEL.Co.Ltd. Nabel is one of the international companies which has excellent food technology in doing egg grading and packing. I am amazed with its detailed operations. As an illustration, how Nabel can make analysis on the quality of eggs and identify into different grades, removal of dirty and detection of cracked remarks on the eggs. Thanks to its good technology in ensuring food standards and consideration to customers' needs, it makes people feel safe to enjoy the food

quality and healthy eating style nowadays. With company visiting, I found that Japanese emphasize on food safety as they have invented many sensing technology based food production and food loss reduction. With secure and accurate food detection system, other countries should learn from them in our daily life.

The most memorable moment was meeting people around the world. We enjoyed the time to share our cultures such as school life and entertainment. Sometimes, we would chat on some social issues such as environmental protection and cost of living in different countries in order to understand people's living standard and development of a country. Thanks to Kyoto summer program, I could expand my horizon in meeting new friends and exploring different cultures. I wish we can meet each other someday and keep in touch after this program!

### Matcha in Japan

Since I have come to Japan, I find that most of meals are usually served with tea, especially green tea or matcha. I wonder why Japanese love drinking tea very much and I want to know more about the differences in tea in other countries as I am a big fan of tea. Therefore, I grasped the opportunity to know more about the origin of tea, types and tastes of tea throughout this journey.

Tea is one of the important food cultures in Japan. Traced back to the history, tea was first introduced from China in the 700s. Around 1192-1333, a Japanese brought some powdered leaves back to Japan and started to make tea. When more people tried tea and it became popular, people would have tea and guess the types of tea during the gatherings. Up till now, they would have tea ceremony regularly to celebrate different seasons and social events such as marriage and new year. The purpose of having tea ceremony is to create bonding between host and the guest and have a peaceful mind in our busy daily lives.

Before I came to Japan, I would mix up the taste of matcha and green tea. After I went to Uji where was the first place to cultivate to make tea, I identified the differences between them. Matcha is a type of green tea and it is processed with high quality tea leaves. The difference between matcha and green tea is that green tea is the liquid you get from steeping the tea leaves in hot water while matcha powder is consuming the actual leaves themselves. Hence, matcha results in a concentrated tea flavour and much bitter compared to green tea. Indeed, the taste of matcha varies from temperature. If people love to have concentrated and bitter tea, they should consume matcha powder with higher water temperature.

Another than temperature, the taste of matcha can be affected by serving sweets. Having sweets before drinking tea can enhance the flavour of matcha. For example, sweets are usually served in the tea ceremony. Not only can the matcha taste better, sweets also give a sense or taste of season during tea ceremony, especially in the cherry blossom or the fall leaves seasons.

With investigation and observation, I found that Japanese emphasize on healthy eating lifestyle. They regard matcha as a supplement to stay healthy. Compared to coffee or red tea, matcha is a healthier alternative to make you awake because matcha is rich in vitamins and minerals. It can also have anti-aging, reducing stress and losing weight effects. With the aim of maintaining good health, Japanese love drinking matcha all the time!

In Kyoto, people can try a variety of matcha products. Since traditional matcha is bitter, some matcha products may include additional sweet ingredients which may cover the original taste of matcha. Compared the matcha in Gion and Uji, I prefer matcha flavour in Uji as it is not too sweet and the strong tea flavour makes you feel pleasant. People can also try different concentrations of matcha in Uji. Therefore, if you are a big fan of matcha, I strongly recommend you to try matcha in Uji!

**Yung Ching, NG**  
**The Chinese University of Hong Kong**

#### 1. General impression about the program

The Kyoto Summer Program 2019 provided me a chance to visit to Japan and to simultaneously learn the Japanese culture. The program has comprehensively enhanced my understanding on Japanese culture. For example, I have learnt how the moon was described and experienced the beauty of literature in the lecture of

classical Japanese literature, the area which I was not familiar with before the program. Also, I have learnt the spirit of concentration and perfection in business operation through the visit to the NABEL Co., Ltd, and the importance of environmental protection through lecture. These aspects of Japanese culture may not be easily experienced if I only visit to Japan as a tourist, and the Kyoto Summer Program 2019 provided me a chance to know different aspects of Japan, and to have a unique learning experience.

Furthermore, the most unforgettable activity in the program was the field trip to Lake Biwa, it was because the professor had mentioned that he had drunk the fresh lake water, which I thought was unbelievable, in the lecture. However, after having experiments on the boat, we have tried the fresh lake water, which was similar to the water we drank every day. This experience was very unique, since I have tried the fresh Lake Biwa water, and it was the most unforgettable activity in the program.

In addition, the program provided me a chance to learn Japanese. With the help from the teacher and supporters during the Japanese classes, I have learnt more about the vocabularies and the phrases, and I could use some basic expressions during my trip in Japan. Although the program was short, I have learnt some useful expressions and I could have a short self-introduction after the Japanese classes!

Apart from attending the lectures and Japanese classes, I have also participated in the interesting cultural activities organized by supporters. Through chatting with supporters, I have also learnt a lot about the daily life of Japanese.

The Kyoto Summer Program 2019 was unique and meaningful, since I have learnt a lot from lectures and Japanese classes. Besides, I have also learnt and experienced the beautiful and unique Japanese culture.

## 2. Cycling in Kyoto

The Japanese railway system is famous for us. However, before visiting to Kyoto, I have found that some books recommended tourists to ride bicycles in Kyoto, so I was interested in the transportation system in Kyoto before visiting to Japan. During the program, I have walked for about 10km everyday, and I have observed that cycling was popular in Kyoto. Moreover, the high transportation costs have caught my attention on the transportation in Kyoto, so I am interested in this topic.

Cycling is popular in Kyoto because of a few reasons. First, the checkerboard-like roads in Kyoto make it suitable to ride bicycles. It is not easy to get lost and it is safe to ride bicycles. Second, the relatively expensive trains, buses, and subways increase the attractiveness of cycling. Moreover, the destinations sometimes may not be near the stations, which makes it time-consuming to change between different means of transport and to walk from the stations to the destinations. So, it makes cycling to be more economical and faster than other means of transport. Furthermore, buses are crowded in peak hour, and a traffic jam may be faced. These disadvantages show the convenience of cycling. In Hong Kong, the transportation cost is not as high as that in Japan, and most of the places are near the stations, which makes cycling not that attractive in Hong Kong compared to in Japan. Third, drivers, bicycle riders, and pedestrians follow the traffic rules, so it is safe to ride bicycles in Kyoto and this increases the attractiveness of cycling. Fourth, compared to walking, cycling is more convenient and faster. These reasons have contributed to the prevalent use of bicycles in Kyoto.

The unique culture and city design increase the attractiveness of cycling compared with other means of transport. Besides, visiting with bicycles in Kyoto allows tourists to experience the unique transportation culture in Kyoto. These reasons explained why cycling is popular in Kyoto.



Picture 2: Tokyo with heavy haze, 1968

And in the program there's two lectures referring to the pollution of Japan. One is about the minamata disease (水俣病), the other is about the Lake Biwa (琵琶湖). From these lectures, I know that up to now the Japanese government has not solved the issue of minamata disease thoroughly. Many residents who got minamata disease due to the chemical pollution are not officially recognized as the victims. Therefore, they

can't get the compensation and many of them lead a hard life. As to the Lake Biwa, the water there deteriorated in 1960s, and it took the government over 30 years to make the lake clean again. So we can conclude that for both Japan and China, the development model is very similar—to pollute firstly in exchange of prosperous economy and then start to restore the broken environment. That's exactly the old-fashioned viewpoint of "grow now, clean up the environment later". Japan has gone through the whole process but China is still in the way. Honestly speaking, that's really a bad way for social development. It is inefficient and not environment-friendly. That's why we advocate sustainable development now. Sustainable development, by the definition of Wikipedia, is the organizing principle for meeting human development goals while at the same time sustaining the ability of natural systems to provide the natural resources and ecosystem services upon which the economy and society depend. It indicates that when developing the economy, we should take the environment into consideration. After all, nobody will feel happy if surrounded by tons of smelly trash. I hope that sustainable development will be adopted by everyone and all the countries. And under the guidance of sustainable development, I'm confident that before long China will become a beautiful country like Japan!

**Jaeyeon, JEON**  
**Yonsei University**

#### 1. General Impression about the program (300-500 words)

[ At the certificate ceremony, I was honored with the opportunity to represent Yonsei University and give a speech as the ending remark. For it strikes me that this was perhaps the most truthful and compact way of articulating my impression, I have put the manuscript without rendition below. I hope this will convey the sentiment of gratitude and indebtedness in the most intact and complete manner. ]

I have a friend who's doing her Ph.D on the international relationship between Korea and Japan. She once told me that my understanding of Japanese society is akin to that of the Western people. I did not know how to react to this, and still don't, but it definitely gave me some food for thought.

UIC or Underwood International College at Yonsei university is heavily under the influence of the U.S. and the English language. Not only are the classes conducted only in English, but the majority of our faculties are either from English-speaking countries or had long been exposed to the education from the states. I myself also have studied English Literature for 2 years before switching to Comparative Literature where I fell in love with the European art and philosophy, so it goes without saying that despite my Korean identity, the impression I have on Japan would differ from, say, a 50 year-old Ojii-chan, or Ahjussi in Korean, who was born and raised in Korea with the educational background that must have instilled a far stronger sense of patriotism in himself.

In that sense, getting to know Japan becomes an incredibly individualistic process. Il-wha, who's from Ulsan and who studies Design Management would have a different point of view from Hye-in, who's from Seoul and studies Technology Management. Quite probably, Phuong from Vietnam would have a radically different perspective than me, and my ideas would surely differ from the fellow German students.

What I am trying to get across here is that, the reason why every impression is bound to be subjective is because there are so many levels, so much diverging experiences, such complicated dynamics taking place even within a single person. And then, to make things more complicated, there are different shades of Japan. There would be the Japan that Japan wants to introduce, but there is also a side of Japan in its entirety. There would be Japan that Japanese people experience in their daily lives but even that would differ depending on where each person is coming from. All these said, it's evident that there will always emerge a constant and unavoidable mismatch in anyone's future endeavors of understanding Japan.

However, as someone who has always had, and will always have, a soft spot for Japan and its culture, I opt to bridge the discrepancy between such varied shades within myself and such diverse hues of Japan. And if one has to start at some point, it's always better to start with those who are considerate than reluctant, kind-hearted than cynical, and most importantly those who are willing to give help, even at the sacrifice of their own convenience. That said, I would like to take this opportunity to extend my gratitude to all the faculties and supporters here. Only through your hard works and patience could this summer program come true, and the four of us from Yonsei university deeply and sincerely appreciate your guidance and support.

As everything good has to come to an end, today effectively marks the end of the 2019 Summer Program. However, in the hope of meeting you all in the near future, the memories we have made together will always remain near my heart. Thank you.

## 2. The Beauty of the Void

**In the final volume of his masterpiece 『A la recherche du temps perdu』, Proust argued that the literary realism and the authors who claim to belong to the group couldn't be further from the reality despite their attempts at “describing the things(*Décrire les choses*).” Similarly, in her essay “Modern Fiction,” Woolf criticized the writers whose foremost concern is the minute description of the reality because their writings eventually fail at capturing the essence of life that every novelist must strive to crystalize. Listening to these authors, it becomes natural to question whether reproducing a replica of the real world in fictions is actually to no avail, because it is, in Proust's language, only the “surface” of things, and in Woolf's language, nothing but “ill-fitting vestments.”**

Then how is this literary modernism in Europe relevant to Japanese literature? During her lecture entitled “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”, professor Yukawa mentioned Donald Keene's “Essay in Idleness.” Here, Keene praises Japanese literature for its capability to leave the void as it is, and even appreciate this emptiness for its very characteristic. In his claim that “Asymmetry and irregularity allow the possibility of growth, but perfection chokes the imagination.” it is my belief that there is an element that resonates with the modernists' antipathy against the microscopic, and thus stifling descriptions.

One of the examples that epitomize this tradition might be Kawabata Yasunari's novel “『雪國』[Yuki-Guni],” whose first sentence is so popular that even people who haven't read the book recognize the opening sentence. [国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった<sup>3</sup>] In these three sentences, what the author offers is not specific at all. However, what we readers receive is the full imagery of the setting. Although it's vastly different from the dense descriptions of the realists, it still makes us envision that precise moment when we get out of the tunnel and see the snow-laid plain for the first time.

In my opinion, Kawabata Yasunari manages to perform this so adroitly because he did not try to duplicate the real setting. Instead, he left the void as it was, only with the incredibly poetic signal words like “夜の底” (which could only be translated in a roundabout way in English) and gave us room to fill with our own imagination. As Donald Keene remarked, because it is not the perfect replica, it allows the readers an opportunity to imagine and thereby participate in the creation of the fictional world as an active agent. For the realists, readers' task would have been only to materialize the given text, faithfully obeying the indications. However, in Yasunari's fictional world, there is no longer the strict demarcation between the work of an author and that of the readers. With the positioning not unrelated to what Barthe once called “*La morte de l'auteur*,” I find the undying thread of modernism that negates descriptions and gives rise to the role of readers continued from the Ancient Japanese poetry to Yasunari's immortal work of art.

**Ilhwa, Ryu**  
**Yonsei University**

### 1. General impression about the program

It was the first time that I have stayed in abroad over a week. I struggled with language barriers, limited budget amount, harsh weather, confusing schedules and sometimes my health condition blocked me from joining activities. Everyone, except a boy from the same university was new to me so that I had to introduce myself over ten days during the program and a huge amount of personal information was there to be memorized. It was a big burden to be friends with everyone, however at the same time it was sincerely a big honor and pleasure to hanging out with them.

One day, in a hotel lobby, I had a chance to talk about overall culture with a Chinese student, majoring in physics. His background was totally different from what I have and we both had a lot of amazing stuffs to share together. Starting from languages, we dealt with education, politics, leisure facilities, and etc. Even though I had already had numerous conversation on culture differences with other students throughout the program, that night is unforgettable because the talk went beyond sharing information itself, but it was based on our friendship which had been built somewhat sturdily as time passed by. It was more like a true cultural exchange since it was a friendly chatting rather than an intentional culture exchange.

---

<sup>3</sup> Edward G. Seidensticker's translation is as follows: “The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.”

The day before the last day, I had a dinner with two supporters whom I spent whole two weeks together. I could visit the very old Japanese food restaurant where even one of their parents used to come when he was a student. When I heard the story, I felt like I was in a line of time in which every person strives to make its own life value. I thought I was floating somewhere between the past and the future rather than existing as a dot in a fixed temporal spot. I think the mixed usage of three languages including Korean, Japanese, and English made the obscure atmosphere clearer.

## 2. Butoh-kan

Butoh is an avant-garde dance that was born in Japan in the 1950s. Butoh reflects a Japanese original physicality and spirituality as a unique style of performance art, possessing its exclusive aesthetic value. Butoh challenges conventional formats of performance art as it focuses on the themes or messages the artists try to convey rather than sticks to developing superficial elements such as appearance or regular orders. Butoh artists with white make-up sensitively use their bodies so that we can hardly recognize their movements unless they create sounds as a channel of their messages. These features have high praise internationally among people who pursue such arts.

Unfortunately, the domestic population pursuing the artistic value of Butoh is extremely declining that even it is not aware among people who live near Butoh theater. Butoh's position in art world is comparatively timid than Kabuki which has a widely known reputation among not only Japanese themselves but also accompanied global fans.

In my opinion, I believe Butoh-kan in Kyoto has the responsibility to maintain the value of Butoh and make the public keep track on the art at the same time. Of course, it is knowledgeable to revive a historic Japanese storehouse as a venue of Butoh by making the audience be purely immersed by the Japanese-exclusive experience. However, I assert that at least Butoh should be able to be caught by the people who try to pursue the artistic value. The current situation even seems to prevent the popularity of Butoh and try to be away from the public by remaining in a tiny corner of houses, blocking itself to be recognized.

Art products are not something that we can touch or see directly. Art should be felt or experienced to be existed. What makes the value of art comes from the people who pursue it. Therefore, Butoh-kan should take its responsibility to expose itself to public rather than sticking to its mysterious value no one would know.

**Thi Lan Phuong, NGUYEN**  
**Yonsei University**

## 1. General impression about the program

The Kyoto Summer Program was the highlight of my summer this year. As someone who has never been to Japan before, I was welcomed with warm hospitality and made wonderful memories with Japanese people and international friends. Firstly, Kyoto University's staffs and professors were extremely kind and helpful. The staffs aided my visa process since day one and continued to help me during the program. I am extremely grateful that everyone cared about me when I was sick and offered to take me to the clinic. Even though my illness prevented me from participating in all of the program's activities, I can see the dedication invested in the planning process and enjoyed the Japanese lessons, lectures, as well as the field trip to Nabel and Biwa lake. I believe that the program was truly successful because it tried to incorporate exchange students into Japanese everyday life for two weeks. As I walk to school everyday on the bank of Kamo river to be welcomed by professor and friends in the Yoshida International House, I truly felt like a student in Kyoto University. Secondly, I appreciate the effort of the supporters in helping me study Japanese and taking me to various places in Kyoto. Many supporters were younger than me yet they demonstrated brilliant leadership and organizational skills. I am also impressed by their language abilities, knowledge and friendliness, which reflects the qualities of Kyoto



University's education. Lastly, I am thankful to have had the chance to spend time with international friends from East Asian countries and Germany. Hearing perspectives from different parts of the Chinese speaking community enlightened my understanding of the political and cultural situation in China and nearby countries. I am also impressed by everyone's language abilities and intelligence. As someone who only speaks English and some Korean, I feel a strong urge to learn from friends in the program and improve my language skills. All in all, I believe that the Kyoto Summer Program is a leading example of organization and inclusion. I hope to write more about the program and would definitely recommend the program to my peers.

## 2. Modern Kyoto: Where shadow meets light

This is my first time in Japan but my interests in Japan and Japanese literature started after my freshman year class on Tanizaki Juichiro. Tanizaki is a famous Japanese author who was active during the first half of the twentieth century. Writing at a time of influx and uncertainty, his work reflects the anxiety of the inevitable to transition modern life style.

By the 1930s, Tanizaki claimed in his essay *In Praise of Shadow*, with the single exception of America, no country in the world suffered from an excess of electric lights and neon than Japan: Einstein, on a visit to Kyoto, observed that artificial lights burned in Japan even during the day. Yet so many aspects of Japanese culture, Tanizaki argued, relied on the nuance of shade — hints and allusions and an appreciation of age and patina. Whether discussing Japanese ceramics, noh, even the Japanese toilet, a Japanese mind is bound to care for light and shadow. *In Praise of Shadow* was the text that changed my understanding of Japanese as well as Asian culture. At the turn of the 20th century, Asian countries accustomed to the dimly lit light of the candle and moon were forced to be exposed to the lime light of Western modernity. Electric light was a shock, and fervent condemnation of electric light or anything modern hints an underlining pain of a people who were forced to be modern.

I came to the Kansai region in search of the shadowy world that Tanizaki once adored. From Kyoto to Kobe, Himeji then Nara, at every temple that I visited, I asked to see the traditional Japanese toilet that Tanizaki wrote so fondly about in his various writing. I did not find any of them. The traditional Japanese toilet is now replaced with the high tech toilet from TOTO, a modern invention yet essentially Japanese. I abandoned central Kyoto in search for the shadow high in Kurama mountain. Embraced by the shadow of the forest and temples then stood in awe every time the sunlight pierces through the leaves, I finally understood the importance of shadow in Japanese culture. We are able to appreciate light not because it is beautiful but because it was embraced by a shadowy background. Yet as I reached Kifune shrine I was welcomed with free Wifi and a personalized app to read fortune in different language. Under the shadow of the magnificent wooden structure of Kurama temple, with my free Wifi and a brilliant view that is comparable to heaven, my search for a preserved shadowy world came to an end with failure but compensated with a novel perspective: The contemporary Japanese people were able to transform the Western light that tormented Tanizaki once into something of their own. From our corporate visit from Nabel to Panasonic, I have the chance to witness the latest technological invention of the Japanese. Tanizaki argued for a deep appreciation of darkness and the unknown as an attempt to remind Japanese people of the importance of preserving Japanese culture. As I ride on the rapid train that passes through tall buildings and temple grounds everyday, the profound shadow of traditional life blends effortlessly with the brilliant light of modernity. Kyoto welcomed me with a curiosity of its shadow, and now I will leave with the addition of an understanding of Kyoto's localized light.

My days in Kyoto are numbered, and at the end of the journey I went to visit Tanizaki's grave in Kyoto. Deep down the Philosopher path, under a beautiful sakura tree that he planted himself, Tanizaki rests in the world of shadow that he vowed to protect. I hope that Tanizaki will be content, knowing that the people have successfully walked out of the binary world of traditional shadow and foreign light of the twentieth century to create a harmonious world of their own. I would like to thank Kyoto University for allowing me the chance to visit this wonderful city and Tanizaki resting spot. The two weeks in Kyoto deepened my understanding about Japanese culture, and I hope to return once again when cherry blossom blooms on the bank of the Kamo river where we walked to school together in the memorable summer of 2019

## 1. General Impression

一期一会 (ichigoichie). This Japanese saying by Sōji roughly translates into “one life, one encounter.” It describes every meeting as a once-in-a-lifetime encounter and encourages us to give each moment of our lives our all. 一期一会 also happened to encapsulate the two weeks that I spent with 46 other people in Kyoto. The students and professors at Kyoto University welcomed us with open arms and offered us the warmest hospitality imaginable. The Japanese supporters and professors were not the only new acquaintances I made along the way. The KSP participants of 2019 mostly started out as a crew of strangers who came from different countries and were at different stages of their lives. Throughout the program, however, we were able to take to these new connections and friendships with the utmost enthusiasm.

In Japanese class, we watched a silent film made in the 1930s and worked together to lines for the script. During lunch hour, we got to mingle and share not just a meal but our diverse languages as well. After the official obligations of the day came to a close, we would take a walk to Kamogawa River, grab a can of beer, and share conversations that were at times intellectual and at times casual.

During one of these after-hours outings, a fellow participant from China and I discussed the ideal forms of government, openly addressing the flaws and pitfalls in those of our native countries and the U.S. As someone with preconceived notions as to China’s tight grip on its citizens’ absolute patriotism, being able to talk openly about its political system with a Chinese national came as a particularly enlightening surprise. We also talked about how law and politics are often shaped entirely by the decision maker’s point of view, which led to a lively exchange on why scientific fields such as artificial intelligence should not set themselves apart but communicate and collaborate with the humanities.

In the end, we grew to recognize one another as companions, roommates, friends, and so much more. The 2019 Kyoto University Summer Program left me with invaluable encounters that took me beyond my textbooks and showed me a whole new world. I thank everyone who took part in this unforgettable experience that will no doubt shape my future for the better.

## 2. Locating Ourselves Through the Passage of Time

My two weeks in Kyoto were a vivid glimpse into an important site of nostalgia, a place where centuries of history intersect with the hustle and bustle of the present. The soba restaurant located in the middle of the downtown area had a history that dated back to the 1400s; the Higashiyama district I often strolled through had a history of more than 1200 years. Kyoto is a city steeped in a distinct sense of tradition and serenity, inevitably bringing to mind the topic of “nostalgia,” one of the most commonly addressed themes in Japanese culture.

Many renowned Japanese animations have focused on the elements of time and nostalgia. Shinkai Makoto’s *Your Name* deals with two lovers from different points in time and depicts a mutual attachment that transcends that divide. Similarly, *The Girl Who Leapt Through Time* by Hosoda Mamoru illustrates a male protagonist who travels from the future due to his attachment to the present. Eventually, he goes back to the future with his emotions and feelings hovering in the present. *5 Centimeters Per Second* also follows the story of a protagonist who continues to connect with his younger self instead of residing in the present.

Some say that it is best not to be caught up in the past, but “nostalgia,” which refers to a sentimental longing for the past, can in fact have a positive impact. It improves your mood, strengthens positive self-esteem, and even provides existential meaning. While the whirlpool of intense emotions dragging oneself towards the past may sometimes be difficult to overcome, our wistful recollections of the past offer us a piece of magic to hold close to our hearts in real life.

Growing up is an inevitable process. True change begins not from gaining more knowledge but from forgetting. The forces of oblivion can very well take away the innocence of childhood and cause one to neglect their identity. Buried under piles of work, endlessly shifting social circles, and the daunting uncertainty of the future, people forget who they once were. However, in Kyoto, the city where the past and the present co-exist, I was able to become an academic and individual who deeply appreciates both what has come before me and what lies ahead.

## 1. General impression about the program

The “Kyoto University Summer Program for East Asia and Germany” was a special experience for me and I am very grateful that I was allowed to take part in it. The program was very diverse and included *different lectures in various topics* – even topics beyond my different major subjects. Another important part of the program was the *Japanese language lessons* and *study visits* to (non-) university learning areas.

Due to the heterogeneous composition of the participants (undergraduate/graduate, major, general field of study), the summer school offered the opportunity to learn something beyond someone’s own field of expertise. In addition, the lectures and lecturer contributed this. Related to this aspect I would like to refer to Prof. Goto’s (University of Shiga Prefecture) lecture and the subsequent field trip to the middle of Lake Biwa.

My impression of the Japanese lessons, which were also a main part in the program’s schedule, is a little divided. Personally, I was very pleased about the schedule we got before the program started because the Japanese lessons were a good opportunity to continue my study of Japanese language which I began at Tokyo University of Foreign Studies in April 2019. On the one hand, I think, the difference between Level-1 (starting with ひらがな and self-introduction phrases) and Level-2 were too high. At this point I would have preferred a level between Level-1 and Level-2 class. In the end, I chose after a consultation with Prof. Kawai the Level-2 class. Even though the course was very challenging for me, I think it was the best option. With some help from the Kyoto University Supporters it was possible for me to follow the class. In the end, on the other hand, there was a good middle course for this “problem”.

I also want to highlight the cordial and good support from organizers of the Kyoto University Summer Program and especially from the team of “Supporters”. They made every imaginable effort for feeling welcomed in Japan, Kyoto and at Kyoto University. Also, beyond the parts listed in the schedule, they have shown honest interest in the different countries, cultures, beliefs and experiences of all participants who took part in the program.

All in all, I enjoyed the “Summer Program for East Asian and Germany” at the prestigious Kyoto University very much. I also had the opportunity to get to know students from different parts of East Asia, discuss with them about various topics and learn something beyond my study program.

## 2. 日本語 and German: *Haiku* (俳句) as a part of Language and Literature

The topic I have been particularly interested in during this the summer program is the Japanese short poetry form *haiku* (俳句). One of the main reasons is the combination about Prof. Yukawa’s lecture about “The Aesthetics and Sensitives of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature” and my interest in German (and comparative) literature. Prof. Yukawa told us about one of the main motives in Japanese literature – the *seasons*. In this context, she showed examples written in the form of *haiku*. During my research about *haiku* and its exact definition, I found out, that there are different perspectives possible for a definition of *haiku*. But in general, a *haiku* can be defined as a specific form of Japanese lyric – more specific: poem – that consists out of 17 syllables divided into three lines with each five, seven and five syllables. In its original tradition, *haiku* are connected the topic of *nature* and *seasons* in the field of Japanese classic literature.

Because I know this specific form of poem out of my school curriculum, I was interested in a potential German adaption of this special form of poem. Furthermore, I expected some problems the writers had to deal with while transforming *haiku* in a European or German form. Also, I tried to explain if there was a specific reason why *haiku* became interesting for European and German writers in the 1920s.

In this short overview I will try to present at least one aspect for each question of interest. Obviously, German language and Japanese language differ in a high quality. So, the original form was not easy to transfer to German language. In the European and German literature there are – also in Japanese literature nowadays as well – “original” and “modern” variants. While the seasons are an important topic in Japanese literature, also the German adaption the main topics were as well *nature* and capturing moments in a short poem (related to *impressionism*). Especially after the second World War the *haiku* was rediscovered. So, nowadays, the variety in topics is big – also in Japan. The following example shows a *haiku* with a modern topic, unattached to *seasons* and *nature*:

Claudia Brefeld  
*lighting a candle*  
*my hand touches the ground –*  
*war cemetery*

One of the last aspects I was interested in about *haiku* is related to its reason for popularity in European countries like Germany. Around the *fin de siècle* a big interest of Japan was recognized in Europe (*Japanoisme*). A lot of people were interested in Japan's history, art and literature, what might had an influence on *haiku* in Germany and Europe in general.

#### References (selection)

- Kobayashi, Issa (1991). *Issa, cup-of-tea poems: selected haiku of Kobayashi Issa*. Translated by David G. Lanoue. Asian Humanities Press.
- Sterba, Carmen (2013). *"Thoughts on Juxtaposition". Simply Haiku: A Quarterly Journal of Japanese Short Form Poetry. Simply Haiku*. Retrieved 9 April 2013.
- Yamada-Bochynek, Yoriko (1985). *Haiku East and West*. Bochum: Universitätsverlag Brockmeyer.

**Christopher MAUERSBERGER**  
**Technical University of Munich**

### 1. General Impression about the program

Before the program, I have already spent about four months at Kyushu University in Fukuoka where I had already experienced a lot. Nevertheless, I must admit: The Summer School at Kyoto University was one of my highlights during my time in Japan. Most importantly, it helped me a lot in reflecting my time in Japan as well as improving my Japanese as I could even learn some words and expressions of Kyoto- and Kansai-ben.

The latter is especially due to the supporters who I talked with quite a lot. But I also have to thank the language class and its very good and patient teacher. By watching the same scene of the anime "Sasae-san" as long as it took to understand the words spoken for example, my comprehension skills enhanced a lot. This is crucial for daily life.

Within the program, I could not only make Japanese friends, which I hope to see again in future. I also made friends within the German colleagues as well as with Hong Kong, Vietnamese, Taiwanese and Korean students. As I will travel to Taiwan and Korea in September, I am looking forward to visiting latter ones.

Besides these aspects, I was impressed by the variety the program offered. It covered basically every area of university research, from linguistic over cultural to social as well scientific issues.

Especially the trip to Lake Biwa will remain in my memories as a highlight. As a cultural aspect, we visited Hikone castle; as a linguistic aspect, I could practice Japanese with the supporters and made some friends with them; as a scientific aspect, we made experiments with sea floor in the laboratory as well as experiments on the lake. I am therefore highly thankful for the organisation and for Professor Goto's high efforts.

Another event which inspired me a lot, was the lecture about Chimpanzees by Professor Matsuzawa. Since I came to Japan, I have been thinking a lot about the way humans learn – as I was looking for an efficient way to become capable of Japanese. It was therefore amazing to see Chimpanzees learning new things by just watching without actually being "taught". Therefore, I think the best way for gaining speaking skills in Japanese is to listen a lot (to get a feeling for the language) and then to try to speak a lot (until it works, like the little chimpanzee trying to open a nut).

I am highly thankful for these aspects of the program as well as all the aspects and many activities I could not mention within these lines. I hope the Kyoto Summer Program will continue for many more years and fill international students with enthusiasm for Kyoto University as well as Japan. With this hope, I would like to end with a quote of Sir Thomas More: "Tradition is not to preserve the ashes but to pass on the flame."

### 2. Vending Machines in Japan

When I came to Japan, there were basically two things that I realized as the biggest difference between Germany and Japan when walking through the streets: Clean toilets everywhere as well as vending machines at every corner.

When I did some research about the issue of vending machines, I discovered I was not the only one trying to find an answer to the question, why they were so successful in Japan – but hardly found in other countries. Many web pages exist describing vending machines (自動販売機, where there are sometimes quite fancy ones) as a Japanese phenomenon.

Today, about 5 Million vending machines exist in Japan (according to different web pages); that is one machine per 25 people on average. Indeed, after my experience in Kyoto, this number seems quite possible as there were even seven vending machines in front of the hotel and more than 25 machines on my only 20-minute walk from the hotel to Yoshida Campus.



*Figure 1: Vending machines in front of the hotel*

Several theories exist for the vast distribution of vending machines. First of all, they are very convenient and with about the same prizes of combinis – available twenty-four hours a day, 365 days a year. This would of course not only be true for Japan, but in addition to other countries, there is relatively little vandalism.

Secondly, natural hazards such as typhoons and earthquakes often occur in Japan. Out of historical view, this might be a reason for the desire of supply security in “normal” times (what might also be a reason for the many toilets). Furthermore, some vending machines offer their drinks for free as well as some crucial information in times of catastrophes.

Another, economical reason for the success of vending machines exists: “Competitive” machines are often clustered as can also be seen in figure 1 (CocaCola, Asahi and Ito-En). At first, this might seem as a reason against success, however, an old wisdom says “competition stimulates business”. Nevertheless, for this effect to become true, vending machines must have already existed.

To conclude, both high supply and high demand led to the high success of vending machines – which led to higher supply again.

Indeed, reasons for the success of vending machines are quite complex. I would like to do further research on that – if I had the time.

**Artur, USBEK  
Technical University of Munich**

### 1. General Impression about the program:

The Japanese classes were really interesting, because they aren’t directly aiming to teach Japanese grammar, but to improve the Japanese language proficiency by studying the Japanese culture. Therefore, I could learn a lot about Kyoto and the Kansai region. The logical consequence of the short duration of this program is that my standard Japanese has only improved slightly, while my Kansai-Japanese has made a huge jump.

Besides, I learnt a lot through the different lectures which were provided by the professor. I would have never had the chance to get such a broad view about so many various subjects and I was especially fascinated and shocked about how smart chimpanzees are. Maybe we can apply these results in Engineering for AI too.

Nevertheless, the best point about this program are not the lectures, Japanese courses or the activities, but by far the people, who I was able to talk to. Speaking to the Japanese Supporters and people in Kyoto in Japanese and Kansai-Japanese and seeing them smile, then being greeted wholeheartedly by the Thai and Vietnamese students after I changed to a higher-level Japanese course and also all the beautiful late-night discussions, I had with my Asian roommates, made this program such a success.

I personally think that I learned a lot about Asian countries, their values, traditions, communication and most important their friendliness.

## 2. Japanese Philosophies in Aircraft Design:

Through the lectures “High Economic Growth and Minamata Disease”, “Sensing Technology Based Food Production and Food Loss Reduction for 9 Billion Global Population Time” and ”The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature” I got interested in, how Japanese companies are attacking Aesthetic, Environment and Waste Problems in aircraft design.



**Figure 1:** The proof-of-concept HondaJet, retired in 2011 [1]

For example, in Fig 1 the Honda HA-420 HondaJet can be seen. Michimasa Fujino the Designer of this airplane was trying to achieve an advanced light jet with high fuel efficiency and highspeed capability. The special characteristics are the Over-The-Wing Engine Mount (OTWEM) Configuration and the natural laminar flow (NLF) technologies. The OTWEM-Configuration is eco-friendly, because of its wing acting as a shield and reflecting the noise away from the ground. The wing is also not mounted on the fuselage, so vibrations are not transmitted directly into the fuselage, so it is less noisy inside the cabin. On top of that this configuration reduces the fuel consumption, because it reduces wave drag at transonic speeds. The aircraft structure, which is made out of a co-cured integral structure combined with honeycomb sandwich structures, is manufactured out of composite material. Therefore, the unique aerodynamic contoured could be achieved, followed by a better cost-performance of the jet. By using an NLF-nose and NLF-wing the aerodynamic drag could be reduced further [2, 3]. This special nose makes this aircraft aesthetic appreciable and gives the airplane the look of a kingfisher. The kingfisher was also used as an inspiration for the Japanese high speed and highly efficient bullet-train Shinkansen by Eiji Nakatsu, an Engineer and birdwatcher [4]. So, it can be said, that Japanese are paying a lot of attention to nature and trying to transfer these small details into technology. The HondaJet is therefore an aesthetic, environmentally friendly and not wasteful aircraft.





**Figure 2:** Mitsubishi Regional Jet [5]

Another example is the Mitsubishi Regional Jet (MRJ) seen in Fig. 2. The smaller variant of this airplane is called Mitsubishi SpaceJet. Since it is their first jet after a long period of time, designing this jet from zero allowed Mitsubishi to use cutting-edge Aerodynamics as the characteristic streamlined nose, high aspect ratio wings and enhanced optimized wing and engine configuration [6]. The Japanese's love for details can be found in the wing and engine configuration, where a new optimization method has been used to detect a low-pressure region caused by a shock wave between engine nacelle and wing, leading to lower drag and therefore lower fuel consumption. These enhanced aerodynamics and the new lightweight composite structures contributed to the aircraft's environmental footprint [7]. Another side effect of the enhanced aerodynamics combined with new more efficient Engine is the lower noise region at airports and lower emissions, making it the greenest jet in its class [8].

Finally, it can be said, that the Japanese philosophies I have learnt in the Kyoto Summer Program can also be found in aircraft design. Furthermore, Japanese airplanes are not only environmental friendlier and aesthetic, but also the new cabin designs and engine configurations allow more space and comfort for the passengers.

## References

- [1] *Gallery of Exterior Photos - Hondajet*; Honda North America Inc. (US); URL: <https://www.hondajet.com/gallery-and-downloads/exterior#9> (last visited on 16/08/2019).
- [2] *A History of Business Jet Innovation - Hondajet*; Honda North America Inc. (US); URL: <https://www.hondajet.com/hondajet/innovations> (last visited on 16/08/2019).
- [3] *SAE International to Honor Honda Aircraft Company President Michimasa Fujino with Clarence L. (Kelly) Johnson Aerospace Vehicle Design and Development Award*; Honda North America Inc. (US); URL: <https://www.hondajet.com/news/article?articleType=pressrelease&categoryType=719f1a30-8817-401a-be07-9b5bf5e0156a> (last visited on 16/08/2019).
- [4] *How one engineer's birdwatching made Japan's bullet train better*; Tom McKeag; 9. October 2012; URL: <https://www.greenbiz.com/blog/2012/10/19/how-one-engineers-birdwatching-made-japans-bullet-train-better> (last visited on 16/08/2019).

- [5] *MRJ Wallpaper*; Mitsubishi Aircraft Corporation; URL: <https://www.flythemrj.com/j/media/> (last visited on 16/08/2019).
- [6] *The Mitsubishi SpaceJet*; Mitsubishi Aircraft Corporation; URL: <https://www.mitsubishiaircraft.com/spacejet> (last visited on 16/08/2019).
- [7] *Optimizing The MRJ's Aerodynamics Through Advanced Design*; Mitsubishi Aircraft Corporation; Shigeru Obayashi; 18. September 2017; URL: <https://progress.flythemrj.com/optimizing-the-mrjs-aerodynamics-mode> (last visited on 16/08/2019).
- [8] *Mitsubishi SpaceJet Brochure*; Mitsubishi Aircraft Corporation; URL: [https://cdn2.hubspot.net/hubfs/5868074/The-Mitsubishi-SpaceJet.2.pdf?\\_\\_hssc=122718548.3.1565660867005&\\_\\_hstc=122718548.da652dc24d7a37c0b6605303efb6ea60.1565660867005.1565660867005.1565660867005.1&\\_\\_hsfp=657257952&hsCtaTracking=34cd7f38-8750-4246-b899-793261c427f3%7C1a8a76ea-ccdc-42b7-82dc-d48a1b7e3f1c](https://cdn2.hubspot.net/hubfs/5868074/The-Mitsubishi-SpaceJet.2.pdf?__hssc=122718548.3.1565660867005&__hstc=122718548.da652dc24d7a37c0b6605303efb6ea60.1565660867005.1565660867005.1565660867005.1&__hsfp=657257952&hsCtaTracking=34cd7f38-8750-4246-b899-793261c427f3%7C1a8a76ea-ccdc-42b7-82dc-d48a1b7e3f1c) (last visited on 16/08/2019).



General Impression:

Talking about the exhibitions I really have to emphasize how much the supporters did for us throughout these 10 days. There were always interested in talking with us. Spend a lot more time with us than they had to and even did a lot of things with us that were not part of the curriculum. Without the supporters we would have had only half as much fun and half as much experience. I really have to thank them a lot for everything they did.

Next to the excursions we of course also had Japanese classes. Apart from the difficulties in the beginning with finding the correct class for us I really did profit a lot from the lessons. The teacher was very understanding about our situation and changed her teaching plan in a way that we were also able to follow. Also she made us very helpful sheets summarizing the grammar points we needed. During these lessons we did write, talk and read a lot. Which are the usual activities not done in the usual language classes. This helped improving my Japanese skills in a very effective way and also took away the fear of using the language in everyday life.

Lastly we had several lectures, the Panasonic museum and the company visit that we did. Because the interest in the lectures surely depends on the interest one has for the topic I was interested in some of them more in some of them less. Specifically interesting was the Chimpanzee lecture which was not only very entertaining but also contained some very surprising information about these animals. Also the lake Biwa excursion was very interesting and I will surely never forget the fact that I can drink water from 40m deepness. Not so much impressed was I by the Panasonic museum and the company visit. For the company visit I had much higher expectations. I thought we would really get some insight information how a Japanese company works and what you can expect if you work for one. Instead I had the feeling they did everything possible to give the company the best possible image and made a hiring event out of that visit. I was a little bit disappointed by that. But expectations can break many dreams one had.

The 10 days long summer school of the University of Kyoto invited a lot of students from all across Asia. I usually like this international environment. Just this time I had the feeling that the students did not really mix with each other. The Chinese were always around the Chinese, the Korean always around the Korean and the German mostly together with the other Germans. I found that a little bit sad because I could not discover as much as I wanted. The only exception were the exhibitions that we had. My groups were always kind of small so it was much easier to get in contact.

All in all I was really happy with the summer school and my improvement in my language skills. I have to thank all the persons involved in the program for giving us such a nice experience. I met Kyoto University as a place I would love to return for a longer period.

Templestay program:

When you think about Kyoto you usually connect it with the image of a lot of temples. Since we do not have any temples or shrines in Germany I was always very fond of them. I tried to visit them as much as possible. On my first trip to Kyoto in December I realized how special Kyoto's temples and shrines are. They are much bigger than what you usually see in other cities.

So now on my second trip to Kyoto because of the summer school I searched for more opportunities to visit different temples. More coincidentally I found out about the templestay program. I knew that this existed in Korea but would have never imagined that it also existed in Japan. It started when I found out about one temple where you can have a sleep over. Then I checked the Internet for more of these opportunities and accidentally discovered the term 宿坊 (shukubou) which helped me to find

more information about this topic. Very helpful was here one of the supporters because I could not figure out the right Kanji for this word which was hindering me to find more descriptive information on the web.

Together with the correct word the google search gave much better results. These results gave me hints which temples offer temple stays together with what kind of program they offer and how much these experience would cost me.

Later I decided myself for one of these temples where I wanted to experience a temple stay. I was very curious about how it would change my way of thinking about my life since one of the points on the program was always Zen meditation. I thought that it could actually help me to find answers for some of my questions about my future life that I was unable to answer until now. So I was really looking forward for my trial.

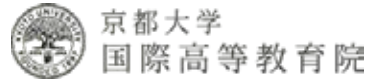
Unfortunately though the bad weather conditions kept me from realizing my plan. The constant 38/37° in Kyoto together with a missing air conditioner in the temple kind of took away the fun from that plan. So I ended up leaving Kyoto one day earlier.

第 二 部  
アセアン諸大学学生のための  
「京都サマープログラム二〇一九」

《主催》



《共催》





## 1 アセアン諸大学学生のための「京都サマープログラム二〇一九」

### 1.1 設立の経緯と目的

国際的に活躍できる人材の育成と大学教育の展開力の強化を目的として、平成 23 年度から大学の世界展開力強化事業（Inter-University Exchange Project）がおこなわれてきた。この事業が焦点を置いているのは以下の 2 点である。

- (1) 日本人大学生の海外留学
- (2) 外国人大学生の戦略的受入にかかわる国際的大学間連携

「京都サマープログラム二〇一九」は上記の（2）のタイプに属している。アジアの諸大学の学生を大学間連携に基づいて受け入れる事業として開始された。以下、簡単に年表を示す。

平成 23 年度	文部科学省による大学の世界展開力強化事業が開始
平成 24 年度	KUASU による《「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成》が世界展開力強化事業の 1 つとして採択される
平成 25 年度	京都大学国際交流センターが KUASU を構成する 1 部局としてのプログラム（派遣・受入）実施および実施準備を開始
平成 26 年度 2 月	第一回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが実施される （森真理子・教授／国際交流センター長、佐々木幸喜・特定助教が担当）
平成 27 年度 2 月	第二回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが実施される （河合淳子・教授、稲垣和也・特定助教が担当）
平成 28 年度 8 月	第三回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される （河合淳子・教授、韓立友・准教授、稲垣和也・特定助教が担当）
平成 29 年度 8 月	第四回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される （河合淳子・教授、韓立友・准教授、稲垣和也・特定助教が担当）
平成 30 年度 8 月	第五回アセアン諸大学学生のための受入プログラムが、東アジア諸大学学生の受入プログラムとカリキュラムの一部を合同にして実施される （河合淳子・教授、韓立友・准教授、西島薫・特定助教が担当）

令和元年度 7 月から 8 月にかけて実施された今回の「京都サマープログラム二〇一九」は、第 6 回目となる。平成 28 年度から、東アジア諸大学学生のためのプログラムとカリキュラムの一部を合同で実施し始め、31 年度までに合同でおこなうカリキュラム内容はさらに拡大するとともに相互連携もより深まってきた。

受入プログラムだけでなく、派遣プログラムも、京都大学とアセアン諸大学の間におけるより良い国際的連携・協力の蓄積に寄与することが期待されており、日本とアセアン諸国で国際的に活躍できる留学生／日本人大学生の育成を目的としている。加えて、KUASU が掲げる 3 つのミッションに準じ、(i) 世界最高基準の日本研究の統合・体系化を見据えた日本語・日本文化教育の実践、(ii) 日本とアセアンが互いに抱える諸問題の共有・解決を見据えた共同学習の実践に、受入・派遣プログラムの主眼が置かれている。

実質的な観点から見ると、受入プログラムは派遣プログラム（上記（1）の「日本人大学生の海外留学」）と密接に連動している。京都大学／アセアン諸大学の同じ学生が、受入プログラムにも派遣プログラムにも参加することにより、交流・共同学習のリレーが続いているためである。さらに、プログラム終了後も、京都大学学生と留学生はSNSを媒介としてコミュニケーションが継続しているだけでなく、自発的に相互の国を訪問しており、本プログラムが相互交流のきっかけになっている。

## 1.2 「京都サマープログラム二〇一九」概要

### 1.2.1 プログラム内容

本プログラムの当初のカリキュラム内容は、おおむね表1のようにまとめることができる。大きく分けると、(A) 日本語学習、(B) 学術的学習、(C) 学内外文化学習、(D) 共同学習の4つのパートから構成されている。文化講座の「書道」における講義を(B)、実践を(C)に分類すると、A・B・C・Dの配分は概ね1:1:1:1となる予定であった。

表1 本プログラムのカリキュラムの概要（1時間半を1コマで換算）

分類	項目	コマ数	割合	内容
A 日本語学習	日本語講義	10	30%	3クラス (基礎中心、聴解中心、読解中心)
B 学術的学習	科学講義	3	10%	農学、霊長類学、環境学
	人文学講義	3	10%	日本古典文学、日本文化論、教育社会学
		文化講座	1	3%
C 学内外 文化学習	文化講座	1	3%	書道の実践
	学外研修	9	22%	琵琶湖疎水記念館、滋賀県学外研修
D 共同学習	学生交流・討議	9	22%	言語交換、文化紹介、発表準備、発表
計		36	100%	

また、1.1 節で言及した通り、本プログラムは国際的に活躍できる留学生／日本人大学生の育成を目的としており、受入・派遣の両プログラムが密接に連携している。双方向型の学生の受入・派遣をより円滑にするため、学生間の交流が最も盛んとなる「D 共同学習」に質的な重点を置いている。

表 2 本プログラムの科目名および担当者所属／協力団体名

分類	科目		所属／団体名
A 日本語学習	日本語講義	日本語 I	京都大学
		日本語 II	
		日本語 III	
B 学術的学習	科学講義	“Asian Advanced Agricultural Technologies (AAA Tech) for 9 Billion People's Food Production and Environmental Conservation”	
		“Human mind viewed from the study of chimpanzees”	
		“High Economic Growth and Minamata Disease: The fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning”	
	人文学講義	“The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”	
		「学校教育にみる日本文化の諸相」	
		「現代日本文化のなかの源氏物語」	
	文化講座	書道	
C 学内外 文化学習	学外研修	琵琶湖疎水記念館（蹴上）散策	琵琶湖疎水記念館
		琵琶湖学外研修	滋賀県立琵琶湖博物館
		琵琶湖調査船湖上実習	滋賀県立大学
D 共同学習	学生交流・ 討議	言語交換・発表準備	京都大学

表 2 は、上記のカリキュラム（表 1）について、科目名や講義等担当者の所属や協力団体の点からまとめた一覧である。

### 1.2.2 実施体制と教員確保

教務関連の運営では、KUASU ユニット長の落合恵美子教授および同事務局長の安里和晃准教授のもと、国際高等教育院の河合淳子教授（KUASU 運営協議会委員）、同じく国際高等教育院の韓立友准教授、学際融合教育研究推進センターの西島薫特定助教が中心となって、全体の力

リキュラムを企画・実施した。琵琶湖学外研修準備においては、滋賀県立大学環境科学部の後藤直成准教授（環境科学部）の協力を仰ぎつつ、各訪問施設の協力を得て企画をおこなった。一方、事務関連の運営では、国際高等教育院教務掛の職員、KUASU の職員および京都大学国際教育支援室の山口聖佳職員の協力を仰いだ。

今回のプログラムも平成 30 年度と同様、科学講義、人文学講義等、研修内容の多くがアセアンと東アジア+ドイツのプログラムにおいて共有された。カリキュラムの準備段階で、京都大学所属の教員を中心に本プログラムの講師担当の打診をおこない、教員確保を進めた。国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター、農学研究科、高等研究院／霊長類研究所、アジア・アフリカ地域研究研究科の教員に講義を依頼し、これまでと同様の講師および新たに依頼した講師から承諾が得られた。

本研修の参加対象大学は、インドネシア大学、シンガポール国立大学、チュラーロンコーン大学、ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学のアセアン4大学（ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学は応募者不在）および国立台湾大学である。プログラム準備段階において、上記アセアン4大学および国立台湾大学に、（1）日本学関連領域（日本学、日本文学、日本史学等）を学ぶ、（2）学士課程または修士課程に在籍する、という参加条件で学生募集の依頼をおこなった。アセアン各大学の責任者をふくめた本研修の全体的な実施体制については、以下の第2節を参照されたい。

### 1.2.3 京都大学学生アシスタント（チューター）

1.1 節で述べた「日本とアセアンの間で国際的に活躍できる外国人／日本人大学生の育成」という目的を達成するため、京都大学学生には、共同学習における発表準備等をはじめとする、日本語学習・学術的学習・学内外文化学習における留学生（短期交流学生）のサポートが要求された。加えて、京都大学キャンパスおよび宿泊施設周辺の案内、京都市内の交通案内、学外研修における引率、生活や修学にかかわる相談など、多岐にわたるサポートをおこなうためにも、京都大学学生の助力は不可欠だった。

上記の目的を達成するため、京都大学学生のサポーターの募集をおこなった。次ページのポスターは募集時に用いたものである。この他にも KUASU のホームページなどでも広報活動をおこなった。募集・選考終了後、オリエンテーションをおこない、京都サマープログラム二〇一九の概要の説明、教職員との連携、京都大学学生としてサポートするという自覚・責任の必要性、研修参加学生とチューターという2つの立ち位置を意識すること等を確認した。その他、健康管理、安全管理、提出書類などについての説明もおこない、アセアン参加学生のためのサポートについて意見交換の場をもうけた。

京都大学からの参加学生の一覧については、以下の3節を参照されたい。





## 京都大学主催 京都サマープログラム 2019 サポーター大募集 —東アジア+ドイツ、アセアンの諸大学の学生を迎えて—

京都大学が実施する「京都大学サマープログラム」の学生サポーターを募集します。

本プログラムは、世界のトップレベルの学生が、本学の学風および先端研究に触れ、日本の政治、経済、文化・伝統、歴史、環境・農業問題などを理解するとともに、日本人学生との交流の機会を得て、将来的に本学への長期留学を志すようになることを目的に実施しているもので、今年で8回目の開催となります。奮ってご応募ください。

**プログラム期間：** 2019年7月30日(火)～2019年8月9日(金)

(7月29日(月) 来日 8月10日(土) 離日)

**サポーター活動期間：** 2019年7月30日(火)～2019年8月9日(金)

\* 全日程に参加可能である必要はありませんが、5日以上参加できることが望ましいです。参加可能な日程を確認の上、調整します。

\* 7月18日(木)昼休み開催の説明会への参加が必須となります。

公的理由により参加できない場合は事前に相談してください。

京都サマープログラムは、以下の二つのサブプログラムに分かれています。

			主たる使用言語
A	東アジア+ドイツ	北京大学 国立台湾大学 香港中文大学 延世大学校(韓国) ハイデルベルク大学(ドイツ)	英語
B	アセアン	タイ・チュラーロンコーン大学 ベトナム国家大学ハノイ校 イン ドネシア大学 シンガポール国立大学	日本語

**活動内容：** 参加学生との交流、共同学習、京都市内の案内、滞在中の生活のサポート

**人数：** 30名前後 (A,B各15名)

**謝金：** 1人約0.5～2万円 \*参加日数・時間によって異なります。

**資格：** 京都大学在籍の学部生、大学院生。参加意欲の高い方。学部1,2回生は特に歓迎します。

学研災付帯賠償責任保険への加入が必須です。

**締切：** 2019年5月31日(金) 正午受信分まで

**申込み/問合せ：** 国際高等教育院 京都サマープログラム 2019 担当

(E-mail) [kyoto\\_summer<AT>mail2.adm.kyoto-u.ac.jp](mailto:kyoto_summer@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp)

<AT>を@に置き換えてください。

**申込み方法：** 上記メールアドレスで募集を受け付けます。メールで下記の情報を送ってください。

受領確認のメールを受信後、その指示に従ってください。応募者多数の場合は選考があります。

**メールタイトル(件名)：**「京都サマープログラム サポーター応募」

1.氏名(漢字とフリガナ) 2.所属学部/研究科 3.学年 4.学籍番号 5.連絡先電話  
6.A,B希望順位(例：第1希望 ○、第2希望 ○)

### 1.2.4 カリキュラムの特徴

本プログラムにおける主な教授言語は日本語である。ただし、教育・学習における媒介言語としての英語の重要性、そして東アジア+ドイツとアセアンの学生達が合同で受講するため、表2に挙げた学術的学習の講義うちおよそ半数の教授言語は英語でおこなった（日本語運用能力は東アジア諸大学+ドイツの募集要件には含まれていない）。その他、前節 1.2.3 で述べた京都大学学生による各種サポートにおいて、英語が用いられる場面もあった。

カリキュラム全体の特徴は、(A) 日本語学習、(B) 学術的学習、(C) 学内外文化学習、(D) 共同学習を骨組みとする点である。そして、国際高等教育院附属日本語・日本文化教育センター（旧国際交流センター）が蓄積してきた長年のプログラム実施実績と、KUASU が平成24年度から蓄積してきた実績がこの骨組みの基礎となっている。本プログラムでは、これらの基礎があったからこそ、質の高い研修内容を提供できたと思われる。

(A) の日本語学習においては、アセアン諸大学学生の多様な背景、学習歴、興味や志向を考慮し、学生18名を3つのグループに分けた。開講式後にアセアン学生が日本語テストを受け、その結果に基づいてクラスを聴講した。その翌日の授業の合間に学生全員と相談をおこなったうえで、日本語講義を担当した講師陣からの意見を集約したのち、クラス分けの最終決定をおこなった。

(D) の共同学習の際には、(A) とは異なるグループ分けをおこなった。昨年度は京都大学学生を含む5つの多国籍グループを編成したが、今年度は5つの多国籍グループとした（表3参照）。グループのメンバーである京都大学の学生は、1.2.1節で言及した言語交換・発表準備においてのサポートだけでなく、発表資料作成や口頭発表内容を分担した。最終日の各発表では発表担当ではない京都大学生サポーターや日本語講義担当の講師の方々にも出席してもらい、聴講者（ないしコメント提供者）という役割をも果たした。

表3 共同学習における発表タイトルと発表者

1. 「私達の国のお菓子」		(=各国のお菓子の紹介と比較)
Chiam Yeng Heeng	(チャム)	シンガポール国立大学・B2
Irwan Fitria Nory	(ノリー)	インドネシア大学・B2
Nguyen Thi Ngoc Trang	(チャン)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 B2
Veerawuttipol Pawaran	(ノイネー)	チュラーロンコーン大学・B1
齋藤 喬	(さいとう たかし)	京都大学総合人間学部・B3
宮田 りく	(みやた りく)	京都大学文学部・B1
2. 「食事マナー」		(=各国の麺文化の比較)
Nguyen Thi Huong Ly	(リー)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 B2
Tamwitawat Phavit	(ショウグン)	チュラーロンコーン大学・B1
Lamsam Picha	(パーイ)	チュラーロンコーン大学・B1
Yeh Hsiang-Ho	(ショウカ)	国立台湾大学日本語学科・B2
松本 愛	(まつもと あい)	京都大学文学部・B3
鈴木 崇英	(すずき たかひで)	京都大学薬学部・B1

3. 「面白い場所」		(=各国の文化的な場所の比較)
Elton Lai Jun Hong	(エルトン)	シンガポール大学・B1
Zulkarnain Rusdy Fiqih	(フィキール)	インドネシア大学・B2
Chaiyanil Chanisara	(ヌイ)	チュラーロンコーン大学・B1
早川 由起	(はやかわ ゆき)	京都大学法学部・B3
若杉 美佳	(わかすぎ みか)	京都大学文学部・B3
4. 「国旗理解は国際理解」		(=各国の国旗の比較)
Tran Quang Huy	(フイ)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学・B2
Bunsaringkaranont Natchanon	(ナッチャノン)	チュラーロンコーン大学・B1
Limsanon Thipnapha	(ペム)	チュラーロンコーン大学・B1
Tracey Chua Hui Jin	(トレイシー)	シンガポール大学・B3
花坂 光平	(はなさか こうへい)	京都大学総合人間学部・B1
黄 海洪	(こう かいこう)	京都大学人間・環境学研究所・D1
5. 「高校の比較」		(=各国の高校生活の比較)
Tran Thi Ngoc Anh	(アイン)	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学・B3
Yuliatama Dwina	(ディジェ)	インドネシア大学・B2
Ounnampirak Sirinda	(ディア)	チュラーロンコーン大学・B1
伊藤 駿介	(いとう しゅんすけ)	京都大学工学部・B2

### 1.2.5 実施時期および期間

平成 26～27 年度、本プログラムの前身にあたる研修プログラムは 2 月（冬）の第二週目から実施されていた。平成 28 年度からは実施時期を大きく変更し、開始を 8 月（夏）の第一週としてきた。8 月実施の利点は以下の通りである。

東アジア諸大学の受入プログラムと合同のカリキュラムが企画できる  
ベトナムの最も重要な休日である旧正月との時期的重なりを避けられる  
授業実施期間を避けられる（インドネシアとベトナム、および京都大学）  
熱帯気候地域から温帯気候への順応とそれに伴う体調管理を容易にする

しかし、8 月実施には台風によってプログラム内容が大幅に変更されるというリスクが伴う。30 年度のプログラムでは留学生たちの日本到着日に台風が関西国際空港上空を通過した。今後も、サマープログ実施期間に台風が通過するおそれのあることから、柔軟な対応が必要になる可能性がある。

実施期間を 2 週間としているのは、これまでの短期派遣／受入の期間に準じている（参加学生のメンタルヘルスの観点に依拠するところが大きい）。大半の参加学生が初めて来日することを考慮に入れると、修学・生活・観光を初めて体験する期間として、2 週間という長さは適度な期間であると考えられる。

### 1.3 今後の課題

参加人数に関しては特に問題なく、募集人数 20 名に対して参加人数は 18 名だった。毎度のことではあるが、アセアン各大学の担当教員の尽力に拠るところが大きい。今年度は募集人数が枠に達しなかった大学があったため、急遽二次募集をかけた。短い期間にも関わらず、各大学の担当教員には迅速に対応して頂いた。また今回は、特別枠として国立台湾大学からも 1 名の学生を受け入れた。

実施時期の問題について、今年度以上の改善を見込むのは現段階では困難である。京都大学の休業期間内でアセアン諸大学の休業期間と重なり、かつ諸々の問題を回避できる理想的な期間は、8 月初旬の 2 週間のみである。質の高い短期受入プログラムの提供を続けるためには、少なくとも京都大学の学年暦における休業期間（夏季／春季）でのプログラム実施が必要条件となっている。

留学生の空港までの送迎については今後も検討する必要がある。検討する理由としては、1). 到着日はプログラム期間には含まれないこと、2). 留学生の中に日本滞在経験者が増えており送迎の必要性が低くなっていること、などが挙げられる。とくにプログラムに参加する留学生は自由に航空券を予約することができるため、比較的安価な前日深夜や早朝着の便を選ぶ傾向にある。そのため教員のみでは対応できず、送迎の時間を調整することがきわめて難しくなっている。

今回の日本語授業のレベル別のクラス分けでは、日本語テストの採点結果によって学生をクラスに配置し、その後、必要に応じて担当教員と面談をおこない最終的にクラスを決定した。ただし、学生自身の自己評価と客観的な日本語能力の評価が一致しない場合が多々あった。日本語授業の担当教員からクラスを移動してほしいとの要望があり、教員が個別に留学生と交渉しなければならなかったことがあった。とくに初級と中級クラスの内容の難易度の差異が大きく、毎年、すでに日本語学習を開始している初学者がどちらのクラスで学習するかが問題となる。今後は日本語クラスの数を増やして対応していくことも検討する必要がある。

物価および費用補助の問題も深刻である。日本の物価は、シンガポールを除くアセアン諸国の物価に比べてかなり高い。本プログラムで学費、渡航費、宿泊費が補助されたとはいえ、海外旅行保険費・生活費・交通費・医療費、その他考えられるさまざまな負担は避けられない。これらの費用負担は、参加を足踏みさせるのに十分な金額になる。今年度も滞在費の一部と宿泊費の補助があったものの、航空券は自己負担であり初期負担が大きいという意見もある。

(文責：西島 薫)

## 2 実施体制

アセアン諸大学		
ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 日本語文化学部・講師	Nguyễn Thuý Ngọc (グエン・トウイ・ゴック)	
チュラーロンコーン大学文学部・助教授	Chomnard Setisarn ผศ.ดร.ชมนาด ศีตีสาร (チョムナード・シティサーン)	
チュラーロンコーン大学文学部・講師	Matana Jaturasangpaibroj อมัทนา จาตุรัสแสงไพโรจน์. (マッタナー・チャトゥラセンパイロート)	
シンガポール国立大学人文社会科学部・准教授	Leng Leng THANG (レン・レン・タン)	
インドネシア大学人文科学部・講師	Fachril Subhandian (ファクリル・スブハンディアン)	
国立台湾大学・職員	Lilian Zheng (リリアン・ツェン)	
京都大学		
実施責任者		
文学研究科/アジア研究教育ユニット長・教授	落合 恵美子 (OCHIAI Emiko)	
文学研究科/アジア研究教育ユニット事務局長・准教授	安里 和晃 (ASATO Wako)	
担当教職員		
国際高等教育院・教授	河合 淳子 (KAWAI Junko)	
国際高等教育院・准教授	家本 太郎 (IEMOTO Taro)	
国際高等教育院・准教授	韓 立友 (HAN Liyou)	
学際融合教育研究推進センター・特定助教	西島 薫 (NISHIJIMA Kaoru)	
国際高等教育院/国際教育交流課 短期プログラム担当	山口 聖佳 (YAMAGUCHI Kiyoka)	
アジア研究教育ユニット・派遣職員	久田 百合恵 (HISASDA Yurie)	
協力教員		
文学研究科・教授	杉本 淑彦 (SUGIMOTO Yoshihiko)	
国際高等教育院・准教授	湯川 志貴子 (YUKAWA Shikiko)	
日本語・日本文化教育センター・非常勤講師	下橋 美和 (SHIMOHASHI Miwa)	
日本語・日本文化教育センター・非常勤講師	浦木 貴和 (URAKI Norikazu)	
日本語・日本文化教育センター・非常勤講師	白方 佳果 (SHIRAKATA Yoshika)	
甲子園大学・助教		
農学研究科・教授	近藤 直 (KONDO Naoshi)	

高等研究院／霊長類研究所・特別教授	松沢 哲郎	(MATSUZAWA Tetsuro)
アジア・アフリカ地域研究研究科		
附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター・特定助教	飯田 玲子	(IIDA Reiko)
滋賀県立大学環境科学部・准教授	後藤 直成	(GOTO Naoshige)
環境科学部・助教	肥田 嘉文	(HIDA Yoshifumi)
奈良教育大学・特任准教授	北山 聡佳	(KITAYAMA Satoka)

### 3 参加学生一覧

	名 前	大 学	学部・研究科	学年
1	Nguyen Thi Ngoc Trang	ベトナム国家大学 ハノイ校外国語大学	日本語文化学部	B2
2	Tran Quang Huy		日本語文化学部	B2
3	Nguyen Thi Huong Ly		日本語文化学部	B2
4	Tran Thi Ngoc Anh		日本語文化学部	B3
5	Yuliatama Dwina	インドネシア大学	人文学部	B2
6	Zulkarnain Rusdy Fiqih		人文学部	B2
7	Irwan Fitria Nory		人文学部	B2
8	Chiam Yeng Heeng	シンガポール国立大 学	商学部	B1
9	Elton Lai Jun Hong		科学部	B1
10	Tracey Chua Hui Jin		人文社会科学部	B3
11	Chaiyanil Chanisara	チュラーロンコーン大 学	文学部	B1
12	Bunsaringkaranont Natchanon		文学部	B1
13	Veerawuttipol Pawaran		文学部	B1
14	Lamsam Picha		文学部	B1
15	Tamwitawat Phavit		文学部	B1
16	Limsanon Thipnapha		文学部	B1
17	Ounnapiarak Sirinda		文学部	B1
18	Yeh Hsiang-Ho	国立台湾大学	日本学科	B2
19	斎藤 喬 (さいとう たかし)	京都大学	総合人間学部	B3
20	若杉 美佳 (わかすぎ みか)		文学部	B3
21	伊藤 俊介 (いとう しゅんすけ)		工学部	B2

22	岩垣 志保(いわがき しほ)		医学部 B1
23	梶田 美晴(かじた みはる)		文学部 B1
24	黒田 航(くろだ わたる)		法学部 B2
25	黄 海洪(こう かいこう)		人間・環境学研究科 D1
26	坂口 綺那(さかぐち あやな)		文学部 B2
27	佐藤 颯凌(さとう ふうが)		農学部 B2
28	鈴木 崇英(すずき たかひで)		薬学部 B1
29	花坂 光平(はなさか こうへい)		工学部 B1
30	早川 由起(はやかわ ゆき)		法学部 B3
31	松本 愛(まつもと あい)		教育学部 B3
32	宮田 りく(みやた りく)		文学部 B1
33	宮村 京花(みやむら きょうか)		総合人間学部 B1
34	藤澤 奈穂(ふじさわ なほ)		文学部 B2

#### 4 研修日程

研修日程

( 水色網掛け は中国・韓国・香港・台湾・ドイツの短期交流学生と合同で実施)

7月27(土)-29(月)日 短期交流学生入国、参加学生顔合わせ			
時間	カリキュラム / イベント	教職員	場所
27日 20:00	到着(CI116便)		福岡国際空港(1名)
28日 15:35	到着(TR867便)		関西国際空港(1名)
16:10	到着(SQ620便)		関西国際空港(1名)
29日 6:30	到着(CX566便)	【学際融合教育研究推進センター】 西島薫特定助教	関西国際空港(1名)
7:30	到着(TG622便)		関西国際空港(2名)
7:30	到着(TG622便)		関西国際空港(3名)
7:50	到着(VJ938便)		関西国際空港(4名)
9:00	到着連絡、京都市内へ移動		空港-京都市内
10:30	チェックイン		旅館 さわや本店
11:15	到着(XJ612便)		関西国際空港(4人)
12:50	到着(CI152便)		関西国際空港(1名)
13:30	到着連絡、京都市内へ移動		空港-京都市
15:30	チェックイン		旅館 さわや本店

\*待ち合わせ場所:到着ロビー1Fのスターバックスコーヒー(11ページ参照)

飛行機到着時にゲートまで1人が迎えに行きます。もう1人はスターバックスで待機。

(Meeting Point: Starbucks Coffee on arrival lobby. Please refer to page 11)

7月30日(火) オリエンテーション、プレズメントテスト、琵琶湖疎水(蹴上)散策			
時間	カリキュラム / イベント	教職員	場所
9:00-10:00	オープニング、オリエンテーション	【アジア研究教育ユニット】 落合恵美子教授、安里准教授、西島薫特定助教、久田百合恵職員 【国際高等教育院】 河合淳子教授、家本太郎准教授	京都大学 (吉田南キャンパス) 吉田国際交流会館 講義室5
10:00-11:00	クラス分けテスト	河合淳子教授、韓准教授 西島薫特定助教	
11:15-12:00	学内ツアー・ 京大サロン集合(12時)		京都大学
12:00-13:30	昼食		京都大学周辺
13:30-17:00	琵琶湖疎水記念館(蹴上)散策	西島薫特定助教	琵琶湖疎水記念館・蹴上



17:00-18:00	クラス分け発表	河合淳子教授、韓立友准教授、 西島薫特定助教	京都大学 吉田国大 交流会館講義室 5
18:00	放課 後		
16:00	解散		
7月31日(水) 日本語講義、クラス分け面談、京都大学紹介			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	日本語 中級 I	下橋美和(しもはし みわ)講師	吉田南 4 号館 22
	日本語 中級 II	浦木貴和(うらき のりかず)講師	吉田南 4 号館 13
	日本語 上級	白方佳果(しらかた よしか)講師	吉田南 4 号館 14
10:15-11:00	クラス分け面談	河合淳子教授、韓立友准教授、 西島薫特定助教	吉田南 4 号館 25
11:00-12:30	日本語 中級 I	下橋美和講師	吉田南 4 号館 22
	日本語 中級 II	浦木貴和講師	吉田南 4 号館 13
	日本語 上級	白方佳果講師	吉田南 4 号館 14
14:00-15:30	講義 I : (使用言語: 英語) Sensing Technology Based Food Production and Food Loss Reduction for 9 Billion Global Population Time	【農学研究科】 近藤直(こんどう なおし)教授	KUINEP 講義室
16:00-17:30	講 義 II : KU Introduction (使用言語: 日本語) (使用言語: 英語) (使用言語: 中国語)	西島薫特定助教 河合淳子教授 韓立友准教授	文学部地下大会議室 KUINEP 講義室 多目的ホール
18:00-20:00	放課後		
8月1日(木) 日本語講義、人文学講義			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	日本語 中級 I	下橋美和講師	吉田南総合館西 22
	日本語 中級 II	浦木貴和講師	吉田南総合館西 23
	日本語 上級	白方佳果講師	吉田南総合館西 12
10:30-12:00	講義 III (使用言語: 英語) The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature	【日本語・日本文化教育センター】 湯川志貴子(ゆかわ しきこ)准教授	KUINEP 講義室
14:00-15:30	日本語 中級 I	下橋美和講師	国際交流会館 講義 室 5
	日本語 中級 II	浦木貴和講師	国際交流会館 講義 室 6

	日本語 上級	白方佳果講師	国際交流会館 講義室 3
16:00-17:30	日本語 中級 I	下橋美和講師	国際交流会館 講義室 5
	日本語 中級 II	浦木貴和講師	国際交流会館 講義室 6
	日本語 上級	白方佳果講師	国際交流会館 講義室 3
8月2日(金) 日本語講義、人文学講義、学外研修			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	日本文化講義 学校教育にみる日本文化の諸相	【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子教授	KUINEP 講義室
10:30-12:00	日本文化講義 現代日本文化のなかの源氏物語	【文学研究科】 杉本淑彦(すぎもと よしひこ)教授	清風荘
14:00-17:00	企業見学 (株式会社ナベル)	西島薫特定助教	(株)ナベル(京都府京都市南区 西九条森本町 86 番地)
8月3日(土) 日本語講義、日本文化講義			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
8:45-10:15	日本語 中級 I	下橋美和講師	国際交流会館 講義室 5
	日本語 中級 II	浦木貴和講師	国際交流会館 講義室 6
	日本語 上級	白方佳果講師	国際交流会館 講義室 3
10:30-12:00	日本語 中級 I	下橋美和講師	国際交流会館 講義室 5
	日本語 中級 II	浦木貴和講師	国際交流会館 講義室 6
	日本語 上級	白方佳果講師	国際交流会館 講義室 3
14:00-15:30	日本文化講義(書道)	【奈良教育大学・准教授】 北山聡佳(きたやま さとか)准教授	国際交流会館 講義室 3
16:00-17:30	日本文化講義(書道)	北山聡佳准教授	国際交流会館 講義室 3
8月4日(日) 学生交流			
時 間	カリキュラム / イベント	教 職 員	場 所
終日	学生交流		

8月5日(月) 日-アセアン学生間交流			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	言語交流・発表準備	西島薫特定助教	国際交流会館 講義室2
10:30-12:00	言語交流・発表準備	西島薫特定助教	国際交流会館 講義室2
8月6日(火) 琵琶湖学外研修			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:30	集合(8:15)	西島薫特定助教	旅館 さわや本店
	バス移動		
9:30-11:00	滋賀県立琵琶湖博物館見学	西島薫特定助教	滋賀県立琵琶湖博物館
11:15-12:15	昼食	西島薫特定助教	くさつ道の駅
13:30-16:30	滋賀県立大学見学	【滋賀県立大学 環境科学部】 後藤直成(ごとうなおしげ)准教授	滋賀県立大学
17:30	バス移動	西島薫特定助教	旅館 さわや本店
	解散		
8月7日(水) 日本語講義、科学講義			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
8:45-10:15	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	国際交流会館 講義室5
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	国際交流会館 講義室6
	日本語 上級	白方佳果講師	国際交流会館 講義室4
10:30-12:00	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	国際交流会館 講義室5
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	国際交流会館 講義室6
	日本語 上級	白方佳果講師	国際交流会館 講義室4
14:00-15:30	Mutual support: Evolution of human mind viewed from the study of chimpanzees	【高等研究院】 松沢哲郎(まつざわ てつろう)特別教授	国際交流会館 講義室5+6
16:00-17:30	日本語 中級Ⅰ	下橋美和講師	国際交流会館 講義室5
	日本語 中級Ⅱ	浦木貴和講師	国際交流会館 講義室6
	日本語 上級	白方佳果講師	国際交流会館 講義室4

8月8日(木)人文学講義			
時間	カリキュラム / イベント	教職員	場所
8:45-10:15	High Economic Growth and Minamata Disease: The Fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning	【アジア・アフリカ地域研究研究科】 飯田玲子(いいた れいこ)特定助教	国際交流会館 講義室 5+6
10:30-12:00	言語交流・発表準備	西島薫特定助教	国際交流会館 講義室 4
14:00-15:30	言語交流・発表準備	西島薫特定助教	国際交流会館 講義室 4
8月9日(金) 言語交流・発表準備、共同発表、修了式、歓送会			
時間	カリキュラム/イベント	教職員	場所
9:00-12:00	言語交流・発表準備	西島薫特定助教	国際交流会館 講義室 4
13:00-16:00	共同発表、 質疑応答、講評	【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授 【学際融合教育研究推進センター】 西島薫特定助教 【日本語講師】 下橋美和講師、浦木貴和講師、 白方佳果講師	国際交流会館 講義室 4
16:00-17:00	修了式 写真撮影	【アジア研究教育ユニット】 落合恵美子教授、久田百合恵職員 【学際融合教育研究推進センター】 西島薫特定助教 【日本語・日本文化教育センター】 河合淳子教授、家本太郎准教授 【日本語講師】 下橋美和講師、浦木貴和講師、 白方佳果講師	国際交流会館 講義室 4
18:00-	歓送会		カンフォーラ(予定)

4.1 日本語 I

科目名 Title	にほんごちゅうきゅう 1 日本語中級 I		講師 Instructor	しもはし みわ 下橋 美和 (Miwa Shimohashi)
講義室 Classroom	しおり参照			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
かい 回	がつび ようび 月日 (曜日)	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	7月31日 (水)	1限	きそ ことわ 誘う、断る	
2		2限	しょたいめん ひと ほな 初対面の人と話す	+京大生3名以上
3	8月1日 (木)	1限	いらい 依頼	
4		3限	きよか え 許可を得る	
5		4限	話し合う、1分/3分スピーチ (1)	+京大生3名以上
6	8月3日 (土)	1限	まとまったぶんしょう よ まとまった文章を読む (1)	
7		2限	話し合う、1分/3分スピーチ (2)	+京大生3名程度
8	8月7日 (水)	1限	まとまった文章を読む (2)	
9		2限	話し合う、1分/3分スピーチ (3)	+京大生3名程度
10		4限	メールを書く	+京大生3名程度
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を配布する。 参考テキスト：『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』（スリーエーネットワーク）				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				





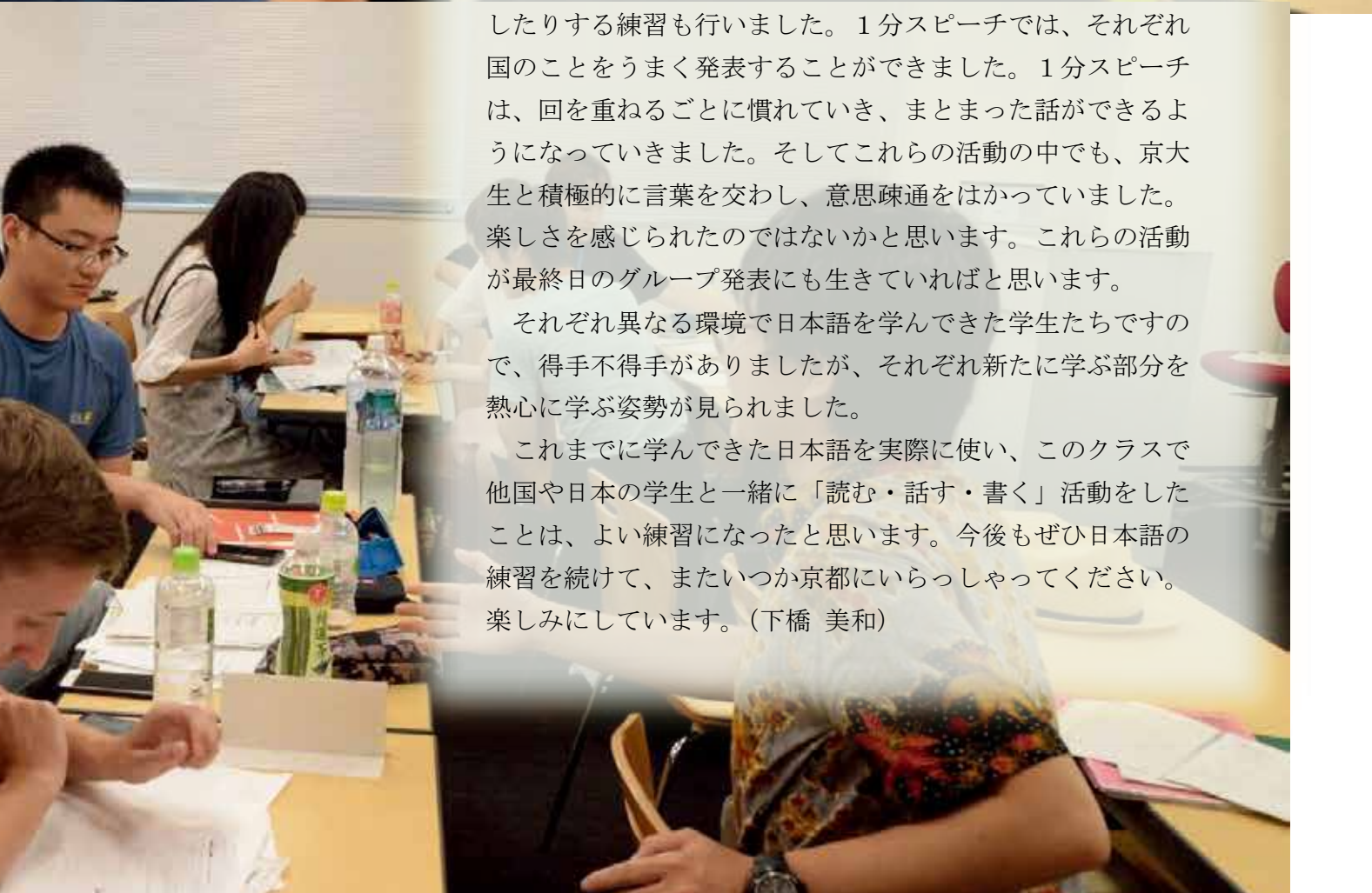
このクラスでは、中級レベルの会話教材を使った会話練習や、読解文を読んでそれをもとに1分スピーチをする活動、またメールを書く活動をしました。

会話練習では、知っている語彙や文法でも、それを一連の流れの中で使って会話することは難しかったかもしれませんが、何度か続けるうちに上達が見られました。会話練習で京大生とやりとりした経験が、授業後の生のコミュニケーションにも役立っていたのではないのでしょうか。

また、メールを書いたり、読解文をもとに1分スピーチをしたりする練習も行いました。1分スピーチでは、それぞれ国のことをうまく発表することができました。1分スピーチは、回を重ねるごとに慣れていき、まとまった話ができるようになっていきました。そしてこれらの活動の中でも、京大生と積極的に言葉を交わし、意思疎通をはかっていました。楽しさを感じられたのではないかと思います。これらの活動が最終日のグループ発表にも生きていけばと思います。

それぞれ異なる環境で日本語を学んできた学生たちですので、得手不得手がありました。それぞれ新たに学ぶ部分を熱心に学ぶ姿勢が見られました。

これまでに学んできた日本語を実際に使い、このクラスで他国や日本の学生と一緒に「読む・話す・書く」活動をしたことは、よい練習になったと思います。今後もぜひ日本語の練習を続けて、またいつか京都にいらっしやってください。楽しみにしています。(下橋 美和)



#### 4.2 日本語Ⅱ

科目名 Title	日本語 レベル3		講師 Instructor	浦木 貴和 (Norikazu Uraki)
講義室 Classroom	しおり参照			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
回	がっぴ 曜日	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	7月31日	1限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語①	
2	(水)	2限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語②	
3	8月1日 (木)	1限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語③	
4		3限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語④	
5		4限	マンガ『サザエさん』で学ぶ日本語⑤	
6	8月3日	1限	サイレント映画の会話を作る①	
7	(土)	2限	サイレント映画の会話を作る①	
8	8月7日 (水)	1限	サイレント映画の会話を作る②	
9		2限	サイレント映画の会話を作る③	
10		4限	サイレント映画の会話を作る④	
〔教科書 Textbook〕 映像資料を使用する予定				
〔その他の注意 Miscellaneous〕				



当プログラムで日本語Ⅱのクラスを担当しました。今回のクラスは今までと異なり、東南アジアだけでなく、中国や台湾、香港、ドイツからの学生も受講してくれました。おかげで非常に国際色豊かで、授業中でも活発な議論ができる良いクラスになったと思います。

私のクラスでは、アニメ「サザエさん」を題材に、聴き取りと文法、語彙を中心に授業を行いました。またスケジュールの後半では日本のサイレント映画『腰辨頑張れ』（1931年）を鑑賞しながらセリフを考え、シナリオを作成してもらいました。

「サザエさん」の聴き取りでは、最初は聴き取りにかなり苦労していたようですが、諦めずについてきてくれました。さらに「サザエさん」は、日本の様々な習慣や価値観が描かれていますが、日本を単純に一般化するのではなく、地域や年代などによって、価値観や習慣が異なることも極力意識してもらおうよう心がけました。

また『腰辨頑張れ』では、学生たちはシナリオ作りにとどまらず、当時の日本の風俗や家庭の様子などについて興味深い観察をしてくれました。

外国語の学習は単に文法や語彙の知識を習得するだけでなく、自国の文化や考え方を相対化する手段にもなり得ます。その意味においても、各国の学生及び日本人学生たちとのグループ発表も良い学びの機会になったと思います。今回の経験を通じて、学生たちには寛容で粘り強く問題に対処できる、真の国際人になってもらいたいと思います。(浦木貴和)





4.3 日本語Ⅲ

科目名 Title	にほんご 日本語 レベル 4		講師 Instructor	しらかた よしか 白方 佳果 (Yoshika Shirakata)
講義室 Classroom	しおり参照 しおり参照			
[授業の進め方 Content of the class]				
回	がっぴ ようび 月日(曜日)	じげん 時限	じゅぎょうないよう 授業内容	びこう 備考
1	7月31日(水)	1限	きょうと かん 京都に関するエッセイを読む(1)	
2		2限	きょうと かん 京都に関するエッセイを読む(2)	
3	8月1日(木)	1限	きょうと ぶたい 京都を舞台にした文学作品を読む(1)	
4		3限	きょうと ぶたい 京都を舞台にした文学作品を読む(2)	
5		4限	きょうと ぶたい 京都を舞台にした文学作品を読む(3)	
6	8月3日(土)	1限	きょうと かん 京都に関する新聞記事を読む(1)	
7		2限	きょうと かん 京都に関する新聞記事を読む(2)	
8	8月7日(水)	1限	きょうだいせい きょうだい 京大生と京大の入試問題に挑戦する(1)	+京大生 3名以上
9		2限	きょうだいせい きょうだい 京大生と京大の入試問題に挑戦する(2)	+京大生 3名以上
10		4限	きょうだいせい きょうだい 京大生と京大の入試問題に挑戦する(3)	+京大生 3名以上
[教科書 Textbook] ひつよう しりよう はいふ 必要な資料を配布する				
[その他の注意 Miscellaneous]				

このクラスでは、様々なジャンルの文章の読解を通して日本語の読解能力の向上を目指すとともに、京都や日本の文化・社会についての理解を深めることを目標としました。1日目は京都に関するエッセー、2日目は京都を舞台とする小説、3日目は京都に関する新聞記事を読解しました。4日目には京都大学の入試に出題された随筆を読み、理解した内容を日本語で表現する課題に取り組みました。

今回の授業で扱ったのは、いずれもやや難易度の高い文章でした。とくに4日目の随筆は難しかったと思いますが、京大生の頼もしいサポートのもと、和気藹々とした雰囲気の中で正確に内容を理解し、それを日本語で表現することができました。

例年より参加者が多く、賑やかなクラスになりました。さまざまな国の学生が集うクラスで活発にやりとりをしたことで、京都や日本、そしてそれぞれの参加者の出身地の文化や社会について、いろいろな発見があったのではないのでしょうか。

参加者の皆さん、お疲れさました。このプログラムで得た経験や知識をもとに、これからもさらに日本語、そして日本やアジアの文化・社会に対する関心や理解を深めていってほしいなと思っています。

(白方佳果)



#### 4.4 書道

科目名 Title	書道	講師 Instructor	北山 聡佳 (Satoka Kitayama)	
講義室 Classroom	国際交流会館 講義室 3			
〔授業の進め方 Content of the class〕				
回	月日 (曜日)	時限	授業内容	備考
1	8月3日 (土)	3限	「書道について」 文字や書道芸術の歴史について学ぶ	終わり次第、作品制作に取りかかる
2		4限	「作品制作」 書道の作品を実際に制作する	用具用材についても簡単に学ぶ
〔教科書 Textbook〕 必要な資料を適宜提示する				
〔その他の注意 Miscellaneous〕 墨などで汚れてもよい服装 (エプロンなど) で参加する ウエットティッシュまたは濡れタオル (おしぼり) があることが望ましい				

3限 = 14:00 ~ 15:30  
4限 = 16:00 ~ 17:30





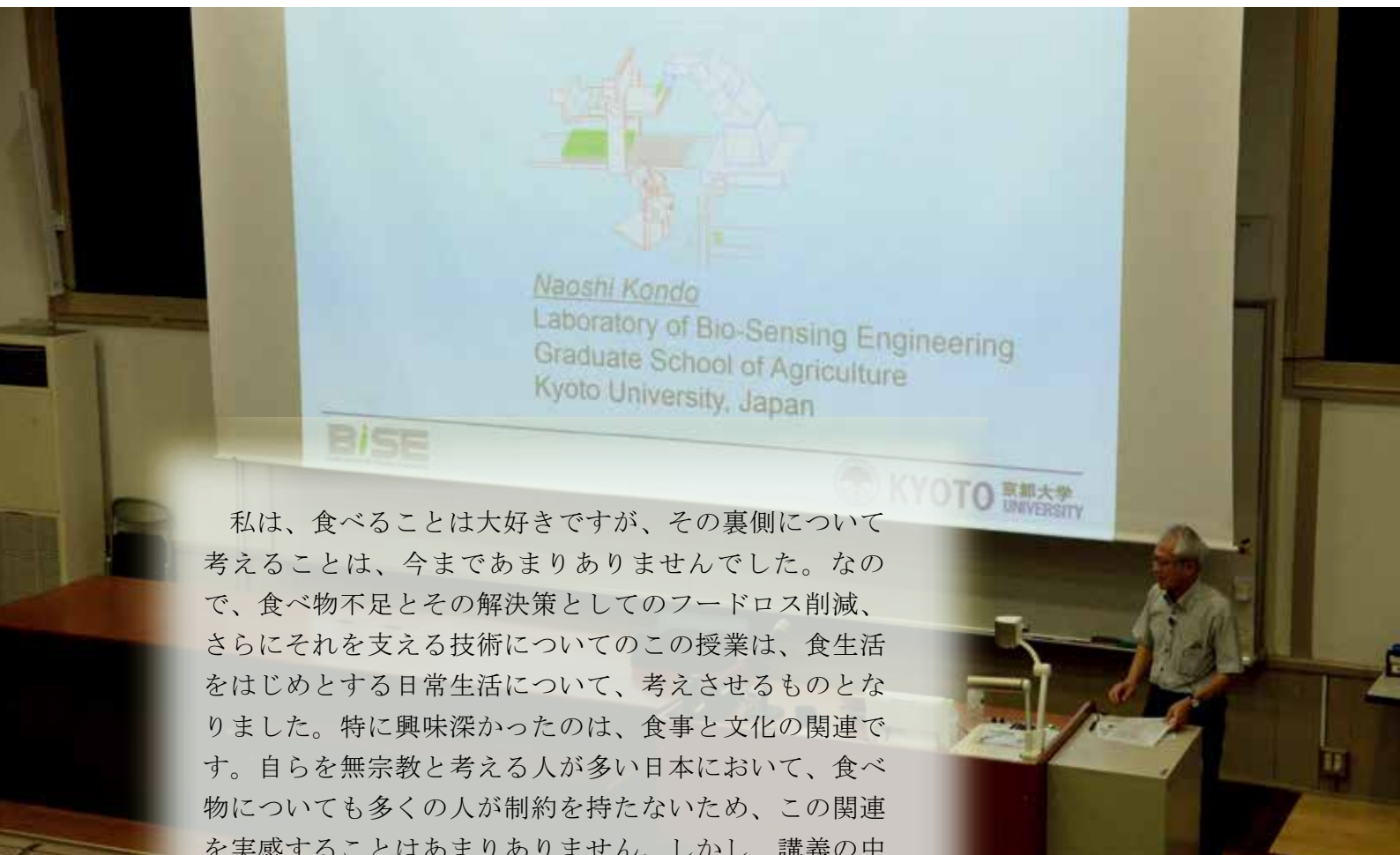
本年も各国からの留学生の皆さんとともに書道について学びました。はじめに全員が名札を作成しましたが、片仮名で立派に書いてくれました。そして講義の導入では、大陸から文字が伝わり、そこからどのように日本独自の仮名が生まれ、今に至ったのかについてお話ししました。実践として、平安時代に使われていた仮名を、紙やホワイトボードに書いてもらいました。違う書き方を紹介すると、感心してくれる様子を見て、仮名が自然と受け入れられたようで嬉しく思いました。現代の日本人でも、普段、仮名を読み書きすることはありません。しかし、それぞれの感性で表現することで、昔の日本人の感覚に触れてもらえたように思います。

後半には、実際に書道の用具用材を使って、仮名の書の実技をしました。文字の形が簡素なものから複雑なものまで様々ですが、自由に造形を工夫して組み合わせている姿が見られました。皆さんの一生懸命な練習のおかげで、とても芸術的な仮名の色紙作品が完成しました。留学生の皆さんには、自国にて、日本の伝統文化としての書道や文字を伝えてほしいと思います。最後になりましたが、この度のプログラムにおいては西島先生をはじめ諸先生方、並びに京都大学学生の皆様にご尽力いただきました。心より感謝申し上げます。（北山聡佳）

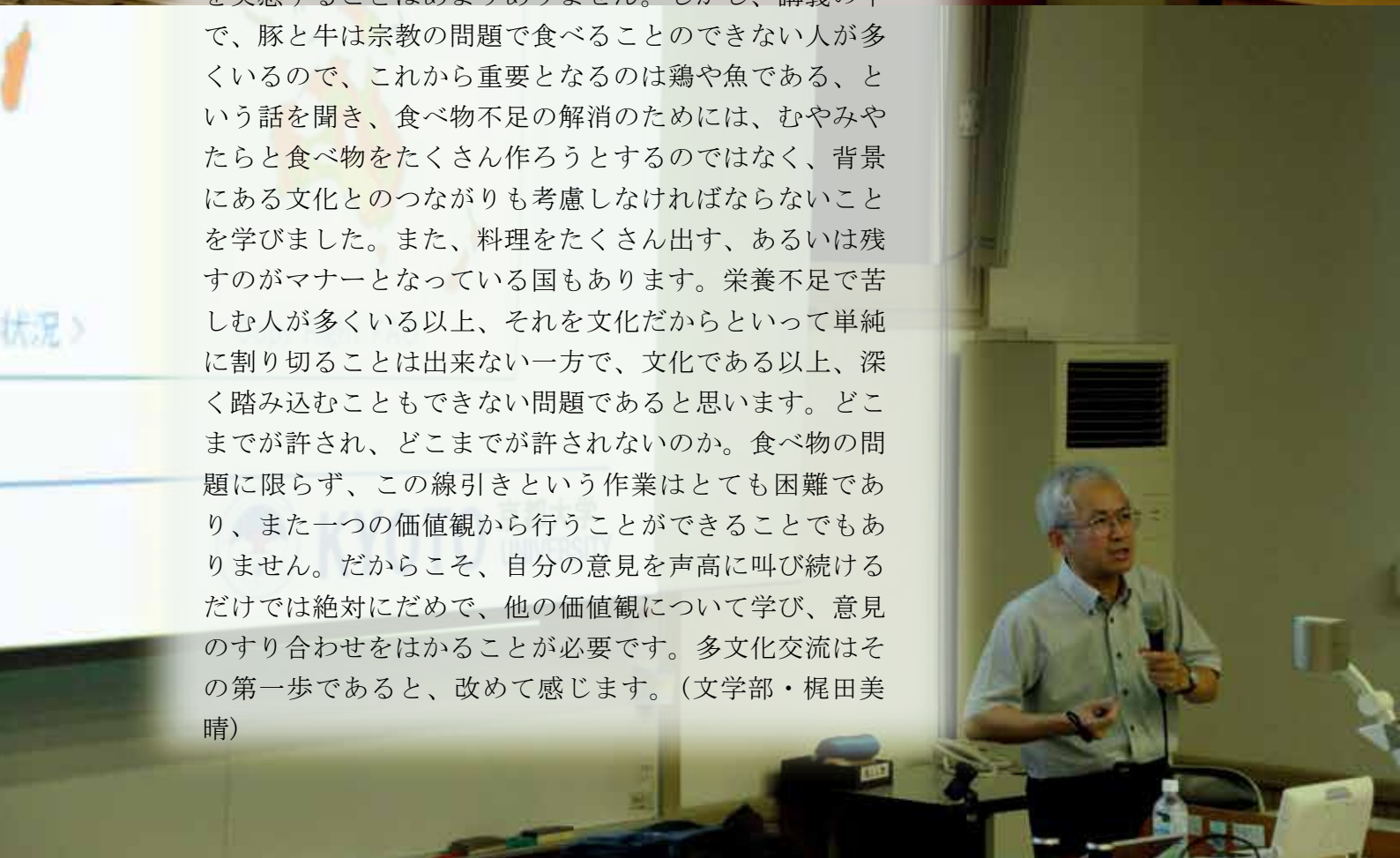




#### 4.5 科学講義 “Asian Advanced Agricultural Technologies (AAA Tech) for 9 Billion People’s Food Production and Environmental Conservation”



私は、食べることは大好きですが、その裏側について考えることは、今まであまりありませんでした。なので、食べ物不足とその解決策としてのフードロス削減、さらにそれを支える技術についてのこの授業は、食生活をはじめとする日常生活について、考えさせるものとなりました。特に興味深かったのは、食事と文化の関連です。自らを無宗教と考える人が多い日本において、食べ物についても多くの人が制約を持たないため、この関連を実感することはあまりありません。しかし、講義の中で、豚と牛は宗教の問題で食べることをできない人が多くいるので、これから重要となるのは鶏や魚である、という話を聞き、食べ物不足の解消のためには、むやみやたらと食べ物をたくさん作ろうとするのではなく、背景にある文化とのつながりも考慮しなければならないことを学びました。また、料理をたくさん出す、あるいは残すのがマナーとなっている国もあります。栄養不足で苦しむ人が多くいる以上、それを文化だからといって単純に割り切ることは出来ない一方で、文化である以上、深く踏み込むこともできない問題であると思います。どこまでが許され、どこまでが許されないのか。食べ物の問題に限らず、この線引きという作業はとても困難であり、また一つの価値観から行うことができることでもありません。だからこそ、自分の意見を声高に叫び続けるだけでは絶対にだめで、他の価値観について学び、意見のすり合わせをはかることが必要です。多文化交流はその第一歩であると、改めて感じます。(文学部・梶田美晴)



#### 4.6 人文学講義 “The Aesthetics and Sensitivities of the Japanese as seen through Classical Japanese Literature”

湯川先生は日本の美や感受性についての具体的なお話をしてくださいました。美とは見る人が美しいと思ったイメージの事です。日本には四季があります。四季は日本の生活や農業、文化等に影響を与えてきました。その例として、てぬぐいのお話がありました。てぬぐいとは日本の伝統的な体や顔を拭くためのタオルのようなもので、布を色で染めて作ったものです。実際に様々な草花を描いたてぬぐいを見て観察しました。そのてぬぐいには四季が表現されていて、日本の四季を表現するのにとてもぴったりだと感じました。また、俳句についてのお話もありました。俳句とは瞬間のイメージを写真のようにとらえたものです。俳句には季語を入れるという決まりがあり、最も重要な要素です。例えば菜の花の春の季語である菜の花を使った俳句に、「菜の花や月は東に日は西に」というものがあります。また、日本の感受性を代表する言葉として「花鳥風月」という言葉が紹介されました。「花鳥風月」とは天地自然の美しい景色のことで、日本人に昔から親しまれてきた言葉です。この言葉からも日本人が昔から自然を大切にしてきたことが分かります。山は日本人にとって重要です。頂上が天に近く、天に繋がっていると思われたからです。俳諧、随筆、和歌についてもお話がありました。俳諧は滑稽味を帯びた和歌のことで400年前にできました。例えば松尾芭蕉の名月や北国日和定めなき、というものがあります。随筆とは見聞、経験感想等を気の向くままに記した文章の事です。和歌とは漢詩に対する日本の詩歌で、五七五を基調としています。

先生の授業を受け、日本における美とはなにか、日本を客観的にみた立場で考えられたような気がします。普段あまり考えもしないテーマだったので、日本人ですが、留学生と一緒に日本について勉強できました。(藤澤奈穂)





#### 4.7 科学講義 “Human Mind Viewed from the Study of Chimpanzees”

先生の明快で、かつ研究への愛に満ちた説明により、終始講義を楽しむことができました。私は、このプログラムに参加する以前に、人間と霊長類を比較し人間の在り方について考える自然人類学や、生物学のフロンティアを受講していたので、そちらの講義内容とも関連させて聞くことができ、とても興味深かったです。一緒に授業をうけていた留学生がたくさん質問をしていて、彼らの好奇心、知識欲に圧倒されると同時に、私もいろいろなことに積極的に取り組み、興味の幅を広げていきたいと感じました。今回の講義で中心となったのは、チンパンジーの母子の関係と成長についてでした。高校生の頃、チンパンジーの認知実験について初めて知った私は、どうして人間がする実験と同じようなことを霊長類でするのでだろうと疑問に思っていました。しかし、霊長類の研究について、このように人間社会において注目する問題と同じようなものが多いのは、人間に近い存在の在り方を学ぶことで、より人間の理解に活かしていこうとしているからだ、と実感しました。それと同時に、自然科学と人文科学の学問は、完全に隔てられたものではないということを理解し、だからこそ分野をまたいで様々なことを学んでいかなければならないと思いました。この講義を聞いたのち、京都大学博物館を訪れたので、アイが行ったテストに挑戦してみました。数字を覚え、数が小さい順に数があった場所をタッチするという一見単純なテストで、まあまあできるはず、と余裕な姿勢で臨んだのですが、実際は全くできず、チンパンジーの能力の高さを身をもって実感しました。(梶田美晴)

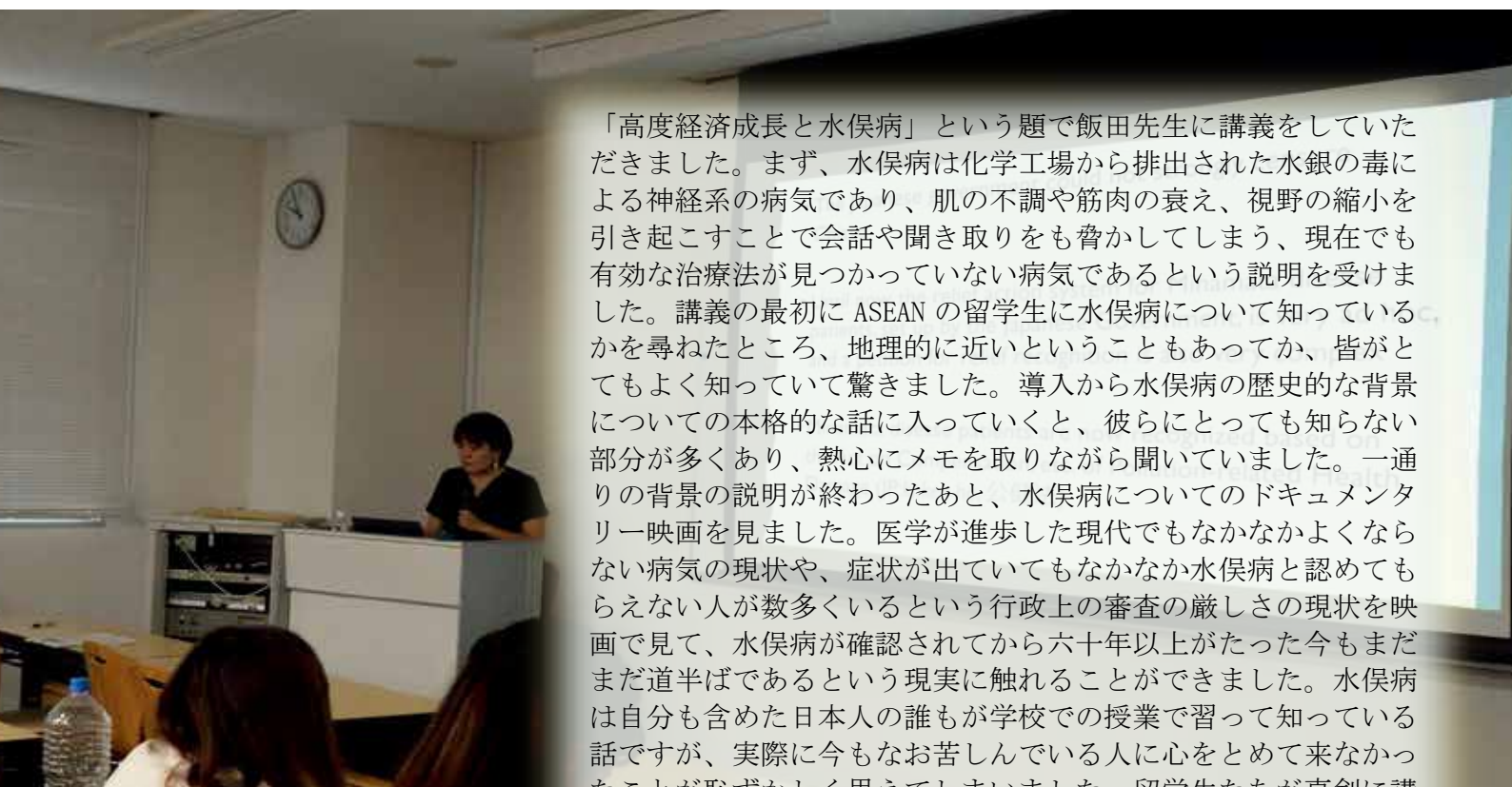


AI project started in November 10<sup>th</sup> 19...  
when she arrived PRI





4.8 科学講義 “High Economic Growth and Minamata Disease: The fight for certificates officially acknowledging victims of methylmercury poisoning”



「高度経済成長と水俣病」という題で飯田先生に講義をしていただきました。まず、水俣病は化学工場から排出された水銀の毒による神経系の病気であり、肌の不調や筋肉の衰え、視野の縮小を引き起こすことで会話や聞き取りをも脅かしてしまう、現在でも有効な治療法が見つからない病気であるという説明を受けました。講義の最初に ASEAN の留学生に水俣病について知っているかを尋ねたところ、地理的に近いということもあってか、皆がとてもよく知っていて驚きました。導入から水俣病の歴史的な背景についての本格的な話に入っていくと、彼らにとっても知らない部分が多くあり、熱心にメモを取りながら聞いていました。一通りの背景の説明が終わったあと、水俣病についてのドキュメンタリー映画を見ました。医学が進歩した現代でもなかなかよくなる病気の現状や、症状が出ていてもなかなか水俣病と認めてもらえない人が数多くいるという行政上の審査の厳しさの現状を映画で見て、水俣病が確認されてから六十年以上がたった今もまだまだ道半ばであるという現実に触れることができました。水俣病は自分も含めた日本人の誰もが学校での授業で習って知っている話ですが、実際に今もなお苦しんでいる人に心をとめて来なかったことが恥ずかしく思えてしまいました。留学生たちが真剣に講義に臨んでいる姿を見て、もっと真剣に向き合っていかなければならないと痛感した講義となりました。(鈴木崇英)





#### 4-9 人文学講義「学校教育に見る日本文化の諸相」



この講義では教授によって教育の場に見られる日本的な考え方や価値観が解説された。その過程で、日本およびアメリカの小学校生活と、日本の高校野球のドキュメンタリーを視聴した。小学校生活のビデオでは、アメリカの教育との比較によって日本の教育の特徴が浮かび上がる。日本では能力に応じて学習することよりも、クラスの皆が共に協力しながら同じことを学ぶという側面が強い。また、その協調性を重視する姿勢は教科教育だけでなく、掃除や給食の当番制にも見ることができる。私自身も小学生時代に日本の教育で体験したことがこのビデオに簡潔に現われていて、自分の中でそうした教育の利点や欠点を考える機会となった。高校野球に密着したビデオでは、全国にある幾多の高校の中で甲子園出場を勝ち取ることの厳しさだけでなく、自分の高校が出場できるとしてもベンチに入ることがいかに難しいかが伝えられる。とりわけ受講者の留学生や私に強い印象を与えたのは、実力では下級生にも劣り、試合に一度も出場したことのない三年生が、これまでの熱心な練習と他の部員への献身的な応援が認められて、甲子園のベンチ入りを果たした場面である。高校野球というクラブ活動においても、一人が集団のために尽くすことが美德とされる文化があることを改めて強く実感することになった。(黒田 航)



#### 4.10 人文学講義「現代日本文化のなかの源氏物語」



京都と源氏物語の関係について、特に宇治十帖について詳しく講義していただきました。一見読むのが難しそうな源氏物語ですが、当時の社会背景だけでなく、現代の社会背景と関連させながら、どのように源氏物語のストーリーや要素が解釈されるのかを、ロラン・バルトが提示した概念である「作者の死」を手掛かりにしながら理解を深めました。また、新元号である「令和」の由来についても解説していただきました。最後に、清風荘の中を見学しました。清風荘の窓ガラスは、清風荘が完成した約 100 年以上も前の技術で作られた非常に貴重なものが現在でもつかわれており、それを実際に見ることができました。窓ガラスの光の反射具合などが現在のガラスとは大きく異なっていました。留学生にとってだけでなく京都大学の学生にとっても、日本の伝統的な家屋を実際に訪問し、その中で講義を受けるという貴重な体験になりました。(齋藤 喬)





4.11 学外研修







## 5 参加学生報告

### 楽しい旅行

ハノイ国家大学外国語大日本語文化学部 2 年生

グエン・ティ・ゴック・チャン

2 週間はとても早くてあっという間に経ちました。色々なことを体験できて、とても勉強になりました。これは私の初めての日本への渡航だったので、行く前からすごくワクワクしました。みんなの言う通り、日本は素晴らしい国でした。京大の先生と日本の学生たちのサポーターのおかげで、日本で幸せな時間を過ごすことができました。2 週間ずっと、旅館さわや本店で泊まって、毎晩みんなで居間に集まって、喋ることもできました。とても快適な場所です。それに、旅館は大学の近くなので、とても便利でした。他のアジアからの友達と一緒に住んでいたの、たくさんの友達を作ることができました。みんなとても優しく可愛いです。シンガポール、インドネシア、タイ、台湾、日本、それぞれの国と比べて、ベトナムはたくさん違うところがあることが分かりました。困ったときはいつも助けてくれて、本当に感謝しています。

日本語クラスの浦木先生の授業は、面白かったです。サザエさんというアニメとサイレント映画を勉強して、日本の文化がよりいっそう分かるようになりました。そして、ナベルという会社に見学にも行って、日本の先端技術もみることで、すごかったです。船にも初めて乗ることができて、いい経験になりました。あとは、たくさん美味しい日本の食べ物を食べました。私の一番好きな食べ物は食堂の定食です。美味しくて安くて量も多いからです。

日本にいる間に、できるだけ、日本の色々な観光地に行ってみたいと思っていました。日曜日の休みの日に京都の有名なところに行きました。サポーターたちは本当に熱心で親切です。金閣寺、龍安寺、南禅寺、嵐山、伏見稲荷大社、どこも美しく、京都の古い雰囲気も表現していました。もう一度日本へ行けたら、絶対に京都にまた行きたいと思います。

このサマープログラムに参加して、自分の長所と短所が分かってきました。楽しくて帰りたいくない気持ちもあります。もう皆と一緒に遊べなくなると悲しくなります。大阪で遊んだときはぎりぎり 12 時夜に旅館着いてホッとしました。とても楽しかったです。他の国の友達は私の言葉を頑張って理解してくれて、本当に感謝します。また会ったら、宜しく願います。

### 京都サマースクール 2019

ハノイ国家大学外国語大日本語文化学部 2 年生

チャン・クアン・ファイ

ハノイ国家大学外国語大学 2 年生のファイと申します。「Kyoto University Summer Program 2019」に参加させていただきましてありがとうございます。私が京都大学の「Kyoto University Summer Program 2019」に参加した動機は、日本のことに興味を持っていたからです。私の専攻は日本語文化学部で、もともとこのプログラムのような内容に興味があったので、募集案内を見てすぐに参加を決めました。実際に参加してみて、いろいろな国の人の意

見を聞け、こんな考え方もできるのかと、自分に見えていた世界がごく限られた世界であったことに気がつきました。

参加の結果が出たときは、大変嬉しかったです。「初めて日本へ行く、初めて外国へ行く」と思うと、ワクワクしていました。そして、「日本はどういったところか」「ビザをどうやって取るか」こういう疑問が頭に浮かびました。嬉しかったがちょっと迷いもしました。ようやく、来日の日が来て、私は関西空港（KIX）へ行きました。西島先生は私たちを迎えに行きました。旅館へ行く途中で初めての日本をバスの窓から眺めてショックを受けました。初めての日本の印象は道が混んでおらず、運転手も歩行者も信号のルールを守っており、日本人も優しく親切だったからです。

1 日目、私たちは「さわや本店」へ行きました。そこに 10 日間泊まりました。初めて日本に来るにあたって、旅館に泊まれることはとてもうれしかったです。西島先生とサポーターさんは優しいです。サポーターさんは昼に食堂へ私たちをつれて行ってくれました。京大の食堂は 2 時でも人が多くて、学生がそこでしゃべりながら勉強していました。

2 日目、サポーターさんに平安神宮へつれていってもらいました。平安神宮は広くて、入り口には大きい鳥居があります。そして、その日の朝に受けたテストの結果がでました。私は上級のクラスに入ることになりました。白方先生はそのクラスを担当していました。先生とサポーターに支えられていて嬉しかったです。京都についてエッセイ・新聞・小説を勉強するのは面白かったです。最後の授業は京大入試に挑戦しました。難しかったです。いろいろなことが勉強になりました。

5 日目、清風荘へ行きました。景色がとてもきれいでした。日本の物語についての講義のおかげで日本の文化のことがもっと分かるようになりました。本当にためになる授業でした。午後は企業見学でした。株式会社ナベルという会社へ行きました。日本の技術を実際に見たので、今後も日本の企業を調べたいと思っています。

7 日目、私たちはサポーターさんに京都の案内をしてもらいました。京都は景色もきれいだし、住んでいる人も親切だし、それに環境を守ることも大切にしています。サポーターさんたちは優しくて素晴らしい人です。行ったところは嵐山・伏見稲荷です。和菓子を作る体験を試みて私たちは楽しかったです。

10 日目、午前滋賀県立琵琶湖博物館を見学しました。琵琶湖は日本で一番大きい湖だと知っていますが、琵琶湖へ行ったことがありませんでした。琵琶湖博物館で琵琶湖に住んでいる動物をたくさん見ることができました。おもしろい体験になりました。午後は滋賀県立大学を見学しました。琵琶湖のことを後藤先生から習いました。環境の問題がもっとわかってきました。そして、先生は私たちを琵琶湖の真ん中へ行かせました。琵琶湖はとても広くて、空の果てが見えて、海のようにです。

京都にいる間、日本人と話したり、遊んだり、勉強したりしていました。それは将来、役に立つことになります。日本・日本の文化をもっと知っているのはとても楽しかったです。このプログラムに参加させていただき誠にありがとうございます。

## 京都サマープログラム 2019 のレポート

ハノイ国家大学外国語大日本言語文化学部 2 年生

グエン・テイ・フォン・リー

私の名前はグエン・テイ・フォン・リーです。ハノイ国家大学ハノイ校外国語大学から来た留学生です。学部では日本語や言語文化を勉強しています。私は、日本語を勉強しているので、いつも日本へ行きたいと思っていました。京都大学のサマープログラム 2019 に参加することができて、本当に嬉しかったです。このプログラムの参加者はいろいろな国から来ているので、友達もできて、それぞれの国の言語や文化などを勉強することができました。みんなはそれぞれの国の言語で話していたので、楽しかったです。最初は誰に会うにしても恥ずかしかったのですが、日本人の先生とサポーターさんたちが手伝ってくれたおかげで、すぐに親しくなることができました。2週間という期間は長いと思っていたのですが、京都に慣れてからは、2週間が本当に短く感じました。みんなと別れたときは、とても寂しかったです。

わたしは、日本に来るのは今回がはじめてでした。日本は緑が多くて、交通も安全です。日本人は親切で、優しかったです。日本で過ごした2週間の間には、いろいろな人のお世話になりました。わたしたちは勉強もしなければなりませんでした。観光した時間も多かったです。プログラムでは、株式会社ナベルや琵琶湖へ見学に行きました。それに、京都では金閣寺や伏見稲荷などへ行きました。日本はすごく発展していながら、古くからの伝統を守ることができると感じました。

そして、日本語の授業や先生たちの講義も忘れられない思い出になりました。浦木先生の日本語の授業では、サザエさんのアニメを見て、日本の文化についてよりいっそう知ることができました。講義では、日本の経済や文化や社会に関する知識を深めることができました。講義に関する活発な意見交換によって、理解をより一層深めることができました。最後の合同発表はチームワークが重要でした。同じグループになったひとたちと一緒にアイデアを考えて、発表を準備しました。合同発表の時間には、いろいろなテーマに関する発表を聞くことができ、面白かったです。

日本での滞在は短かったのに、自分自身が成長する感じがありました。はじめて、家から遠いところに住んで、新しいことも経験しましたが、ほとんど自分でやりとげることができました。本当に忘れられないことです。最後に、心から感謝いたします。

## 京都大学の記憶

ハノイ国家大学外国語大日本言語文化学部 2 年生

チャン・ティ・ゴック・アイン

古いものや場所が好きな私は、大学に入ってから、日本語を勉強し始めて、京都大学で学習したいという思いを持っていました。そのきっかけで、「KSP 2019」の情報のメールをもらった時、ためらわずに参加する事を決めました。

初めての出国なのでたくさんの期待を持っていました。空港を出たばかりの瞬間、西島先生は笑顔で迎えてくれて、待ち合わせ場所のスターバックスに案内してくれました。京都に来て一日目、天気が想像以上に暑かったのですが、各国の皆と出会えてすごく面白かったです。

初日のテストの後に、京都大学の学生がキャンパスツアーに連れていってくれて、学校についてたくさんの面白い事を紹介してくれました。来日する前と来日の後、京都大学のイメージは大きく変わりました。キャンパスは自分の学校より想像できないくらい広くて、綺麗でした。どこへ行っても、緑が多くて、天気が暑くても不愉快な感じは全くなかったです。

来る前、みんなと仲良しになれるかどうか不安でしたが、毎日寝られないほど楽しい話をして友人になりました。旅館で台湾のしょうかさんと会った瞬間は今までも覚えていて、どのぐらい嬉しかったか忘れられません。シンガポールのみなさんと一緒に遊びに行って、食堂で一緒にご飯を食べて、新しい友達をつくることができました。そして、京都大学のサポーターのおかげでたくさんの素晴らしいところに行くことができ、美味しい食べ物を食べることができました。

このプログラムでは、たくさんの面白くて新しい体験がありました。それは、一人で電車を乗ることや和菓子を作ることやナベル会社に行くことや琵琶湖の美味しい水深 40 メートルの水を飲んでみることなどです。そういうことはこのプログラムに参加しないと体験できないと思います。帰国したら、誇らしげにこんな珍しい経験についてぜひ友達と話したいです。

そして、一番印象に残ったことは、日本はどんな国か日本人はどんな人かと以前よりも分かるようになったことです。日本は電車が便利で、人が温かくて、食べ物が美味しい国だと思います。そのため、自分の国は今の状況はどうかと振り返り、たくさんことを理解しました。京大食堂の料理を作る方法をみても、日本がどうして世界トップの国である理由がわかります。

もうすぐ帰国しなければならない時に、毎日 10 分ぐらいかかる学校への道が恋しいです。皆と歩いて、食べたり、話したり、笑ったりしたことは、本当に忘れられない記憶になりました。京大という学校だけではなく、温かい感じをもたらす所にぜひ帰ってこようと思っています。

### 京都大学サマープログラムの感想

インドネシア大学人文科学部2年生

ドゥウィナ・ユリアタマ

今年京都のスーマプログラムに参加させて頂き、京都大学に感謝申し上げます。京都大学のサマープログラムでは、色々な活動をしました。例えば、琵琶湖博物館や日本企業の訪問、日本語の授業、そして英語で日本について(日本の美学と食物ロスの削減)など一般的な講義を受講しました。私にとって講義はインドネシア大学で習ったこともありますが、まだ知らないこともあり勉強になりました。このプログラムの14日間で、私はいろいろな経験をすることができました。初日にそれぞれの国からの友達に会いました。シンガポール、タイ、ベトナムと台湾などから来た人たちです。メンバーは全員、近くの旅館に泊まりました。さわや本店という名前です。私は台湾とシンガポールの人と一緒に部屋に泊まりました。コミュニケーションに問題がありましたが、1時間くらい話すだけでもう仲良くなりました。次の日、私たちは、日本語のクラスがありました。私のクラスのレベルはレベル2にあるので会話に焦点を当てます。下橋先生が日本語を教えてくださいました。下橋先生の楽しく辛抱強い教え方をしてくれたので、生徒たちは先生に教えられて幸せでした。最後は、京都大学の紹介と歓迎会で終わりました。



歓迎会にはそうめんを楽しみながら様々な国の友達やサポーターと話しをする時間がありました。8月1日、日本語の授業を受けてだけではなく、その日は英語で日本の古典文学における美学の講義が始まりました。湯川先生の授業はとっても充実していたので、たくさん勉強になりました。日本語クラスと一般的なクラスがありますが私たちはほかの活動もあります。いくつかの色々な場所を見学しました。株式会社ナベル、琵琶湖博物館そして滋賀県立大学。8月2日に株式会社ナベルを見学し、ナベルの会社についての話を聞いて、スーパーマーケットに配布される卵の選別方法を観察しました。8月6日に私たちはバスで琵琶湖博物館と滋賀県立大学へ行きました。琵琶湖の湖で見つかった魚の種類を見ました。有名な魚はナマズです。インドネシアにもナマズはいますが、名前が違います。レレという名前です。その後、滋賀県立大学へ行って、琵琶湖の環境変化を勉強して、船に乗って琵琶湖を見て顕微鏡で琵琶湖のプランクトンを観察しました。それから私にとって幸せな日は日曜日の自由時間です。日曜日にサポーターは遊びに行く場所3つの選択肢を提供しました。京都、奈良と大阪。私は大阪に行くことにしました。その日の大阪への活動で、私たちはたくさん場所に行きました。例えば大阪歴史博物館、大阪城、天神橋筋、梅田スカイビル、道頓堀。私が好きな場所は、大阪歴史博物館です。インドネシアで学んだことがあるのでその場所に行くことができうれしかったです。このプログラムは本当に楽しかったです。また、一人で外国に行ったのは初めてでした。また、さまざまな国の友達やサポーターと知り合うことができうれしかったです。ありがとうございました。機会があればいつかまた京都へ行きたいです。

### 恋しくなるようになった

インドネシア大学人文科学部2年生  
ズルカルナイン・ルスディ・フィキー

先月インドネシア大学の日本語の先生が LINE グループで京都大学のサマープログラムの案内を提供してくれたとき、興味を持ちました。でも先生に伝えるまえに、すぐに両親と相談しました。そのときの相談はあまり長くはなかったのですが、両親がこのサマープログラムに参加することに同意して、参加が決まりました。相談は短かったのですが、参加したい理由はちょっと長くなります。まず、大学生の時間がもう2年間ぐらいしかない。まだ学生であるかに関わらず、このような機会はかならずしもふたたび来るとはかぎらないのです。次は日本語と日本の文化を日本人から勉強したいと思いました。三番目の理由は、毎日、日本語と英語の会話をできたことです。最後の理由は、ASEAN と日本人たちとのネットワークを広げたいと思ったからです。出発前に、ファイルで活動を見たときには、このプログラムは参加者にとってとても忙しくなると思い、感動しました。今このレポートを書いているときには、このプログラムはほぼ修了に近づいており、本当に充実した気持ちです。プログラムの期間中には、いろいろな面白いことがあります。先生達とサポーターさんは、本当に親切な人たちだと思いました。ですから、もし将来に京都へ行くことができれば、プログラムの活動や食堂が恋しくなるでしょう。

日本語の授業はちょっと難しく、古い日本語とそのときに日本人の考え方も学びました。面白いことは、講義が日本語と日本文化のほかにもあって、学際的な事柄を勉強できることです。特に、印象に残ったことは二つあります。まずナベルという会社へ見学に行きました。途中で

たくさん歩きましたが、会社でスピーチを聞くことで考え方を広げることができるようになりました。さらに、ナベルの社長に質問をする機会があって、嬉しかったです。社長の答えは今でもしっかりと覚えています。そして8月4日、みんなで大阪へ行きました。大阪チームは参加する学生とサポーターさんがとても面白かったです。初めて大阪に行って、一日中にいろいろな所へ行きました。最後にこのプログラムはとても楽しくて、今でも強く印象に残っています。西島先生とサポーターさんたち、本当にありがとうございました。お疲れ様でした。インドネシアへ行くことがあれば、私に連絡してください。

### 京都大学サマープログラムの感想

インドネシア大学人文科学学2年生  
ノリー・フィトリア・イルワン

今年の京都サマープログラム2019に参加させていただき、本当にありがとうございます。いろいろな日本の活動を学びました。インドネシア大学のフィキーさん、ディジェさんと一緒に行きました。様々な国の友達とも出会いました。それはシンガポール、タイ、ベトナム、台湾から来た人たちです。全員優しい人々です。京都大学のサポーターも優しいです。旅館にチェックインした後、綺那さん、ディジェさん、フィキーさん、エルトンさんと平安神宮に行きました。京都の景色はきれいでした。日本語レベル2クラスの下橋先生は優しくて明るい人です。下橋先生に文法や会話を習いました。下橋先生の授業はわかりやすかったです。彼女はレッスンで私をたくさん助けてくれました。そのクラスに色々な国の友達と会いました。みんなで日本語を学ぶのは大変でしたが、楽しかったです。最後の日のクラス、下橋先生に手紙を書きました。下橋先生は手紙を受け取ってとても喜んでくれました。これから、日本語を学ぶのもっと頑張ります。琵琶湖はとても楽しい場所でした。初日、琵琶湖疏水に行きました。琵琶湖疏水の水を飲みましたが、とても冷たい淡水でした。それで、ボトルを買いました。8月6日、琵琶湖博物館へ見学しました。琵琶湖の中にはたくさん動物がいます。大きなまづを見て、びっくりしました。博物館で動物の頭の骨を描きました。骨を描いたことがなかったので楽しかったです。次は滋賀県立大学を見学しました。後藤先生に琵琶湖について習いました。船に乗って琵琶湖の中心へ行きました。琵琶湖は日本最大の湖です。琵琶湖の水を飲んでみることはすごい経験でした。湖水を飲むのにフィルターはいりませんから、便利です。もう一度飲みたいです。日曜日、大阪へ行きました。大阪はにぎやかな町です。色々なところへ行きました。例えば大阪歴史博物館、大阪城、天神橋筋、梅田スカイビル、道頓堀です。すてきな所で買い物をしました。みんなと写真を撮りました。道頓堀の川で船に乗りました。楽しかったです。最高の旅行でした。次回また大阪へ行きたいです。このプログラムは4つの講義がありました。飯田先生の「高度経済成長と水俣病」講義が面白かったと思います。講義は、発見から60年後の水俣病の発生についてでした。水俣病のドキュメンタリー映画を見たとき、悲しかったです。人文学の学生として、この講義のトピックは面白くて、ぜひ学びたいです。忘れられないのは、友達と楽しい時間を過ごしたことです。一人で海外に行って多くの国の友達ができしたのは初めてでした。最初はとても緊張しました。しかし、このプログラムを振り返るたびに、新しい友達といつも笑ったことを思い出します。サポーターや友達と離れるこ

とは悲しいです。インドネシアに帰りたいですが、京都に残ることはできません。機会があれば、また京都へ行きたいです。

## 私の声

シンガポール国立大学商学部 1 年生

チャム・イェン・ヘーン

5 月 9 日から 5 月 28 日まで、私は日本で休暇を楽しみました。シンガポールでは英語教師をしています。たくさんの日本人を教えてきたので、みんなと友達になりました。休暇の中で多くの場所を訪ねました（東京、松本、大阪、京都、博多、宮崎）。日本人の友達とたくさんの事を教えてくれました。例えば、18歳の天王寺高校生が私を運動会に招待してくれました。さらに博多に住んでいる友達は私に日本の社会規範を教えてくれました。私はいつも日本文化への興味を持っていました。この休暇は日本への興味を高めました。休暇の中で自分の日本語勉強を始めました。

5 月 23 日にプログラムの E メールを受け取ったので、私は大喜びしました。遂に日本の大学で勉強ができます。最初、「シンガポール国立大学」は私の申請を拒否しました。理由は私の日本語能力が低かったからです。しかし、最終的にはこのプログラムに参加できるようになりました。受け入れのニュースを読んだので、私は自分の日本語の勉強の量を増加させました。7 月 27 日はプログラム開始日、他の参加者を見た時、私は恐れしました。みんなの日本語能力は高いものの、自分の能力が比較的lowだったからです。その為、私は他の生徒と話をしなくなりました。私達は日本語クラス、日本社会科学講義と研修旅行があります。他の生徒と時間を過ごしたから、私は他の人の背景と国の文化を理解しました。他の生徒がたくさんの事が教えてくれました。そして一部の誤解が払拭されました。みんなはすごく優しいので、このプログラムに参加して良かったです。

一番いい経験は旅館での滞在です。旅館はたくさん多くの設備があります。例えば、旅館の中には銭湯と座敷があります。これらのものあるのは日本だけです。この経験はシンガポールの経験とは異なります。伝統的な日本人の生活を理解しましたので、日本文化をもっと理解できるようになりました。この旅館の位置はすごく便利です。そして通学が簡単です。でも、公共交通機関はシンガポール人には高かったです。シンガポールで列車を使ったら、その運賃は180円ぐらいです。

私の大好きな活動は学外活動でした。私達は多くの場所を訪ねたから、みんなの頭は知識でいっぱいになりました。「NABEL 会社」、「新大阪」と「滋賀県」訪問はとても教育的でした。このプログラムから、日本語と日本文化をもっと学ぶことができました。シンガポール帰ったら、日本に対する新しい理解が深まると信じています。

## 初の交流

シンガポール国立大学理科部 2 年生

エルトン・ライ

このプログラムに参加した理由は日本人の友達をつくりたかったからです。それに、日本の文化をもっと習いたかったからです。小さいときから、日本の文化に興味があったので、それを体験しかったのです。たとえば、日本人は他の人を呼ぶとき名前で読んだら、それは仲がよいという意味なのか。町で歩きながら食事を食べることができるかなどです。日本の文化をいろいろ習いたかったので、このプログラムに参加しました。できれば将来、日本で働きたいです。

日本では、部活はただの放課後の活動ではありません。学生にも規律を教えます。例えば、甲子園へ行きたい野球選手は学校前と学校後練習しなければなりません。簡単ではなくても、心があったら、なんでもできます。“がんばる”の意味も習いました。意味は努力すれば可能であるということです。日本人は頑張れば、できるようになると信じます。日本の古典文学も習いました。湯川先生の講義はとても面白かったです。特に印象に残った出来ごとは古今和歌集からの“うつせみの 世にも似たるか 花ざくら 咲くと見しまに かつ散りにけり”という和歌です。意味は、全てのことには終わりがあるからこそ大切だということです。このプログラムのように、すぐに終わりますから、この瞬間が大切です。

日本の文化だけではなく、ほかの国の文化も習いました。特にびっくりしたものはインドネシア人とタイ人とベトナム人の英語は上手なことです。インドネシア人は、宗教があるので、だいたい毎日の朝と昼にお祈りをしなければなりません。タイ人は、面白いものを見たとき、555と書きました。555はタイ語でハハハの意味です。ベトナム人の結婚式は、婿は嫁を迎えるとき、花嫁介添人にお金をあげなければなりません。中国と同じです。日本では関西弁をならいました。‘なんで’をいうとき、‘で’の調子は上がっていいです。それに、食事のとき、友達に失礼なので、日本人は携帯電話をつかいません。僕はいいマナーだと思います。

プログラムのはじめのオリエンテーションは日本語で行いましたので、ずいぶん怖かったです。ただ、運が良くて、みんなはだいたい英語、中国語が話せます。今は、日本人と話すとき、分からないこともあります。おもしろい会話があるけれど、分からなくて、ちょっと残念です。困った時、学生は私を助けてくれました。ここ数日間で、日本語はだんだん上手になりました。もっとトピックがあります。このプログラムに来てくれて本当に感謝しています。

## 「一期一会」

シンガポール国立大学人文社会科学部 3 年生

トレイシー・チュア

私はもうすぐ大学を卒業します。だから、最後の夏休みを楽しんで過ごそうと思っていました。そして、中学生の時から日本文化と日本語の興味を持っていたので日本に行く機会をいつも探していました。その上、このプログラムの活動で ASEAN の人と会える機会もあります。ただし、そうは言っても、プログラムの前はちょっと緊張していました。日本の夏はとても暑いので、きちんと生活できるのかがわかりませんでした。また、どんな活動に参加するか、友達

ができるかどうか心配していました。でも、このプログラムの間に毎日楽しい活動に参加し、友達もできてとても嬉しかったです。

授業はカジュアルそしてクリエイティブに日本語を使えるように「サザエさん」というショート番組を見ました。教室で隣のインドネシアのフィキさんがいつも私たちの分からないことを教えてくれて「頑張って」と言ってくれました。最後の授業で「腰辨頑張れ」というサイレント映画を見て、自分のスクリプトを作りました。とても嬉しかったです。また、この2週間の間に、日本語の勉強だけではなく、他の国の人には色々なことを私に教えてくれました。私は、他の国の人と部屋を一緒に使いました。その時、国によって別のライフスタイル、意見と習慣があることがわかりました。例えば、自由な時間に、台湾のショウカさんとインドネシアのノリーさんとディジェさんが国の文化や好きな食べ物を教えてくれました。私は、他の国の人と一緒に住んだことがなかったので、この二週間はとても面白い経験でした。

一番良い経験はサポーターさんと話したことです。電車に乗る時間や食事をする時間に、サポーターさんと一緒に面白い会話をしました。日本語で話す時、サポーターさんが我慢強く聞いて話してくれたことに、とても感謝しています。発表の相談中、難しい言葉を表現したい時、みんなが理解できるように、お互いに助け合いました。様々な国の出身で、普段はそれぞれ違う言語で話しているのに、日本語でたくさんのおトピックを話すことができ、嬉しかったです。このプログラムのおかげで、日本について深く知ることができました。色々な忘れられない経験を積んでとても嬉しかったです。京都のことを考えるときに、このプログラムを思い出しましょう。いつも感謝しています。

### 初めての留学の思い出

チューラーロンコーン大学文学部1年生

チャニサラ・チャイヤニン

私は日本語の勉強を4年間も続けてきましたが、自分の日本語に自信がありません。もっと自分の日本語を上達したかったから、大学の先生から京都サマープログラムのことを聞いて、このプログラムに参加することになりました。

私は留学したことがないので、今回の京都サマープログラムは私の初めての留学です。2週間前、私はとても緊張していました。日本語が話せるか、友達ができるか、日本語の勉強は難しいか、心配しました。日本に着いた時、私はとても緊張していましたが、関西国際空港から京都まで、日本人のサポーターのみなさんはとても優しく、私に色々話しかけてくれて、緊張感がだんだんなくなりました。

最初の日、アセアンの留学生のみなさんに初めて会いました。みなさんは別の国から来ています。そのため、相手に言いたいことを伝えることができるように日本語や英語などを使いました。例えば、日本語が分からない時には、英語を使います。そういうわけで、みなさんは優しいなあと思いました。アセアンの留学生のみなさんと出会って、仲良くなって、とても嬉しかったです。

クラス分けの結果によって、上級のクラスを受けるようになりました。最初はちょっと心配しましたが、白方先生のおかげで、色々なことを学びました。難しい言葉や、日本の文化など

を学びました。授業の内容はすごく難しいと思いましたが、白方先生はゆっくり教えてくれて、分からない言葉があったらいつも説明してくれて、とても感謝しています。

毎日の放課後、日本人のサポーターのみなさんはいつも私達と一緒に遊んで、行きたい所に連れて行ってくれました。日本人のサポーターさん達は私達のことを気にかけてくれて、旅館に遅く帰っても、サポーターさん達はずっと私達を見守ってくれて、感動しました。そして、日本料理を食べること、お祭に行くこと、日本のカラオケをやること、花火をすることなど色々なことを経験しました。日本人のサポーターさん達のおかげで、今回の留学はとても楽しかったです。その上、日本人のサポーターさん達は易しい日本語で色々な話をかけてくれて、私は日本語を使う自信をもっと持つようになりました。

今は、もうすぐプログラムの終わりになります。私は色々なことを学んで、自分の日本語を上達できたと思います。今回の京都サマープログラムの思い出はずっと私の心に残っています。

### かけがえのない経験

チューラーロンコーン大学文学部1年生

ブンサリンカーラノン・ナッチャノン

私が日本に到着した日の温度は36度でした。タイの夏は36度を越えるのは珍しくありませんが、あまり家を出ない私には正直、とても苦しかったです。日本の夏の暑さに慣れるのに3日間くらいかかりました。最初はこんな暑さの中じゃ楽しくないだろうと思っていましたが、最後の日まで毎日が楽しくて、今は本当に国に帰りたくありません。

ここにいる間に、上級日本語授業を受けさせてもらいました。クラス分けテストがあまり難しくなかったから、授業の難易度と内容はどうなるか、少し気になっていましたが、実際に授業を受けてみると、授業は興味深くて楽しかったです。エッセイや小説を読みながら、その内容を解釈する日本語の授業は今までしたことがなかったから、最初は少し不安でしたが、上級クラスを担当する白方先生のペースがちょうどよかったので、私は楽しみながら、勉強することができました。授業中に質問があるとき、白方先生やサポーターの皆さんに声をかけたら、皆がやさしくその質問に答えてくれました。そのおかげで授業の内容がわかりやすくなりました。私は感動しました。

そして、この12日間の間に何回も講義に参加させてもらいました。正直にいうと、面白い講義もあれば、面白くない講義もありました。文学部の学生の私ですから、私にとって最も面白かったのは「源氏物語」の講義と「日本伝統の美意識」の授業です。将来の文学部の勉強に役に立つと思います。

勉強のことはもちろん大事ですが、人間関係も大事です。このサマープログラムのおかげで、「国境を越えた友情」というものを体験することができました。このプログラムの留学生は皆、違う国から来て、普段は違うことばで話していますが、このサマープログラムに参加したら、お互いの文化やことばで交流して、友達になりました。留学生だけではなく、京都大学のサポーターさんたちも私たちにやさしく話しかけてくれたし、いろいろなところに連れて行って、このプログラムならではの素敵な経験をたくさんいただきました。

「幸せな時間はいつも早く流れる」と、私はそう信じています。ここにいると時間の流れが早く感じます。それはここにいることが幸せだからです。素敵で幸せなかけがえのない2週間を私にくれて本当にありがとうございました。

## 京都と夏と私

チュラーロンコーン大学文学部1年生  
ウィラウッチポン・パウラン

今回のプログラムはそろそろ終わります。二週間前、わたしにとって留学は初めてなので、外国で生活できるのか、日本人のサポーターさんとアセアンの友達と意思疎通できるのかどうか大変心配でした。しかし、関西空港に着いて西島先生とアセアンの人に会って、私は安心しました。皆さんが優しかったからです。

京都大学は広くて、雰囲気良くて、いつも蝉の音がしていたところでした。タイにも蝉はいますが、これほど大きい声ではありませんでしたので、初めて蝉の音が聞こえた時、私はすごくびっくりして、今でも感動しています。私は京都大学が好きで、特に一番好きなのは食堂です。食堂の料理は安いし、美味しいし、食べている時に外国人の友達とも話せるから、いつも楽しんでます。

私はこの留学で色々なことを学びました。日本語のクラスでは母語話者の先生と、京都に関する記事と小説と作文で日本語を勉強し、英語の講義では「もったいない」というスピリットについても考える機会を得ました。また、日本人の美意識も勉強し、チンパンジーについて勉強することができて、全部楽しかったです。

この二週間で一番好きな日は交流の日でした。その日、サポーターさんたちとアセアンと台湾の友達と一緒に奈良へ行きました。サポーターの愛さんと菜穂さんと齊藤さんは、わざわざ朝から私達が浴衣を着るのを助けてくれて、私達を感動させてくれました。その日は暑く、浴衣を着ていたの、ちょっと歩きにくいと思ったけれど、サポーターさんたちの手伝いのおかげで、私達が楽に旅行できて、全部いい思い出になりました。

もう一つの感動していることは皆さんの優しさです。サポーターさんたちも留学生の友達もいつも笑顔で、色々なことを助けてくれました。恥ずかしがり屋なわたしにとって、そのような優しい人達に会えて、友達になったのは最高の夢だと思います。

今回の留学はそろそろ終わり、皆さんはそれぞれの国に帰らなければなりません。皆さんとまた会う機会がないかもしれませんが、留学生の友達と日本人のサポーターさんたちとの友情は終わらず、永遠に続いていくと私は信じています。

## 京都大学の思い出

チュラーロンコーン大学文学部1年生  
ラムサム・ピチャー

私はこれまで日本に五回も来たことがあります。その中でも京都には二回来たことがあります

が、今回は前より特別です。私は二週間まるで京都大学の学生のように生活していました。毎朝大学へ行って、日本語を勉強したり、英語のレクチャーを受けたりしました。日本語の授業はとても難しかったです、新聞の読み方を勉強したり、面白い小説も読んだりして、いい勉

強になりました。そして、いろいろな読解にチャレンジしてみて、自分のレベルが分かりました。これからはもっと頑張って日本語を勉強しようと思います。英語のレクチャーはとても面白かったです。特にチンパンジーの研究の講義が一番面白いと思いました。それだけではなく、私は毎日アセアンの友達と日本人のサポーターと食堂で昼ご飯を食べながら、いろいろなことを話しました。みんなが自分の国の文化や言葉について日本語で話して、すごく楽しかったです。京都ではタイにいる時よりも楽しい毎日をすごせました。そして、日本の文化についてもたくさん勉強しました。例えば書道の練習やわびさびについての勉強です。また、日本の伝統的な神社やお寺などへ行って、京都の景観を楽しみました。私が一番好きなのは伏見稲荷です。そして、日本の夏らしい活動もしました。暑い中、みんなとお祭りへ行ったり、鴨川で花火をしたりして、いい経験になりました。最後に、このプログラムで感動したことは日本人のサポーターの皆さんと先生です。サポーターの皆さんは優しく、いつも日本語で話しかけてくれました。何か分からないことがあれば、いつも易しい日本語で説明してくれました。そして、毎日の放課後に私達をいろいろな場所へ連れて行ってってくれました。大阪へ行った時には、いろいろな面白い場所を案内してくれました。遅くまで一緒にいて、旅館まで送ってくれました。サポーターの皆さんの優しさは私の印象に残っています。そして、西島先生が初日に私達を関西空港まで迎えに来てくれて、安心しました。また、いろいろお世話になって、本当にありがたかったです。確かに二週間は短い時間ですが、その短い時間の中で私はさまざまなことを勉強して、とてもいい思い出がたくさんできました。サポーターの皆さんと先生とアセアンの友達の皆さんにまた会えるかどうかは分かりませんが、私は皆さんと一緒に作った素敵な思い出を絶対忘れません。

### 最高のサマープログラム

チューラーロンコーン大学文学部2年生  
タムウィタワット・パビット

私は日本へ5回も来たことがあります。しかし、今回はこの先からが違いました。京都サマープログラムの最初の日から印象に残っている出来事があります。特に印象に残っていることは四つあります。

一つ目に、ある日、私たちはブックオフという本屋へ行きたかったのですが、そのことをサポーターの黒田さんに伝えたところ、黒田さんは「一緒に行きましょう！」と言ってくれました。だから、私たちと黒田さんは一緒にブックオフへ行きました。ブックオフではいろいろな本がありました。私たちは買い物を楽しみすぎて、すっかり約束の時間を忘れてしまいましたが、黒田さんは私たちをずっと待っていてくれました。私たちは胸を打たれました。しかも、黒田さんは夜遅くだったのにも関わらず、私たちを旅館まで連れて行ってってくれました。

二つ目に、私たちの泊まった旅館は「旅館さわや本店」というところです。旅館のおじさんはとても優しくかったです。おじさんは私の国であるタイの本をたくさん持っており、タイに興味を持っていたので、私たちにタイのことをよく聞いてくれました。私はタイに非常に興味を持っている人がいると知って嬉しくなりました。私は私の国のことを教えたいと思いました。

三つ目は、大阪に行ったことです。私は大阪に行ったことがありましたが、また行きたいと思い、今回も京都大学のサポーターさんたちと一緒に大阪へ行きました。サポーターさんたち



は黒田さんや花さんたちです。ワタルさんも花さんもとっても優しかったです。二人は大阪周遊バスのことを教えてくれて、ずいぶんお金を節約できて、助かりました。そのうえ、大阪の旅行はとても面白かったです。見たことがないような素晴らしい景色を見ました。いい経験になりました。四つ目は、琵琶湖へ行ったことです。これまで私は琵琶湖へ行ったことがありませんでしたが、このサマープログラムのおかげで行くことができました。琵琶湖は思っていたよりも美しかったです。風がとても強かったので、気持ちが良かったです。私たちが湖の上で止まったとき、湖の水を飲みました。それはとても美味しく、ボトルウォーターのようでした。この時私は初めて湖の水を飲みました。この水の味をいつまでも覚えています。最後に、このサマープログラムは私のいい思い出になりました。いつまでも皆さんと京都大学を覚えています。

### 京都大学はいい思い出

チューラーロンコーン大学文学部1年生  
リムサーノン・ティップナパー

二年前、私は家族と京都に旅行に来ました。それ以来、私は京都が好きになりました。それで、京都大学サマープログラムについて聞いてから、ずっとこのプログラムに参加したいと思っていました。このプログラムでの、日本語のクラスや講義、アセアンの友達やサポーターさんについての感想を述べます。

一つ目の感想は日本語講義の内容についてです。私は日本語レベル4のクラスに参加し、京都についてのいろいろなエッセイ、新聞や小説を学びました。内容は難しかったです。知らなかった知識を勉強することができて面白かったです。そして、白方先生がいろいろな言葉や解釈法を教えてくれたことにすごく感動しました。二つ目の感想はプログラムの講義についてです。全て好きでしたが、一番好きだったのは「チンパンジー研究からみた人間の心の進化」です。どうしてこの講義が好きかというと、タイではこのような研究が少なく、聞く機会があまりないからです。この講義を受講してから、チンパンジーと人間がどのような関係があるかよく分かるようになりました。この研究がチンパンジーと人間の関係に興味を持っている人に役には立つと思います。三つ目はアセアンの友達についての感想です。お互いに話しかける時には英語で話したり、日本語で話したりしました。二つの言語を一緒に使うのは難しいので、最初はあまり通じませんでした。今はだんだん慣れて、通じるようになりました。お互いに言葉が通じるようになると、それぞれの国のことを教え合ったり、いろいろ話しかけたりすることで、仲が深まりました。そして、いい友達がたくさんできてうれしかったです。最後に、京都大学のサポーターさんがいろいろなことを助けてくれたことにも感想しています。例えば、放課後に私達タイ人はよく散歩するので、サポーターさんも一緒にあちこちに行って、遅くまで私達と散歩して、旅館まで送ってくれて、感動しました。もう一つは交流の時のことです。私は奈良に行きたいと思っていたので、奈良の交流プランを見て、「浴衣で奈良散策」というトピックが書いてありました。それを見て、自分でレンタルしなくてはいけないと思いました。しかし、サポーターさんに聞いたら、浴衣が無料だと答えてもらいました。サポーターさんがお金のことをちゃんと考えて気に掛けてくれたと思って感心しました。このプログラムは二週

間しかないのに、いろいろなことが学べて感動しています。いい経験といい思い出になりました。機会があれば、是非、京都大学に留学したいと思います。

### もう一つの大切な思い出

チュラーロンコーン大学文学部1年生

ウンナピラック・シリンドー

私は、日本に来るのは今回が5回目で、短期留学するのは今回を含めて3回です。京都にも来たことがあります。最初、このプログラムのスケジュールを見たとき、私はこのプログラムは授業しかないと思いました。日本人のサポーターともベトナム、インドネシア、シンガポール、台湾から来たみんなともそんなに話す機会がないかなと思いました。それに京都大学はきっとストレスな雰囲気があるだろう、ここの学生もきっと真面目な人だと思っていました。しかし、空港に着くと、二人の日本人のサポーターが温かく迎えてくれました。それから、毎日、日本人のサポーターの皆さんが声をかけてくれたり、一緒にご飯を食べたり、私たちがどこに行くにも一緒に行ってくれました。例えば、河原町、南禅寺、伏見稲荷神社、七夕祭り、奈良、カラオケにも連れていってくれました。それにウェルカムパーティーで素麺やお菓子を用意してくれたり、浴衣や花火を用意してくれたりしました。私はずっと日本の祭りに行きたくて、花火をしたくて、スイカ割りもしたかったです。このプログラムでこんなことができるとは思わなかったので、本当にうれしくて、楽しかったです。アセアンと台湾のみんなとも思ったよりたくさん話しました。英語を使ったり、日本語も使ったりして、たまには大変ですが、楽しかったです。それにみんなそれぞれの国の言葉を教えてくれたり、私たちタイ人もタイ語をみんなに教えたりしました。旅館で毎晩集まって恋愛の話をしたり、トランプをしたり、食事会をしたりしました。授業の内容は少し難しかったです、とても面白かったです。特に日本語クラスのおかげで京都のことをよく知ることができました。最終回の京都大学の入試もチャレンジできて、文章はよくわかりませんが、とてもいい経験だったと思います。琵琶湖でボートに乗ったり、琵琶湖の水を飲んだり、博物館を見たりしたので楽しかったです。英語の講義も話題がよくて、役に立つと思いました。西島先生も、白方先生も、アセアンと台湾の友達も、日本人のサポーターさんにも、お世話になりました。サポーターさんはみんな疲れたと思いますが、みんながサポーターという言葉らしく本当に私たちをサポートしてくれて、この素敵な2週間の思い出をくれて誠にありがとうございました。

## 感想

国立台湾大学日本語学科 2 年

葉湘荷

このプログラムに参加させていただき、本当にありがとうございました。京都大学のアセアンサマープログラムは、今年初めて台湾の学生を受け入れました。ただ一人だけ。その一人こそ私です。それを聞いた時、「一人なんて運が悪かったな」と思いましたが、今は感謝の気持ちでいっぱいです。

一人で外国へ行くのは、今回が初めての経験でした。アセアン各国の人々と交流したことがなかったので、実は少し不安な気持ちもありました。実際、日本人のサポーターさんの宮村さんに会う前は、「ここは日本だ！」という実感がありませんでした。しかし、最初に出会ったタイ人の4人は、出会った瞬間から優しい笑顔で迎えてくれて、ほっとしました。さわや本店ではルームメートのディジェさん、ノリさんとトレーシーさんたちと会いましたが、予想外なことに英語での挨拶でした。英語が苦手な私にとっては最悪のシチュエーションのように思えました。しかし、不幸中の幸いで、トレーシーさんは中国語ができますし、他のインドネシア人の2人も日本語で簡単なコミュニケーションが取れます。驚いたことに、ベトナムのアインさんまでも中国語が上手でした。

日本では台湾と異なり、二十歳で成人となります。私は今年の八月一日に、日本でも成人となりました。その日はシンガポールの皆さんと一緒に大阪新世界に行きました。ご飯もシンガポールの皆さんがご馳走してくれました。京都大学に行って、たくさんの人達と出会って、最高の誕生日プレゼントでした。台湾についての話もたくさん聞かれました。タイ人の皆さんは、タピオカに深い興味を持っていました。そして、齊藤さんとは台湾の政治の現状についての話をしました。私も宮田さんから日本と中国に関わる歴史を伺いました。奈良の博物館に行ったとき、松本さんに日本と中国の歴史の違いを教えてもらいました。一番聞かれたのは、やはり日本語学科に入ったきっかけです。そのきっかけは大学入学試験の数学でいい点数を取れなかったことです。入試の結果によって日本語を学ぶことになりましたが、今の私は当時数学を失敗した自分に感謝しています。なぜなら、そのおかげで、今私は京都大学で素晴らしい旅のいい思い出を作ることができたからです。心から感謝しております。

多文化共学短期〔受入〕留学プログラム 2019年度実施報告書

令和2（2020）年3月発行

編集・発行

京都大学アジア研究教育ユニット（KUASU）

京都大学国際高等教育院（ILAS）

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

電話（075）753-5678

印刷・製本 株式会社 あおぞら印刷

電話（075）813-3350